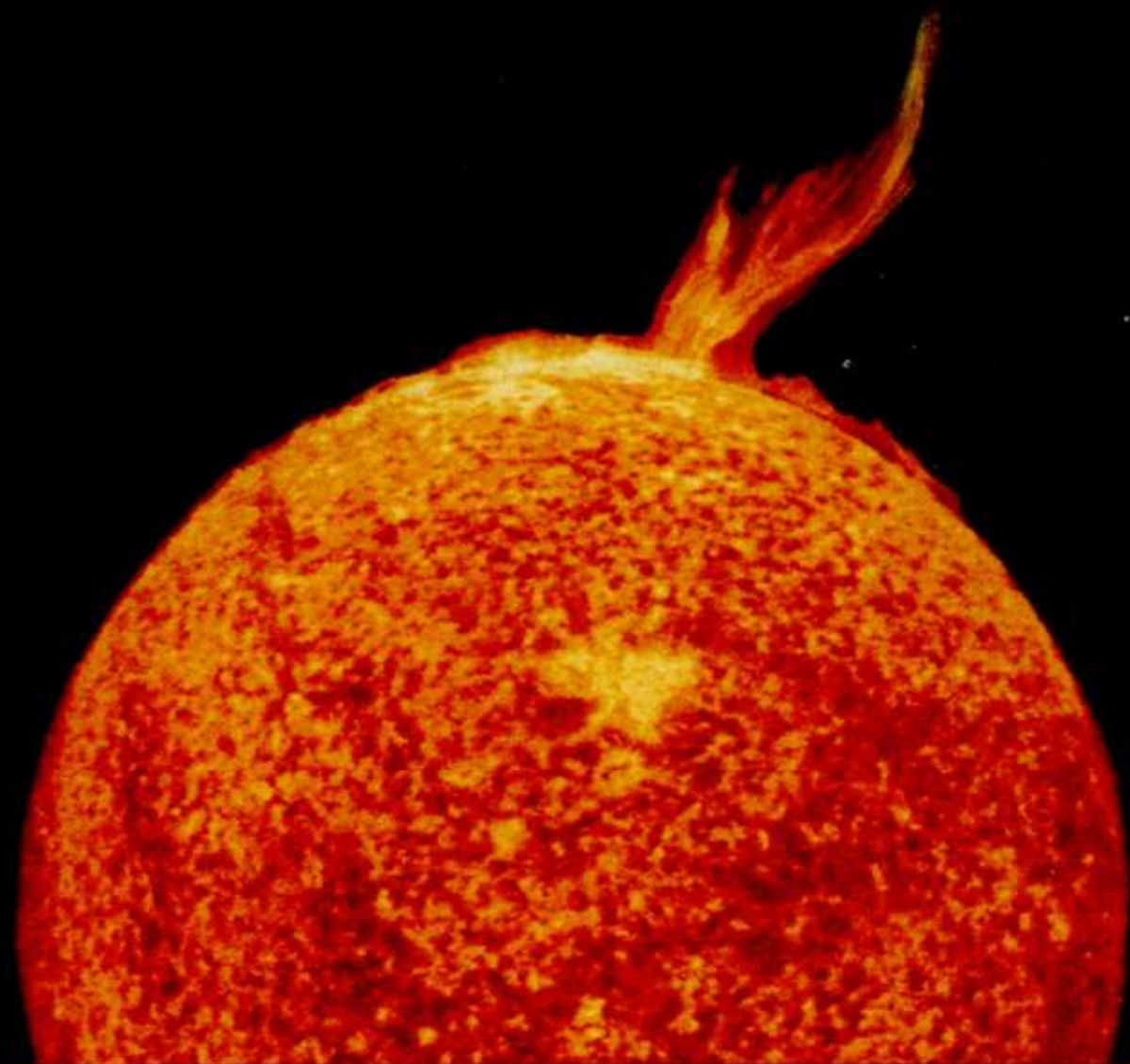
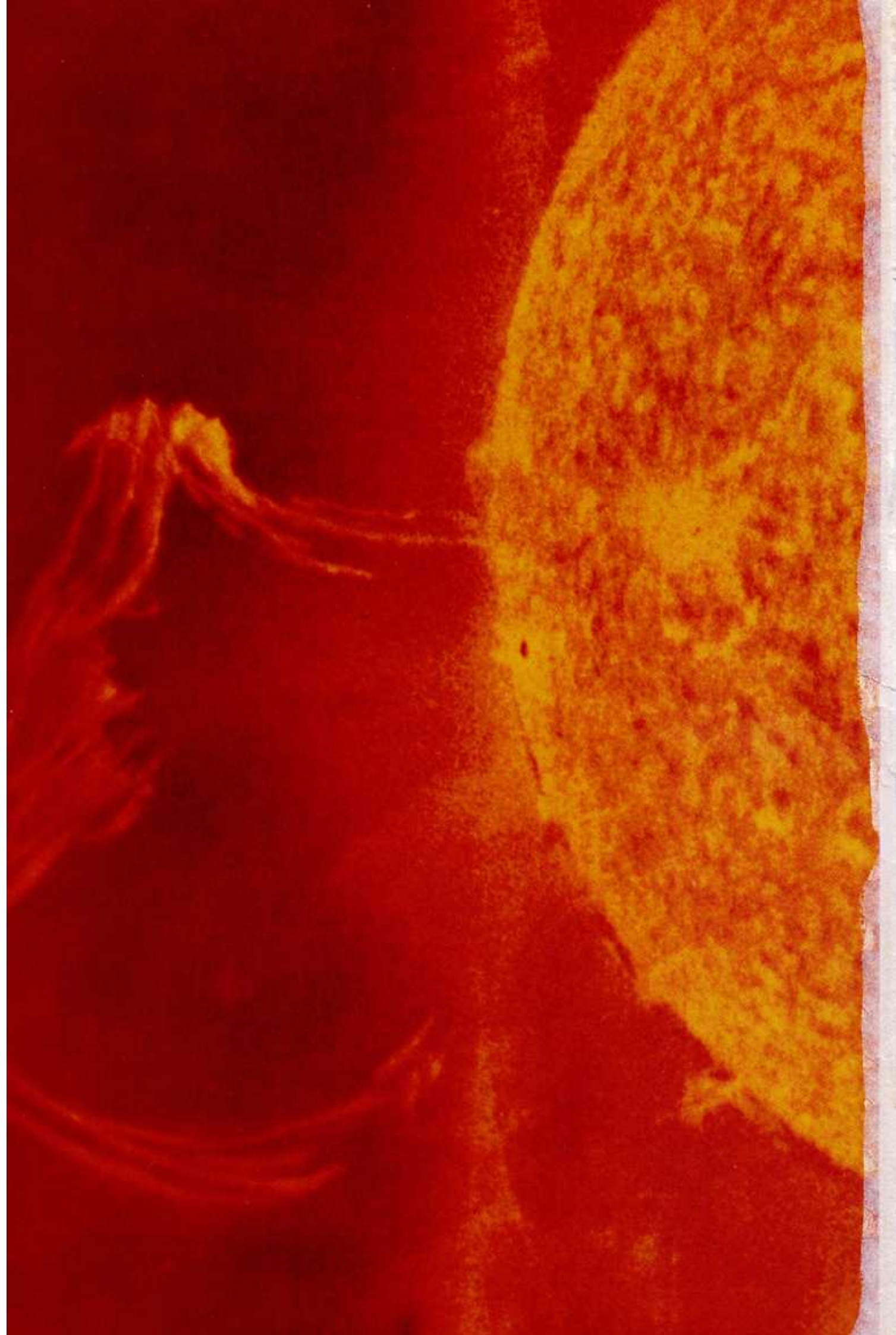


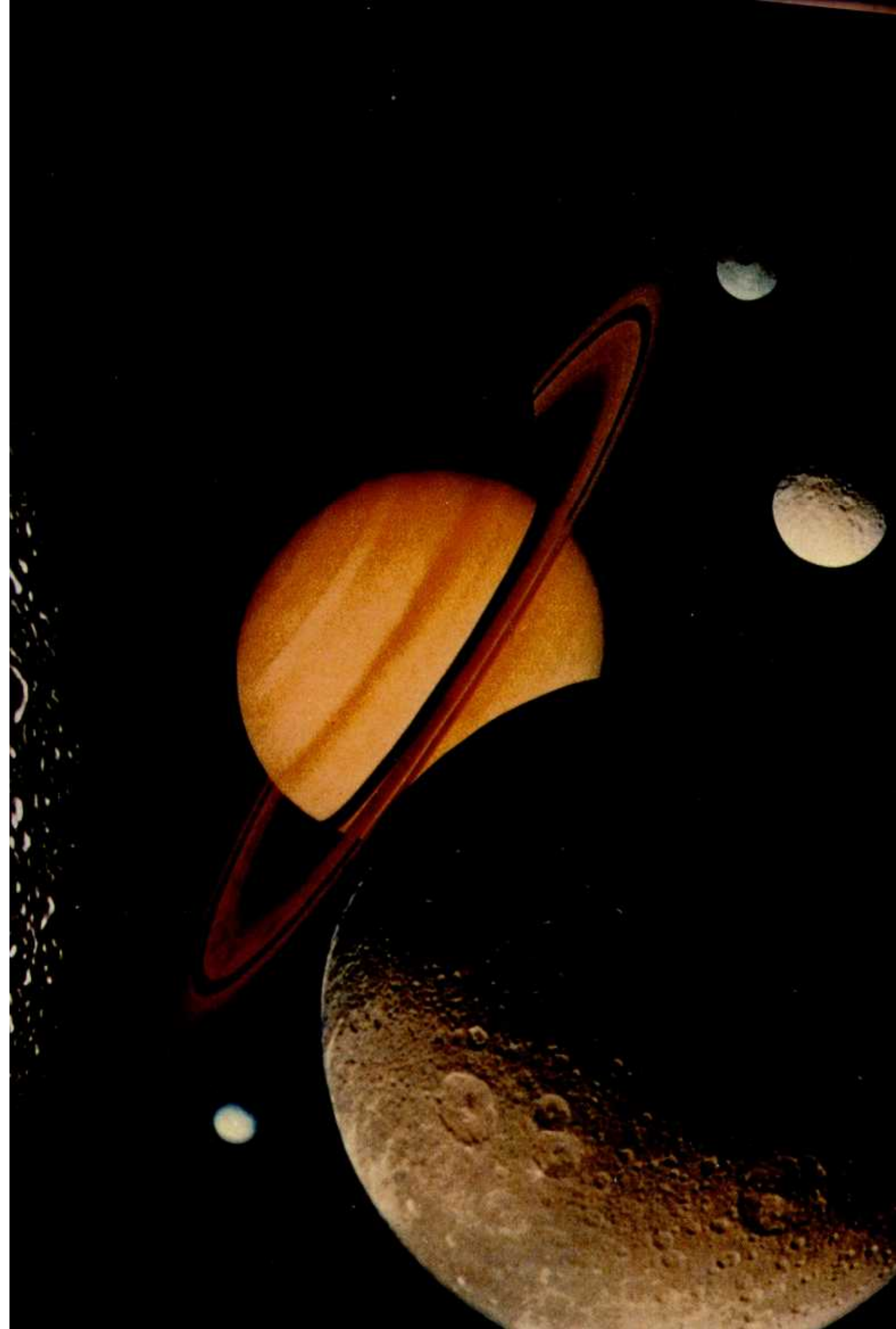


仏法と宇宙 を語る

第三卷

池田大作

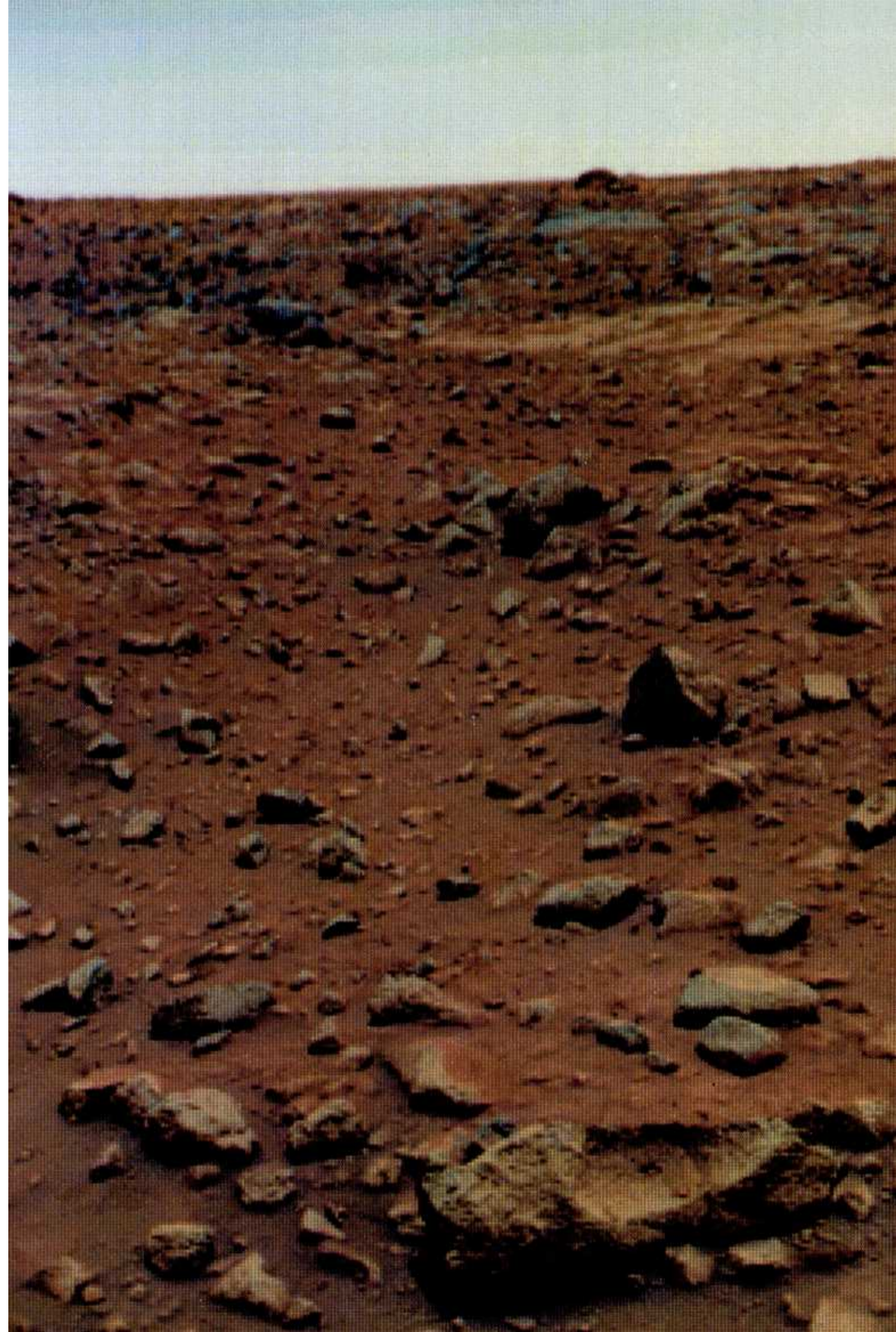


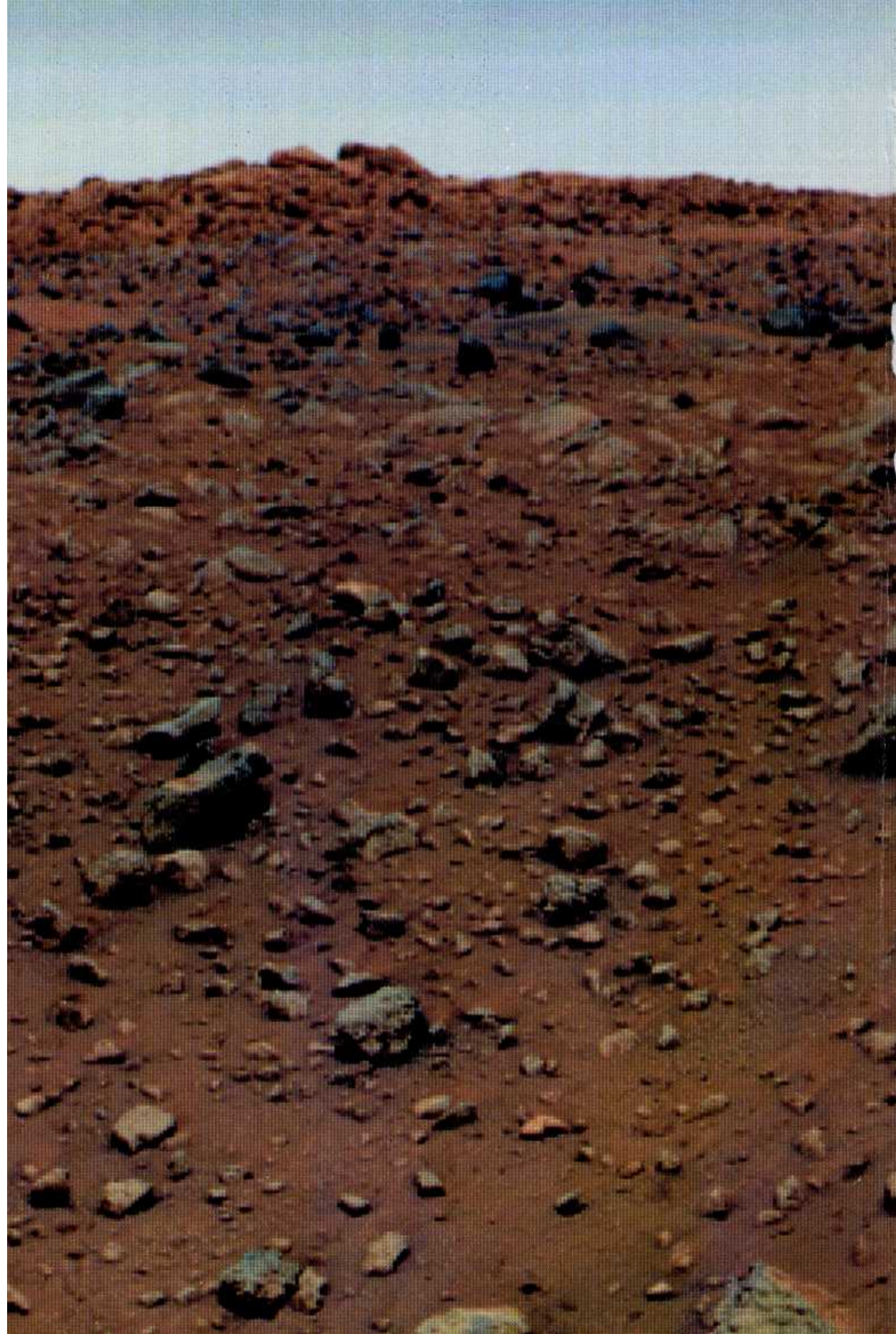


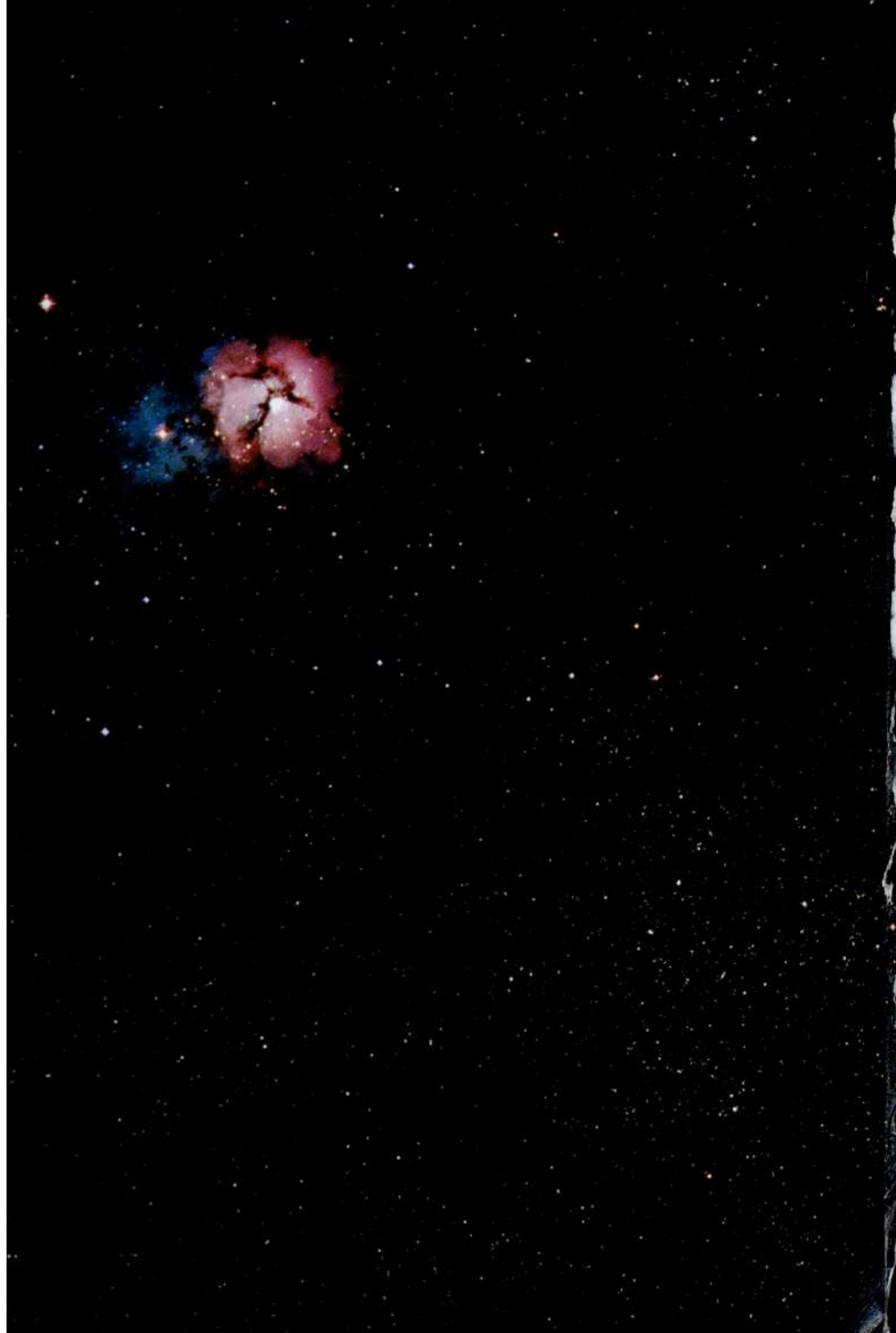
0011-000188-0516

定価1000円









☆ 第三卷 目次

第十章 太陽の誕生、人生と宇宙の詩

11

第十一章 宇宙の体験と「空」の哲理

73

第十二章 核の脅威と仏法の平和論

135

第十三章 宇宙に生死はあるのか

197

第十四章 仏法の宇宙観とガリレオ裁判

269

あとがき

318

注解 320

索引 i

「仏法と宇宙」を語る

第三卷

第十章

太陽の誕生、人生と宇宙の詩

本格的な宇宙時代の開幕

志村(司会) 最近の大きな話題の一つとしては、日本人初の宇宙飛行士の募集が始まることあげられますね。

木口 そうですね。私どもにとってもうれしいことであり、たいへんに話題となっています。

池田 宇宙飛行士は何人、募集するのですか。

木口 三人と聞いています。たぶんおおぜいの応募者があるのではないかと予想されています。

—— 当然、関心はたかいでしょうね。

池田 人類が初めて宇宙に飛びたった(一九六一年)のは、ソ連のガガーリン少佐が乗ったボストーク1号でしたかね。

木口 ええ、それ以来二十二、三年になるでしょうか。

池田 宇宙は二十世紀の象徴的な歴史の舞台になりましたね。

—— そう思います。日本にとっても、これから本格的な宇宙時代の開幕となっていくでしょう。

池田 二十世紀は、社会主義国家の誕生、核の出現、そして宇宙時代の開幕と、人類の視野が地球的規模にまで一変してきた時代となったわけですね。

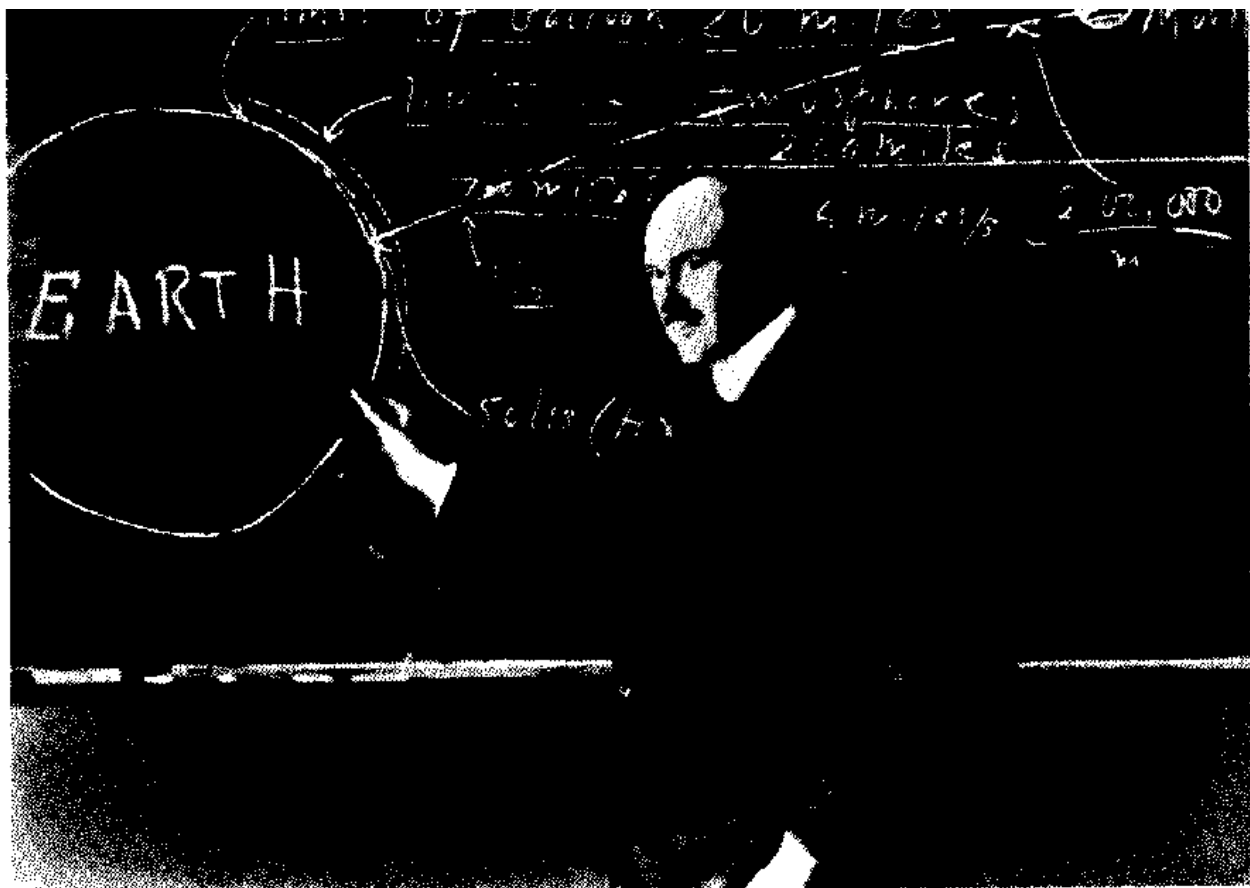
小さな視野に閉じこもっていては、もはや人類の自由と平和は論じられない時代に入ってきた。

この点が大事ですね。

—— そのとおりです。

この宇宙飛行士の募集には女性も応募できますが、最終的には、科学技術の研究経験が五年以上の人ということになるようですね。

木口 ええ、この選考を経て、五年後にアメリカのスペースシャトル*に搭乗すること



ゴダード教授は、1927年「将来、ロケットは月に到着するであろう」という論文を発表した。

になります。

池田 少年時代に読んだSFが、確実に現実化しつつあることに、うれしいやら、戸惑うような気持ちをおぼえますね。(笑)

この人類のすばらしき英知を、科学技術の進歩と同じように、地球平和への志向性に向けていきたいものですね。ところで宇宙飛行が、現実と考えられていったのはいつごろからでしょうか。木口 たしか、一九二〇年代のことではないでしょうか。

—— いまから約六十年前のことです

ね。

そのころ、アメリカではこんな話もありました。

クラーク大学のゴダードという教授が、「将来、ロケットは月に到着するだろう」という論文を、ある科学誌に寄稿し、たいへんな話題になりました。

池田　なるほど。

やはりアメリカは、宇宙飛行の先端をいっておったわけですか。

木口　そう思います。ゴダード教授は「ロケットの父」といわれる有名な物理学者です。

——ところが、この教授の見解は、世界で最も権威のある新聞といわれる『ニューヨークタイムズ』に、「そんなことできるわけがない。彼は真空（宇宙空間）についての知識に欠けている」と、痛烈に非難されたそうです。

池田　ああ、そうですか。ちよっと間違っているかもしれませんが、その約半世紀後には、あのアームストロング船長らが乗った宇宙船アポロ11号が、月面着陸に成功し

たということになりますか。

—— そのとおりです。一九六九年です。

そのとき、かの『ニューヨークタイムズ』は、すでに亡きゴダード教授に対し、公式の謝罪文を掲載したという有名な話があります。

池田 いつの時代でも、先見をもった人びとは痛烈なる批判と屈辱をうけるものですが……。

—— この逸話は、マスコミの良心として、長く世界中のジャーナリストに記憶されるようになったようです。

木口 あえて、故人に対してまで謝罪したことは、たいへんな勇気ですね。

池田 それも世界的に有名な新聞社が、ですね。そうとうの決断を要したんでしょうね。

—— 自分も一ジャーナリストとして、胸が熱くなったおぼえがあります。読者から長く信頼され、愛されつづけていくには、こうした真摯な姿勢が本当に大事であると

思いました。

木口 博士の名前は、現在ではアメリカの宇宙センターの一つに命名され、大きく顕彰されていますね。

池田 そうですか。すばらしい話です。

いかなる事業にせよ、運動にせよ、人びとの信用と信頼をかちとっていかなねばならないものです。

木口 ゴダード教授も偉大な科学者であり、『ニューヨークタイムズ』もまた、偉大なるペンの正義にたっていた、といえますね。

池田 そうです。

常に大きい視野と謙虚さを、という強き信念が『ニューヨークタイムズ』にはあったわけですね。

この万人を納得せしめようとする、勇気ある行動こそ、人びとをして信頼の方向へと、動かしていく源泉といえるでしょう。

太陽の運行と元旦の意味

—— 話はかわりますが、一年の始まりであるお正月ということも、宇宙と関係あるようですが、木口さん、どうでしょうか。

木口 お正月ということも、むかしから天体の運行によって、人びとが定めてきたわけです。国や民族によって、その新年を祝う習わしは、さまざまであったようです。

池田 そうですね。なにかで読んだものの、うろおぼえですが、古代のエジプトでは、「秋分」が一年の始まりになっていた。ユダヤやバビロニアでは「春分」であった。そしてギリシャでは、「冬至」のときを一年の生活の始まりと定めていたようです。

木口 日本では一月一日、元旦ですね。（笑）

—— ともかく、新年の時期がそれぞれの国によって、まったく違っていたのもおも

しろいですね。

日本ではこの日の朝を、とくに「元旦」とよんできておりますね。

木口 元旦というのは、池田先生、どういう意義でしょうか。

池田 そうですね……。

「元」とは、物事の始めという意義でしょう。「旦」とは、太陽が地平線にあらわれ出たることをさしているようです。

—— 年賀状に「元旦」と書く習慣も、この「初日の出」をめぐる意義があったようですね。

池田 この「元」という文字も、「旦」という文字も、ともに古代中国から使われてきたといわれています。

—— そのとおりの記録がありますね。

池田 当然、中国においても、日本においても、当初から太陽の運行と、その民族の生活とかが、密接な関連性があつたことだけは事実でしょう。

木口 たしかに、古代中国の農耕民族には、初日の出を祝うという習慣があったようですね。

池田 ですから、人間の自然感情というものは、毎日の生活をしていくうえでなか、新鮮味をあたえる意味で、ひとつの節目というものをさぐっていった、ということも考えられますね。

—— たしかにそうですね。なにかひとつの区切りがないと、人間は惰性になり、心が沈殿してしまうことがありますね。

池田 そこで新しい生への喜び、新しい感謝を見いだそうとしたときに、どうしても、雄大なる大宇宙の運行にと、目を向けざるをえなかったと思われる。そのひとつが新年の祝いという、古来からの形態になったのではないでしうか。

—— そのとおりだと思います。

自分なんかはお正月という、すぐに楽しかった子供のころを思い出す……。また、故郷の北海道のことが、なつかしく目にうかんできます。(笑)

木口　私の友人なんかも、日ごろ星や月を相手に盆も暮れもないといいながら、お正月となると居ずまいを正し、和服など着てニコニコしている。（笑）

――　最近はまだ、テレビの影響が大きくなり、情報や流行を追っているようでありながら、同時に、心の奥では、古きよき伝統を大切にしようとする傾向があることも事実ですね。

木口　それは、たいへんによいことだと思います。古きよき伝統を、ますます大事にしていくことを期待しますね。

池田　人間は時代感覚だけでは満足しない。流行や情報だけでも満足できない。なにかしら永遠性なるもの、これを永遠感覚とでもいいましようか、心の安らぎ、充実感、所願満足というようなものを、究極的には欲するものではないでしょうか。

――　刹那せつな的なものは、むなく淡い。

木口　そこに、知性の延長があると思います。軽薄なものに対しては、私はやはり、反発せざるをえませんね。（笑）

—— お正月になると、いつもは神社や仏閣に行ったことのない人が、急に信仰ぶか
くなって（笑）、初詣はつもうでに行きますね。（笑）

これなんかも一種の流行はやりで、伝統を重んじているようで実際は、大きな違いがある気がしますね。（大笑）

木口　ところで池田先生は、どのようにお正月を過ごされるのですか。

池田　そうですね。

私の場合、お正月は大晦日おおみそかに終わってしまうようなもので……。 （笑）

わが家の伝統として、元旦の午前零時には、家族全員が集まります。そして五座の勤行をいたします。

それが終わって、御造酒おみきを私が家族全員についであげ、おせち料理を少しずついただきます。

元旦の朝食は、原則としてライスカレーです（大笑）。この日から、私の一年間の法戦が開始されるわけですから。

木口 ああ、そうですか。初めてうかがいました。(笑)

池田 一月二日は私の誕生日です。お正月ですから、日本中の人が祝ってくれていると思っています。(大笑)

この日は、本宗の総本山(富士大石寺)に何十年間、初御開扉ごかいひのために登山しております。お正月は、一年中で、いちばん忙しいときかもしれませんね。(大笑)

そこで私は、毎日を元旦のような気持で出発していくことをモットーとしております。

木口 なるほど。むかしの中国にも「日に日に新たなり」という格言がありましたね。

「昭和」の語源は『書経』に

「昭和」の年号も五十九年目、日本の歴史のなかで、最も長かった明治が四十

五年ですから、最長記録を更新していますね。

木口 「昭和」生まれが、人口の三分の二を占めたと聞いています。「昭和」という年号は、どうしてできたのでしょうか。

—— むかしは、いろいろな決め方があったようですが、「昭和」の年号は、時の内閣の諮問委員会しもんで決まったそうですね。

池田 年号とは、「号」が名という意味ですから、時代の名前のことです。

「昭和」という名称は、中国の『書経』という歴史書にある、「百姓昭明ひやくせいにして万邦ばんぱうを協和す」という訓言から、とったもののようです。

木口 そうですか。日ごろ、あまり年号のことなど考えたことはありませんが、どのような意味になるのですか。

池田 そうですね。

「昭」という文字の語源は、日を召めすという組み合わせで、太陽が弧をえがきながら万物に光を届かせる、といわれる。

また、いまの文章のまえには、「俊徳を明らかにして」とある。

これは「百姓」、つまりすべての人びとが、それぞれの徳分を発揮し、太陽のごとく自己を輝かせることになれば、それがもととなり、「万邦」すなわち世界中の国ぐにと、仲良く「協和」させゆくことができる、というような意味でしょうか。

木口 なるほど。

—— 誰が案を出したか知りませんが、「昭和」の時代も戦前は、そうした意味とはほど遠い時代でした。

木口 そうですね。最近は改元についての議論もあるようです。「名は体をあらわす」といいますが、昭和の後半の時代はのちのち、その名のごとく後世の人びとからほめられるようにしたいものですね。

—— ところで、いまなお受け継がれている年賀の風習が数々みられます。それぞれ長い伝統と、いわれがあるのでしょね。

木口 地方に行くと、初めて目にするようなお正月の風習に出会って、驚くことがあ

ります。

池田　そうですか。

私は東京生まれの東京育ちですから、あまり、他の地方の正月風景は知らないんですが、なにかあったら教えてください。

木口　私の住む大阪では、むかしは門松を立てなかったそうです。

池田　門松を立てる習慣は、宮中にもないそうだから、むかしから伝えられてきた古い伝統とはいえないようですね。

——　門松は明治のころ、「松竹^{まつたけ}たてて門^{かど}ごとに祝う今日こそ楽しけれ」という文部省唱歌が流行し、それから全国に普及したという説もあります。

大空よりも大きく偉大な人間の心

木口　年賀状はどうですか。

池田　そうですね。

年始まわりの伝統をふまえたものですが、明治の中ごろから郵便が発達し、名刺を封筒に入れて送るということが流行^{はや}った。それが今日の年賀状に変化して、定着していったようです。

—— 年賀状といえ、現代人が毛筆で文字を書く年に唯一の機会になりましたね。
木口　ええ、なかなか会えない友人などから、墨書きの賀状が届くのはうれしいものです。

私はペンでしか書きませんが。（笑）

—— ところで、こうして名誉会長のところへうかがうたびに、揮毫^{きごう}されておられる姿をよくお見うけしますが。

池田　いやいや、どうも（笑）。私は書道も書法も、まったくの素人なんです。知人の強い要望で書きますが、書き終わってから、いつも「また後世に恥を残してしまった」というんです（大笑）。ただ喜んでくだされば、ただ励ましになれば、という気持

だけです。

木口 なるほど。池田先生のせめてもの真心なのですね。

—— 書の専門家は、何千字書いても耐えられるように、手の筋肉を訓練する。それが、半生はかかるそうです。また力強く、平らに動かす力を養うのは、一生の課題と聞いたことがあります。

木口 なるほど。

—— 名誉会長は善き詞ことばを善き文字で、心をこめて書かれていますね。まるで生命の息吹きを記されているような気がします。連日の激務のなかのことですから、たいへんでしょうね。

池田 いやいや、私は自分のできるせめてものことと思っています。ただ、いささか筆をとっておりますと、いろいろのことがわかってきます。

—— どのようなことでしょうか。

池田 たとえば、晴れた日は筆のはしりがよい気がします。

ところが雨の日は、なかなかそうはいかない。天候の状況や、一念の状態が字を左右してしまうようです。

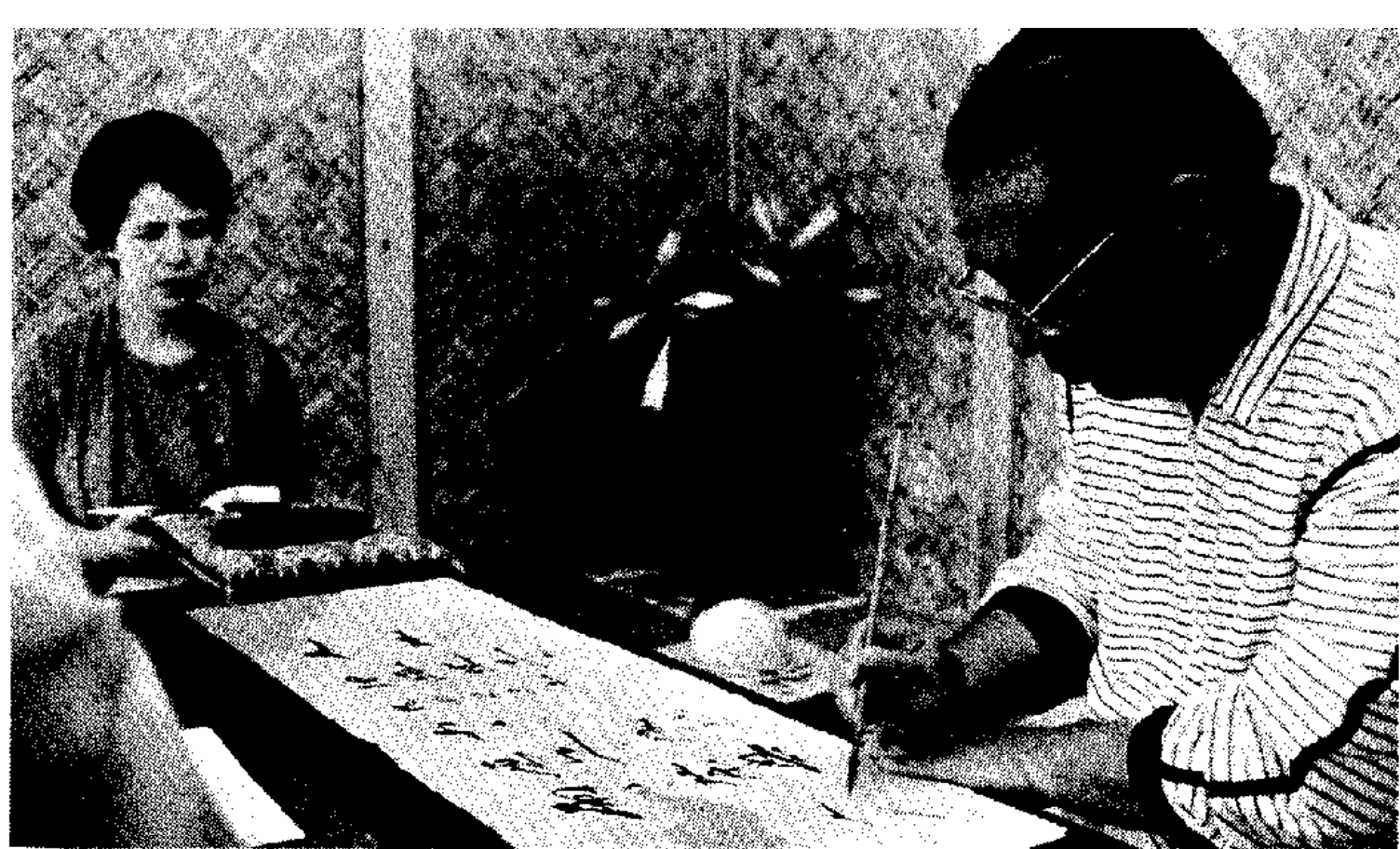
—— 微妙な影響があるわけですね。なかなかむずかしいことのようにですが、表彰状や感謝状などは、やはり墨でないと、もらっても感じがでませんね。（大笑）

木口 よく、「字は人となりを表す」といいますね。上手、下手ではなく、その人の真心や人格がにじみ出ているものは、親しみを感じますね。

池田 私も下手であるからいうのではないが、木口さんと同じ意見なんですよ。（大笑）

—— 「書」も芸術ですね。「芸術には独創はいらない。生命がいる」といったのは、有名なフランスの彫刻家ロダンですが、芸術の極致には相通じるものがあるようです。

池田 仏法の教釈にも「善画は像を写すに真に逼り、骨法・精霊の生氣・飛動するが如し」（『三重秘伝抄』）とある。



寸暇を惜しんで揮毫の筆をとられる池田大作氏、左は香峯子夫人。

善き画というものは対象の姿、形だけではなく、作者が感じとった心性までもが、あたかも生きているかのごとく、白きキャンバスにえがきだされているという意味でしょうか。

木口 画にしろ、書にしろ、また音楽にしても、天才といわれる人のものは、作品自体に人生観、世界観、宇宙観まで表現されるといわれていますね。

—— 先日、新聞やテレビでも評判になった、東京富士美術館の「近世フランス絵画展」をのぞいてきました。

ドラクロワの『ミソロンギの廃墟にた

つギリシャ』などは、まさに名画の名をほしいままにするような作品でした。

まあ、溜息ばかりで、圧倒されましたね。(笑)

池田 ああ、みてくださったんですか。ありがとうございます(笑)。すばらしいという表現しかない絵ですね。

たしかにみる者をして、そこまで感じさせうる作品というのは、至高の美であり、芸術の極致といえるでしょう。

一つの分野を究めていった人の、研ぎすまされた心の眼は、ありとあらゆる対象を自身の内面につつまこんでしまう。

そして、思うがまま大胆にえがきだしていく。

木口 なるほど。大空よりも大海よりも大きく偉大なものは、人間の心ですね。(笑)

—— 私の好きな詩人であるイギリスのウィリアム・ブレイクに、

「ひとつぶの砂にも世界を

いちりんの野の花にも天国を見

きみのたなごころに無限を

そしてひとときのうちに永遠をとらえる」

（『ブレイク詩集』 寿岳文章訳、思潮社刊）

という、深い叙情をこめた詩があります。

最近いたるところで、ブレイク再評価の声を耳にしますが……。

池田 ああ、この詩は有名ですね。たしか、彼の名を不朽のものにした作品ではないでしょうか。

—— そのとおりです。

池田 フランスの哲学者、あのベルグソンも、二十世紀最大の科学者アインシュタイン^{*}らも、この人間と宇宙のかかわりあいということで、いまの詩に注目していたといわれている。

木口 そうですか。おっしゃるとおり、短い詩でありながら、ひとつの宇宙論になっていると思います。

池田 ブレイクは「個」のなかに、宇宙万法に広がるものを感じとっていたのでしょうか。

これはひとつの「生命の詩」といえるかもしれない。

——「個」と「全体」、「我」と「宇宙」のかかりというものを、つよく感じますね。

池田 本当にそう思います。

何回も申し上げますが、仏法は「我」すなわち内なる宇宙と、外なる宇宙との関連性を明快に説いた法則といえるでしょう。

御書にも、「所詮・万法は己心に収まりて一塵もかけず九山・八海も我が身に備わりて日月・衆星も己心にあり」（『蒙古使御書』）とまでおっしゃっておられる。

木口 なるほど。すごいことです。人間の一念というものが、これほどまでに全宇宙への広がりをもつことを聞いたたびに、学ぶたびに私は眼が開かれ、心が開かれていく気がしてなりません。

太陽、地球のものの姿はガスやチリ

池田　ところで木口さんは、週何日ぐらい大学で講義しているのですか。

木口　三日です。

――　あとは、自分の研究ですか。

木口　ええ、京都大学に行って、仲間と研究しています。

池田　いま、なにを研究しているのですか。

木口　われわれの太陽系のもととなったガスがどんなものであったか、調べています。私どもの専門用語では「じゅうりょくへいこう重力平衡問題」といいます。

――　なかなかむずかしそうですね。（笑）

具体的には、どういうことですか。

木口　太陽系が誕生するまでには、次のような現象があることがわかっています。

大まかにお話しますと、宇宙空間のガスやチリは、常に激しく運動しています。それは、すさまじいスピードで、ある中心を軸として回転しながら、まわりのガスやチリをしいだいに集めていきます。

そして、何十億年という時間を経ると、レコード盤のような回転する巨大な円盤の雲となります。これが太陽系のもとの姿です。

—— はあー、円盤ですか。

木口 そのとおりです。

その円盤の中心部分は、重力の働きで収縮し、約一〇〇〇万から二〇〇〇万年のあいだに、いまの太陽の大ききぐらいの密度の濃いガス雲になります。

これは、「太陽の卵」みたいなものです。（笑）

—— なるほど。（笑）

木口 それと、この「太陽の卵」を中心として回転しているガスの雲のなかにも、いくつかの収縮したかたまりができます。これが、いまの地球や惑星のもとです。

——なるほど。すると、これも現在の太陽系と同じように、「太陽の卵」を中心に回っていたのですか。本当に不思議に思います。

木口 私の研究は、この太陽系のもととなった円盤の雲が、どういうふう到现在の太陽や地球にまでなっていたかを、コンピュータで計算することです。

池田 いや、これはじつにおもしろい研究ですね。宇宙空間にはいたるところに、ガス（星間ガス*）やチリ（星間物質*）がありますが、これが星の誕生のもととなったわけですか。われわれの肉眼ではみえないんでしょうね。

木口 ええ、暗黒星雲としてみえる場合もありますが、一般にはそのとおりです。太陽系のもととなった、目にみえないガスやチリは、太陽系ができる、はるかむかしに寿命がすぎた星が爆発し、まき散らした膨大なエネルギーの残骸です。

池田 宇宙空間というのは、なにもないようにみえますが、なかなか複雑なものなんですね。

われわれの身体のなかにも、目にはみえないが、さまざまな細菌がいる。宇宙空間の

なかにも物質がある。目にみえない世界というものの研究も、またおもしろいし重要ですね。

木口　そうです。さきほど申し上げましたように、その目にみえない粒子がぶつかりあい、触発され、非常に長い時間をかけて、かたまりながら「太陽の卵」のようなものができてくるわけです。

「理論天文学」にみるおもしろさ

——
なるほど。

木口　理論天文学のおもしろさは、こうした誰も体験も、実感もしえない何十億年という、長い長い年月の天体の変化を、計算によって一目瞭然りようぜんにみてとれることです。——
なるほど。

木口　また惑星のもととなるガス塊かいのほうは、いったん安定した形状をとります。そ

の内部で、さらにチリが沈殿し、たがいに低い速度で衝突し、くつつきあいます。五〇〇〇年ぐらい経ると今度は、チリをいっぱい含んだガスの厚みのうすい円盤をつくります。

池田 原始の太陽だけでなく、いまの惑星にもレコード盤のようなガス塊があったわけですか。おもしろいものですね。

木口 ええ、このガス塊は、一年間ぐらいでつぶれて小石になることがわかっています。これは、ガス塊の進化の時間スケールからいうと、瞬時といってよい長さです。その後、小石のような物質が集まって、半径一〇キロぐらいの固体のかたまりを、ゆっくり、ゆっくりつくりします。

—— 惑星の卵ですね。（笑）

木口 そのとおりです。この小さなかたまりのようなものが、いまの地球のような天体にまでなった、といわれております。

—— いま、初めにできた円盤は一年ぐらいでつぶれるというお話でしたが、何十

億、何千万年という遠大なスケールのお話のなかで、なぜ一年間というような小さな単位がわかるのですか。

木口　そこがまえにお話のでもした林説のヤマなのです。数年前それがわかったとき、林忠四郎先生は、その計算した結果を、喜々として研究室員に語っておられました。

——なるほど。そうですか。

木口　ここで計算方法をお話すると、この章ぜんぶを、その説明に費やしてしまいますので（笑）、残念ながら、略させていただきますが（笑）、間違いなく一年という単位が出てくるのです。

池田　いま何度かお話にでた、ガスやチリが集まって、たがいに固まっていくのは、小さなかたまり自体に湿気があるからだと聞いたことがあります。

木口　ええ、そういつてもよいと思います。しかし、チリのような物質がくっつきあい、大きくなっていく原因は、まことに不思議で、長らく解明されていません。

たぶん、水の凝集力と同じように、水素が大きな役割を果たしているのでしょう。化学の問題として非常に重要なのですが、すべては、これからの問題です。

銀河系宇宙に第二の太陽系を発見

—— 直観的には、湿気の効果とっていいわけですね。

木口 はい、そう考えるのが、いちばんいいと思います。

—— 考えてみると、星も人間も、構成しているものと成分は同じであり、人間の体も溶液状になっています。

仏法では、万物が「四大」（地・水・火・風）の調和によって形づくられているというお話がありました。

池田 そうです。

すべてのものを創造形成なさしめている「四大」のなかで、「水大」について「水大

は湿^{しめりけ}を自性とし、摂^{しやう}を作用とする」と教釈にはあります。

つまり、「水大」とは湿気を本性とし、ものを撮^{おさ}め、集めるといふ働きをもっている、と説かれているわけです。

木口 なるほど。いつも仏法は、先見性を示しておりますね。

—— 木口さん、赤外線望遠鏡というのは、どういうものですか。

木口 一言でいいますと、赤外線は温度の低い物質から出ており、しかも透過性がつよいので、ふつうの光学望遠鏡に比べ、はるか遠方や暗い場所の物体をとらえることができます。この原理の応用によって、これまでに比べ、はるかによく宇宙空間の物体が観測できるようになったわけです。

池田 そういえば、昨日の『読売新聞』（一九八三年十一月十日付）に「赤外線天文衛星の観測」という記事がありましたね。

—— たしか、零下二二〇度以下の超低温天体や太陽系のチリの帯などが発見された、ということがでていましたね。



この銀河系宇宙に、第二の太陽系が存在することを発見した、赤外線天文衛星「IRAS」。

木口 この衛星は、今年（一九八三年）の一月に打ち上げられたものです。

池田 とくに私がうれしかったのは、この銀河系宇宙に、第二の太陽系の存在が正式に確認されたことです。

—— この太陽系は、以前にもとりあげましたが、その時点では、「こと座」の主星ベガの周辺で発見された、という第一報の段階でした。

木口 今回の発表は、アメリカ、イギリス、オランダ三国の科学者十三名の共同研究で確認されたものですから、確実なものといえるでしょう。

—— これまで『仏法と宇宙』を語る」で論じてきていただいたことの、一つの証左といってよいと思います。

そこで、このガスのかたまりですが、星になるまでには、さらにどういう過程を経るのですか。

木口 最も重要な条件は、小さな粒子やガスが、動きに動いて、重力エネルギーを熱エネルギーに変え、そして熱を保持することです。

この熱エネルギーが、ガス塊にうまくバランスをとらせます。

池田 なるほど。エネルギーの発動やその熱が重要な役割を果たすわけですね。

木口 ええ、熱が全体をくまなく暖めることにより、初めて星が順調に形づくられていきます。このときの、ガス塊のなかの分子の動きはたいへんに重要です。その量や動き方によって、星の形や配置が大きく影響をうけます。

木星は、むかし太陽と同じようなガス塊でした。ところが、この分子の動きの違いにより、太陽は輝き、木星は輝きださなかったという説もあるほどです。

宇宙の諸現象と仏法の法理

池田 さきほどと同じ教釈に、「火大は煖なん（熱さ）を自性とし、熟（ものを成熟させる）を作用とする」と説かれています。

——
なるほど。

池田 ですから、宇宙における諸現象も、仏法で説く法理にことごとくのつとていく、ということが、私はよくわかるような気がします。この温度やエネルギーの働きは、四大のなかの「火大」ということになると思いますね。

木口 なるほど……。

そこで熱のバランスですが、中心の分子の活動が鈍く、光を閉じこめておくことができなければ、温度が上がらず、圧力も上がらないので、成長が止まり、星ができなくなります。

池田 中心のエネルギーが大事である。中心の指導者の偉大なエネルギーが、すべてをうみだしていく方程式になる。(笑)

指導者が独断的、感情的、ひとりよがりでは、これまた全体の調和がとれない。

その法則からみると、逆に中心の分子の活動が過激で、温度が高くなりすぎても、これまた星の成長に結びつかないでしょうね。

木口 そうですね。そうなりますね。このあたりの事情は、二十世紀初頭の大天文学者ジーンズの、美しい数学理論によって詳しく調べられています。

—— 宇宙は、絶妙ですね。

エネルギーや温度のバランスとかが、どれほど重要な役割を示すか……。

池田 妙法という「中道一実」の法理に従順してこそ、調和という原理、原則が展開されゆくという論理が、この現象からもうかがい知ることができるような気がする。

—— 人間は、誰人たりとも未完成である。やはり、「大法」というものを中心にしていく理由がよくわかりますね。

池田 話はちよつとまえにもどりますが、仏法では人間が誕生してから、その生命を維持する重要な要素としても「火大」、すなわち「温度」というものをあげている。ゆえに「命根」（生命）は「識」（意識）と「煖」（体温）を維持し、また、「識」と「煖」は「命根」を維持する、と教釈にある。

—— 体温のバランスが「命根」を維持する、というのはよくわかります。意識が低下し、体温が下がっていくと、「死」という状態に入りますからね。「火大」もまた、あらゆるものに通ずる要素といえますね。

木口 たしかに仏法の四大の原理は、すべての規範となります。

太陽の誕生、それは一瞬の出来事

—— ところで、うまれたばかりの星を原始星^{*}というようですが、まだ、星としてのさまざまな条件が安定してないわけですか。

木口　そうです。活動状態が未熟ですから、光も落ち着きがなく、地球からみていると激しく明滅します。みかけ上の形なども、四角い星やとがった星など不思議なものがいっぱいあります。

——　中心がようやく固まっても、まわりの取り残されたガス雲などに影響され、しばらくは環境に紛動たんとどうされているわけですね。（笑）

池田　人間も同じことだ。周囲に紛動たんとどうされているうちは「原始人間」だ。（笑）
ですから、教育も大事である。人格の形成も大事である。

また、健康も大事である。

さらに、確固たる主体性をもった自分をつくることが大事になってくるわけである。そして時代とともに、社会に大いなる貢献をしゆくところに、人間としての証あかしがあるといえるでしょう。

木口　そう思います。原始星も、そうした段階から脱するために、星なりにそうとうの努力をみせます。

星の芯しんにあたる部分で、自らが空間を炎のようにして、温度を一〇〇〇万度まで上昇させます。

そこまでいくと、やっと水素による核融合反応が始まるわけです。

—— この反応によってできるエネルギーは、莫大ばくだいなものといわれていますね。

木口 ええ、たった一グラムの水素で、約二〇トンの石炭が燃えたのと同じエネルギーが出ます。

このエネルギーが、外向きの圧力として働きますから、星自体の重力による内向きの落下の力とのバランスがとれるようになります。

そうになって、初めて収縮が止まり、安定した星として、美しく輝き始めていくわけです。

池田 大宇宙の法則も、キチンと正確に、その動き自体を、すべて計算できると考えられるわけですね。

木口 まったく、そのとおりです。計算できるのです。

池田 星の分子も、かつてに動きまわっているようにみえても、じつはそうではないと思う。

リズム正しく、それぞれが固まっては散り、それを繰り返しながら、しだいに共生の姿を広げていくように思いますね。

木口 ええ、そのとおりです。

池田 思うに、無数の星の誕生という、壮大かつ華麗なドラマというものは、すべてが見事に、「南無妙法蓮華經」の法理を映し出しているようです。

木口 本当に不思議なものです。

われわれの地球や太陽も、こうして億単位という想像もつかないような時間を経て、やっとできあがったわけですね。

木口 まったく、そのとおりです。ところが、そうした膨大な運動のはてに、星は一瞬にして、その姿をあらわします。

たとえば、太陽は真っ暗闇のなかから、とつぜん現在の明るさの一〇〇〇〇倍の光を放

ち、輝きだします。

驚くべきことに、何十億年という太陽の生成運動は、たった一日の輝きだしで結実します。

池田 長い長い運動の繰り返しが、最後に、一瞬の出来事ともいえる大変革をもたらした、と考えられますね。有情、非情の次元は別として、この論理から、われわれにはまったく関係ありませんが、いわゆる通途つうずの仏法で説く「八相作仏」^{*}もわかるような気もする。

また、日蓮大聖人の仏法の、日々の仏道修行による一生成仏の方軌ほうきも、わかるような気もしますね。

—— 信仰のドラマも、人生のドラマも、また宇宙の壮大なドラマも、みなすばらしい。(笑)

池田 これらの天体の運行からみて、人生も、生きて生きて、生きぬいていくことが道理でしょうね。

そこに、なんらかの結果というものが生ずることも、また事実である。

なにもしない人生では、ある日とつぜん、なにかが得られることはない（大笑）。苦しみ、悩み、動き、働く、その人生の延長に、初めて一小宇宙である自身の完成もある。これこそ、調和と満足と充実とが存在するドラマとなるわけでしょう。

——　そういうことですね。大宇宙も、また一個の小宇宙も、道理は同じはずですからね。

池田　少々、深い次元の論議になりますが、仏法の修行の目的は成仏である。

いわゆる仏のような大境界、というのでしょうか。凡智では、おしはかることはできませんが……。

この成仏も、仏説のごとく勇敢に行動、実践し、絶えまなく思索しゆく延長として、見事な開花と結実があるわけである。

成仏のない信仰であつたなら、仏法であるなら、なんの仏道修行の意味もなくなってしまうからだ……。

木口　たいへんに示唆しそをうけます。太陽の輝きは、重力のエネルギーが熱エネルギーへと、転換するためのショックによって生じます。

——なるほど。

偉大な発見は深い思索と実践から

木口　そういえば、湯川秀樹＊博士の素粒子＊発見にまつわるおもしろい話があります。当時、博士は寝てもさめても素粒子のことを考えつづけ、実験に明け暮れていました。

ところが、偉大な発見は、とつじよとして訪れたと聞いています。

——そうですね。この話は有名です。私も湯川博士からうかがったことがあります。

まあ、これは学問上のことですが、さきほどの名誉会長のお話のように、思索と行動

の結実として、博士もひとつの真理の開花を瞬間的になされたわけですかね。

木口 そう思います。

池田 仏法者としては、勤行と世界への布教という、なみなみならぬ実践修行となりましようか。信・行・学という信仰基盤、骨髓がたしかに大事となってくる。

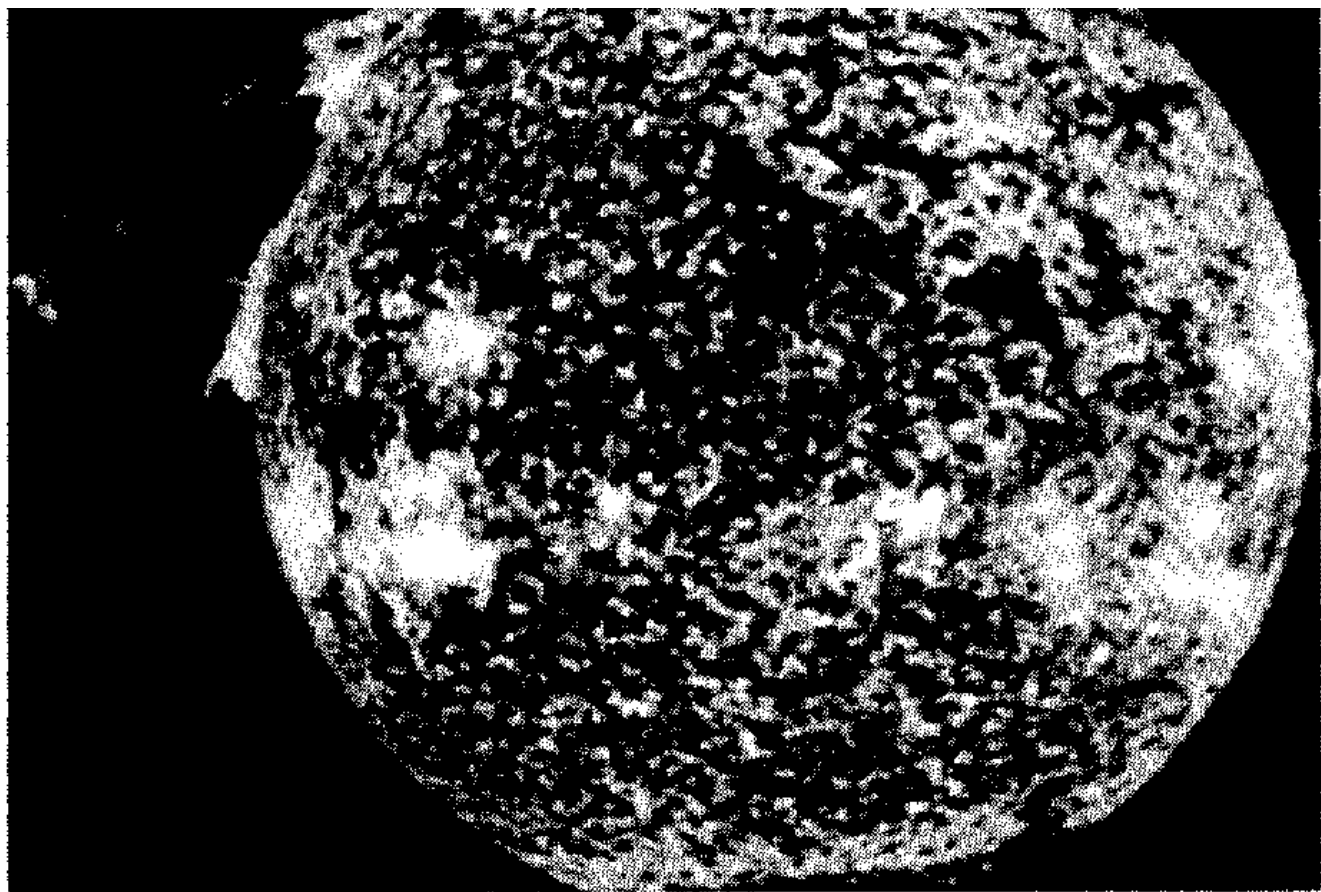
—— 漠然^{ばくぜん}として生きているときは、明快なる到達点が定まらない。ゆえに爆発的なひとつのものがえられない。(笑)

木口 その道、その道に徹しゆく、ひとつの姿勢と実践とが大切ですね。

池田 真っ暗闇の天空に太陽が、とつじよ、すさまじいばかりの光線を放ちゆく瞬間というものは、なにか王さまが出現し、慈悲の光を放ちゆくような感じさえしますね。(笑)

そこで木口さん、有名な「浮力の原理^{*}」を発見したギリシャの哲学者アルキメデスにも、たしか同じような話があったと思いますが。

木口 ええ、おもしろい話があります。



太陽のフレア活動。フレアは磁場から熱エネルギーへの奇妙な伝達によって発生。

あるとき彼は、ギリシャのヒエロンという王から、王冠が純金かどうか調べるよう命じられるわけです。彼は思索に思索をかきねるが、なかなかうまく方法がみつからない。そんなある日、入浴中に自分の体が軽く感じられるのに、とつぜんヒントをえたというのです。

—— 彼が発見したこの「浮力の原理」

から王冠の比重を知り、銀が混ぜられているのを見破ったという話でしたね。

木口　ええ、そうです。彼はそのまま裸で、風呂から飛び出して、外へ走っていった。(笑)

—— たしかにアルキメデスにかぎらず、世に天才といわれる人は、凡人が聞きのがし、見のがしてしまうような事柄からでも、重大な示唆をくみとってきたようですね。これは、どういう心理状態なのでしょう。

池田 その質問の答えに、あてはまるかどうか分からないが、「天才とは、努力の異名なり」という言葉が有名ですね。

天才といわれる人の「ひらめき」は、表面的には、ある日、とつぜんのこのようなみえる。

だがその真理への直覚というものは、偶然のものではないと思う。

それは常日ごろからの、深い思索の持続の結果であつたことを見のがしてはならない。

—— たしかにそうでしょうね。

われわれ凡人は、いつも結果だけをゆめみ、結果だけを早くえようとして、それに相應するだけの深い思索と努力が、あまりにもなさすぎる。(大笑)

池田 真実の人間の生き方を求めゆく人というものは、常に新しき真理を見いだそうと、努力していく傾向がつよい。

—— 好奇心とでもいうのでしょうか。たしかに、過去の歴史をふりかえってみても、すべてにわたりそうですね。

池田 長い歴史をみても、新しき真理へと挑戦し、そこに新しき創造の価値をもたらすものを発見しえたとき、その喜びは、そのまま人類にとっての最高の喜びへと、なってきたのではないでしょうか。

ゆえに私どもは、大なる真理、小なる真理にむかって、感情や偏見をすてて、真摯な姿勢で、それぞれのものをみつめていこうとする、心のひろびろとした、また心の深い人生を歩んでいかなばならない、と私はつねづね思っている。

—— それこそ真の時代の進歩であり、人間の進歩といえますね。

現代人は、おうおうにして、身近な物や財に目がくらみすぎてしまった。その点からいえば、不幸な時代です。

「雪山童子」の説話が示唆すること

——　　そういえばこのまえ、松タケの人工栽培の方法を発見して、たいへんに有名になった人がおもしろいことをいっていました。

木口　食卓に関係することですので、ご婦人方の間でも話題になりましたね。（笑）

——　　その人は十六年間かかって、やっと発見することができたのですが、「方法がわかってしまったいまとなって思えば、なぜ、あんなに長い歳月を費やしてしまったのか、わからない」と述懐しています。

池田　なるほど。そういうものかもしれない。

ですから、「開悟」や「覚知」のようなものは、いまだそれがわからない人にとってみれば、まったく信じられないような世界といえるでしょう。

だがひとたび、それがわかってしまった人には、これほど明快であり、自明の理はな

いと思つていく……。

—— いわば、高い山の頂上をきわめた醍醐味^{だいごみ}は、登りきった人でなければわからない。山の麓^{ふもと}にいる人は、ただ高いから危険だとか（笑）、あれこれ詮索^{せんさく}するようなものでしょうか。

池田　まあ、人生の醍醐味というのも、ひとつは、こういうところにあるのかもしれない。

いわゆる、仏法が究めつくしたもののひとつは、これまた人生において最も根本となるべき、壮大にして調和のとれた、すばらしくも厳しき生命の法則の実相ではないでしょうか。

多くの人びとは思索と実践なくして、ただそれを偏見や感情によつてみていたり、批判しておりますが、この永遠にして、くめどもつきぬ醍醐味というものは、少しもわからないわけです。

木口　なるほど、なるほど。何回も何回も感じるのですが、仏法というものは原因と

結果という、因果律を嚴格にふまえているわけですからね。

—— そういえば、仏法の「思索と実践」ということについて、『涅槃經^{ねはんぎょう*}』に出てくる有名な「雪山童子^{せっせんどうし}」の話がありますが……。

池田 ええ、これはインド応誕の釈尊^{しやくそん*}が過去世において、バラモンの姿で菩薩の修行をしていたときの話です。

まあこの段を簡単に申し上げると、童子の思惟^{しゆい}すること無量歳と説かれている。あるとき羅刹^{らせつ*}（帝釈天^{てしやくてん*}が鬼に化身）があらわれ、仏の説いた偈^ぎのうち「諸行無常・是生滅^{しよぎやうむじようぜしやうめつ}法^{ぽう*}」という、半偈^{はんぎ}だけを教える。すると童子は大いに喜び、ぜひとも残りの半偈を聞かしてほしい、と願求^{がんぐ}した。

—— ところが羅刹は、自分はいま飢^うえているので、童子の身を食べさせるなら聞かせてもよい、といったわけですね。

池田 そうです。そこで童子は、自分の身体を食べさせる約束をする。そして、残りの「生滅滅已・寂滅為樂^{しやうめつめつちじやくめついらく*}」という半偈を聞き終わると、即座にその偈をあちこちに

書きつけ、自ら高い樹より身を投げた。

すると怖い顔をしていた羅刹は、パツと帝釈天の姿にもどり、童子の身体を空中に受け止める。その不惜ふしやくにして身命を賭とした、修行時の立派な求道求法の姿をほめ、未来への成仏の記別をあたえ、去ったという仏典の話です。

木口 尊いお話です。つまり修行のつまかさねと、求道心からえた大境地といえますね。

池田 ゆえに古来、仏法は観念ではない。

いくら仏法用語をたくさん知り、立派そうに語ったとしても、熾烈しれつなる仏道修行という行動と実践がなければ、いわゆる、その人の開花ともいうべき、成仏の決定けつじようはありえないわけです。

木口 なるほど。

私などは、とてもお話の次元におよびませんが、たいへん重要なサジェスションと思います。

星の生から死にいたるまで

—— さて、初めにお話の出た何十億年も経て誕生した太陽や地球のような星も、またいつかは崩壊する、また消滅していくわけですが、具体的にはどうなるのですか。

木口 星には、冷たくなって小さくなるものと、死んで宇宙に溶けこんでいく星とがあります。

池田 どうしてそのような違いが、でてくるのですか。

木口 それは、星の大きさの違いによります。簡単に説明しますと、太陽より小さい星は、だんだんと小さく冷たくなっていきます。これを「白色矮星^{わいせい星}」といいます。

—— なるほど。

木口 太陽より大きな星の場合は、その星の死が近づくと、自身のかたちをたもっていることができず、大きくなったり小さくなったりしながら、最後には大爆発をおこ

して宇宙に溶けこんでいきます。

池田 最後は爆発ですか。爆発しないで崩壊するものはないんですか。また、爆発して木端微塵こみばみじんになるものもあるのでしょうか、そのなかから残る物体もあるわけでしょう。

木口 ええ、爆発してなおかつ星の中心部分が残っているものもあります。

これは、「中性子星^{*}」といわれるものです。

この「中性子星」が、私のいちばん好きなテーマで、これまでも関心をもって研究してきました。

天文学会でも発表したことがあります。ただこれも最終的には、つまり1の後ろにゼロが10兆×10兆個ついた年の後には、宇宙に溶けこむといわれています。

池田 なるほど。

そうしますと、星の死は太陽の大きさが基準となつて、違いがでてくるわけですか。木口 そのとおりです。

池田 それが宇宙のどこでも、あてはまるわけですか。

木口 ええ、まことに不思議なことですが、太陽は宇宙の平均的な基準の星です。

池田 やっぱり、王者ですね。

王者は常に輝いていなければならない。(笑)

—— 星の死を研究するのは、「量子力学^{*}」の分野ですか。

木口 おっしゃるとおりで、星の死の姿をとらえ研究するのに最も適した学問ですね。

—— そうですね。どのような研究になるわけですか。

木口 私の研究は、星が生から死にいたるまでの素粒子や原子や分子の運動、またその変化をさぐることです。これは紙と鉛筆と、電子計算機を多少使うだけで、本当にお金のかからないものです。(笑)

池田 それは、けっこうなことですね。(笑)

そうしますと、この「量子力学」とは、いわば目にみえない分子や原子や素粒子などの、微小の物質をとおして「星の死」を解く学問である、と認識してよいですか。

中性子星のナゾが解明

木口 そのとおりです。少々むずかしいいい方になりますが、広大無辺なる宇宙は永遠の時間と、無限の空間によって成り立っています。

この時間、空間という縦横の広がりの中に、死んだ星の物質が、どのように溶けこんでいくかを記述するのが「量子力学」です。

―― 物質が溶けこんでいく宇宙というのは、「物質の死の世界」ということですか。

木口 そうです。死の世界ですから、ふつうはみることも感じることできません。

池田 わかりやすくいうと、「量子力学」とは、いわば目にみえない物質世界を探究するアンテナのような役目をする学問ということですか。

木口 そうです。さきほどの中性子星というのは、「量子力学」により死の世界の働きというものがはつきりわかる星です。

—— どういうふうにですか。

木口　大ざっぱにいいますと、中性子星は爆発して死んだ星が残した燃えカスということになります。

この星はなんの輝きもなく、なんのエネルギー源もありません。

星が星でいられるのは、熱エネルギーによる外向きの圧力があるからです。ちょうど風船に空気がつまっているようなものです。

—— なるほど。

木口　ですから、もし星に熱エネルギーがなければ、星は重力にさからうことができずに、大きさのない一点にまで縮んでしまい、われわれの感覚ではとらえられなくなるはずですよ。

ところが現実には、エネルギー源のない中性子星が、大きさのある星の姿を残したまま宇宙に存在していることが観測されます。空気もないのに、風船がふくらんでいるわけですよ。

これは一九三〇年くらいまで、なんの解明の手がかりもないナゾだったわけです。

—— おもしろいことがあるものですね。

木口 このこと自体、宇宙に遍満へんまんしている、物理的な実体のない不思議な力、つまり死の世界からの働きによると考える以外ないわけです。

これが、「量子力学」の効果として計算できます。

池田 なるほど。

その次元は別として、われわれの肉体が死んでも生命自体の境涯きようがい、つまり「我」というものは存在する、ということに相通ずる気がしますね。

木口 ええ、これらをみても物質の死の世界が、われわれの目にみえる実際の現象世界に、その働きがあらわれることがはっきりとわかります。

こうしたことを、ロンドン大学の有名な物理学者ポール・デービスは、「われわれの世界と並行して存在する別の世界の幽霊が、われわれの世界の物質をつき動かしている」と、まことに興味ぶかい表現をしています。

「量子力学」は哲学にちかい科学

池田 まえにも申し上げましたが、仏法では「妙は死、法は生なり」（『生死一大事血脉抄』）という法理がある。「妙」すなわち、目にはみえない根源の力が、「法」すなわち、目にみえる現象世界を動かしていく、という意義になりましたか。

ですからいまのお話は、いわば科学の最先端の考え方でしようが、そうした観点からみると、たしかに「妙は死」、「法は生」という法理が理解できますね。

木口 「量子力学」の発達は、いままで人間が信ずることもできなかつたことを証明しています。

——なるほど。

池田 御文に「法界は妙法なり」（『御義口伝』）とある。

日蓮大聖人の仏法、すなわち日蓮正宗の基盤は、妙法、つまり宇宙の根源法の当体に

唱題すれば、大宇宙の国土、衆生、生命というものに、すべて祈りが通ずるということになっております。

—— すごい法理です。想像もつかない。

池田 また「妙の文字は月なり日なり星なりかがみなり」（『妙心尼御前御返事』）という御文もある。

妙法の力用とは、銀河系にも、何億光年のさきまでも、じつはつうじていくものである、とおっしゃっておられるわけです。

—— 雪山童子が生命をすてようとしてまで、願求したという理由もわかるような気がします。

池田 それは、いわゆる通途の仏法での修行の段階である。

いわんや、大聖人の文底下種^{もんでいげしゅどく}独一本^{いっぽほん}門^{もん}の仏法たる「南無妙法蓮華經」は、法界すなわち、大宇宙へつうずる大法なのであるとあかされておるわけです。

木口 とうてい觀念だけでは理解もおよびませんが、いつもながら仏法は、甚^{じん}深^{じん}の哲

理と思いますね。

——ところで、イギリスに『ネイチュア』という週刊の科学雑誌があります。この雑誌の編集長がこの夏、「日本の科学技術特集号」の取材で来日しました。

木口　そうでしたね。『ネイチュア』の創刊（一八六九年）には、進化論のダーウィン*も関係していますし、この雑誌に研究論文が載るのがノーベル賞への近道といわれています。

池田　この記者会見のもようは、たしか新聞にも載っていましたね。「今後おそらくなりそうなのは量子力学で、花形になるだろう」というような話であったと思いますが……。

——ええ、量子力学の分野から、「物理的世界の根本に関するエキサイティングな発見が出てくる可能性がある」と、科学界の今後の展望を強調していたのが印象的でした。

木口　私も、まったくそう思います。

今度、ノーベル賞をうけたアメリカのチャンドラセカール博士（インド生まれ、シカゴ大学教授。星、宇宙の生成、進化を研究）も、天文学に量子力学をもちこみ、白色矮星を予言した功績に対してあたえられています。

量子力学というのは一面、哲学にちかい科学ということもできます。

ですから、この学問の進歩は、人間の価値観を大転換させる可能性があるといわれています。

第十一章

宇宙の体験と「空」の哲理

香港の「九七年問題」とアジアの将来

志村(司会)　今回は五年ぶりの香港訪問(一九八三年十二月一日出発、六日帰国)だったのですが、いかがでしたか。

池田　アジアで初めての文化祭が開かれ、その招待をうけました。

また、香港中文大学から訪問の要請もあり、行ってまいりました。

——文化祭は、さきごろ完成したばかりの香港体育館に、二日間にわたって二万人のメンバーが集い、たいへんに盛大だったようですね。本当に、おめでとうございます。

池田　ありがとうございます。アジアは、ますます大事なところとなりますね。日本もアジア各国との経済協力のもとより、すべての次元にわたっての誠実な交流が必要ではないでしょうか。

木口 平和文化祭の大成功は、アジアのすばらしき未来を象徴しているようですね。

池田 ともかく香港の皆さんが希望をもち喜んでくださり、うれしかった。香港中文大学と創価大学の教育学术交流も十年の歩みを経て、確実に深まってきておるようです。

—— 香港近隣のマカオ、シンガポール、タイランド、マレーシア、フィリピンなどからも、メンバーが集まったそうですね。

木口 長く厳しかったアジアの民衆にも、ようやく陽光がさしてきたようですね。

池田 そうしたい。また、そうでなければアジアの歴史は、あまりにも不憫だ。

—— 東洋の真珠といわれる香港も、最近は新たな角度から注目されていますが。

池田 そのとおりです。

香港全域の九二パーセントを占める新界地域の租借期限きれが、あと十三年にせまっているという、いわゆる「九七年問題^{*}」がある。世界中からさまざまな角度で注目されておりま。



1983年11月25日、中国の胡耀邦総書記(左)と会見する池田大作氏。

町には、あいかわらず活気がありましたか。

池田 予想していた以上でした。人口も増加しておるようです。五年前よりも高層建築がふえ、海を埋め立ててニュータウンも誕生しています。

香港政庁の行政評議会主席である、鍾士元氏とも会見されたそうですね。

池田 会いました。「九七年問題」を深くつつこんで話し合いました。

日本総領事館の藤井総領事も同行したそうですね。

池田 そのとおりです。約五十分間ちかく真剣に応答しました。

—— 会見内容は、どうだったんですか。

池田 この問題をめぐっての中英会議が、（一九八三年）十一月中旬に二日間にわたって北京で行われ、たいへんに建設的、かつ有意義なものであったといっていた。十二月上旬にも、二日間にわたり行われましたが、会議の詳しい内容の公表は、まださしひかえているようです。

木口 最も注目されているのは、中国に返還された後に、どういう政治形態、どういう経済体制になるかという点ですね。

池田 先日、来日した中国の胡耀邦総書記も述べていたように、外国の権益は、あくまでそれを保証するとの公約がある。

ともあれ注目されるのは、自由主義と共産主義とが融合する、世界で初めてのユニークな未来の姿です。

彼がいうには、いままでは社会主義は社会主義国家に、自由主義は自由主義国家にな

るといふ單純な図式であつた。だが香港の場合、そうした見方は、あくまでも理論上、學問上の範疇はんちゆうの見方であり、實際は、やってみなければわからないといつておりました。

四季の變化が生活の節目

木口　ところで、月刊雜誌が暮れのあわただしいときに、お正月をとおりこして二月号をやっている、というのも奇妙に感じますね。（笑）

池田　私も、若いころ『冒險少年』の編集をし、『少年日本』の最後の編集長もやったことがあつたが、そのころは、雜誌がそろつて年末に新年号を出したという記憶はありませんね。

——　そう思います。調べてみましたら、ある社が意表をついてやり始めたら、他誌も右にならえでやり始めたようです。

池田 なるほど。日本はマネごとが早い。(大笑)

木口 やはり、ムダの多い生存競争のゆえでしょうか。(笑)

—— なかにはエスカレートしすぎて、十二月にもう二月号を出したところもある。ところが一月に三月号というわけにもいかず、中間をとりもつために、一月は「陽春」臨時増刊号ということになった。(笑)

木口 そうすると、年に十三冊出た計算になる。(笑)

池田 この雑誌連載は十三回でなくてよかった、よかった。(大笑)

—— そういうわけですね。(笑)

ところで木口さん、むかしは暦のうえでも、お正月が年内にくることがあったようですね。

木口 ええ、月の満ち欠けに合わせて、一か月を決める太陰太陽暦を使っていたころは、お正月よりもさき、つまり年内に立春がきてしまうこともあったわけです。

池田 そうそう。その困惑ぶりをうたった和歌があるね。

—— ええ、『古今和歌集』でしたか。

池田 たしか、

「年の内に春はきにけり 一年をひととせ

去年こぞとやいはん 今年ことしとやいはん」

という歌でしたかね。

—— そうでした。暦では、正月よりさきに立春がきてしまった。立春から元旦までのあいだを、昨年とよぶべきか、今年というべきかということですね。

木口 いまの雑誌の新年号のなかに「今年は」と書いていいものか、「昨年」と書いていいものか、迷うようなものですね。（笑）

池田 この歌からは、暦という生活の基準にズレがでたことの戸惑いと、多少その矛盾を擲や擧ゆした響きがよみとれるね。

木口 むかしの人は自然のリズムを大事にし、密着して生活していたことがうかがわれる……。

池田 天体の正確無比な運行による四季おりおりの変化を、かけがえのない生活の節目として尊んでいた。

—— 現代人は、四季の変化を感じとれなくなっていますね。

木口 冬でもスイカやイチゴが食べられるし、夏でもミカンやリンゴが食べられますからね。あまり美味しくありませんが。（笑）

池田 いま使われている暦は、明治になって、世界の仲間入りをするために採用したグレゴリオ暦（太陽暦ともいう）ですね。

木口 ええ、明治五年（一八七二年）十二月二日の翌日を明治六年一月一日にし、その日から使うことになったわけです。

池田 東洋の暦は、もともとは立春が正月であった。それを、いまの太陽暦によって、冬至のころを正月とした。

だが日本人の暮らしには、「新年」とともに、「新春」を迎えるという伝統が、長くつちかわれてきたようです。

—— 旧暦だと「新春」という言葉が、暦のうえでも符合したわけですね。

池田 そのとおりだね。それが新暦になっても、年賀状に書く「新春」「迎春」「賀春」などの詞ことばだけが残った。

木口 そうですね。

本当は元旦を新春というのは、冬の真っ盛りでおかしいのですが、やはりこうした習慣だけが残ったんでしょう。

まあ、地球が太陽のまわりをめぐる公転し、その面に対して自転軸が傾いている以上、世界中が同じ季節に新年を迎える、というわけにはいきませんからね。（笑）

スカイラブ船長と宇宙の旅

—— 先般（一九八三年十一月二十六日）、アメリカの元宇宙飛行士、ジェラルド・P・

カー博士（スカイラブ3号の船長として宇宙飛行）が名誉会長を表敬訪問し、約二時間半

にもおよぶ会談をされましたが、読者からも多くの感銘の声が寄せられております。
木口 私も同席させていただきましたが、とにかく、先生とカー博士との会談は、たいへん心温まるものでした。

—— 私もそばで拝聴させていただき、同じ感慨をもちましたね。博士は生命の故郷である宇宙を精神的にも、肉体的にも、実感したわけです。その博士が名誉会長に語りかける姿は、そのままこの『仏法と宇宙』を語る」の延長のようでした。（笑）

池田 そうですか。私にとっても、たいへん有意義な語らいであり、楽しいひとときでした。

たしかに、人類四十数億のなかで、宇宙飛行を実体験した人は、ほんの一握りしかない。この二十数年間で、二〇〇人前後ではないでしょうか。

木口 そうです。

—— アメリカとソ連あわせて、そのぐらいの数ですね。

池田 カー博士は、たいへんに謙虚な人でしたね。彼は宇宙の先覚者の一人である。

その人と人類意識、地球意識のうえにたつて、人間と文明の未来を語りあえたことは、大きい思い出のひとつとなった。

木口 私も、まったくそう思いました。私のように机上の研究に明け暮れている人間にとっては、「現場の声」をじかに聞き、会談全体がまるで復習のようでした。(笑)

—— それにしても、名誉会長の仏法からみた宇宙観、人間観の一端に接して、博士が「そうすると自分は、宇宙で仏法の勉強をしていたようなものです」と即座に答えたのには、本当に驚きました。

木口 そうでした。博士は、「宇宙には巖然とした「調和と秩序」がある」といっておりました。

—— 「神が人間に対し、ちよつと糸を引き、物事をおこしているようなものではない」ともいっておりました。

印象的な言葉でしたね。

木口 私は直観的に感じました。それは、カー博士が宇宙で体験したその実感は、た

しかに仏法の法理につながっている……。

彼はクリスチャンであると聞いているが、その言葉のふしぶしにそれを感じましたね。

—— 私もそう思いました。

池田 カー博士は、スカイラブの船長としても世界的に有名ですね。

八十四日間ですか。地球のまわりを回ったのは。

—— そうです。また博士は、通算十五時間もの宇宙遊泳もしています。

池田 そうでしたね。

船外に出て、地球の姿をながめていたら、初めに長靴のかたちをしたイタリアがわかった、といっていましたね。

—— とてつもないスピードで飛んでいる宇宙船から人が出て、吹っ飛んでいかないんですかね。おいていかれないのですか。(笑)

木口 それは宇宙船が軌道を回っているときには加速しませんので、両者とも同じ速度ですから大丈夫です。

ちようと等速度で進んでいる船のマストから物体を落としても、その真下に落ちるのと同じ原理です。

池田 いいですね。助かりますね（笑）。博士はわざわざNASA製作の、スカイラブの記録映画を持ってきてくれたんですよ。私はそれを会談の次の日、少人数でゆつくりみせてもらいました。

木口 そうでしたか。私もみせてもらいたかった。（笑）

池田 一日しか借りられなかったもので、すみません。（笑）

まあ、木口さんのことですから、またなにかの機会にみるチャンスがあるでしょう。

（笑）

——そのフィルムは、NASAの許可がないと、みることのできない珍しい記録ですね。

池田 透明な宇宙空間に、真っ白な命綱をつけた宇宙服姿の博士が、船外で遊泳しているシーンがありました。

左手に、真珠色に光る大気につつまれた地球が、大きく浮いている。

右手は、黒い漆うるしのような宇宙の空間が写っている。

この地球と無辺なる宇宙の両者を一望にできた体験は、すばらしいことであると感銘しました。

木口 私も、そういうお話を聞くと、一度でいいから、宇宙船に乗ってみたい気持ちにかられます。(笑)

—— 宇宙船が地球を一周するのは、約九十分だそうですね。

池田 そう。つまり一日二十四時間に、十五回ほどの日の出と日の入りを目にすることになる。地上の感覚からは、想像もつかない一念の変革がおこるわけですね。

ですから一挙に、人間が考えられないような新しい世界に入っていくことになる。

なにか『法華経』*で説く、「靈山会りやうぜんえと虚空会こくうえ」「三變土田さんへんとでん」、また結経の「四土しど」といっ

た、凡智では実感がたい法理が思いおこれますね。

木口 宇宙空間とは、まことに不思議なものです。

宇宙時代は人類不戦への夜明け

—— 宇宙船が大気圏から離れていくと、太陽の出は、ギラギラと照り輝く光の輪にみえるそうです。

池田 そういつていましたね。

じつに壮大な光景だ。

—— しかし、すさまじい火炎の輪である太陽が、ひとたび地球の後ろにくると、とつぜん真っ暗になるそうです。

木口 それはほとんど空気がないので、太陽の光が、地上でみるように四方にちらばったりせず、直線的に進むからです。それは地上のどこでみるものよりも、はるかにすごいものでしょう。

—— 日没が、これまた感動的なようです。

博士は身をのりだし、身ぶり手ぶりで説明してくれましたね。

地球のまるい地平線上に、薄い大気の膜がみえる。

太陽が、その向こう側に沈んでいく。

その瞬間、いくつもの鮮やかな色の帯が、みるみる広がっていく。あまりの荘厳さに、息をのむ思いだったと述懐していました。

池田 これこそ、神秘の光景といわざるをえない。

木口 わかるような気がします。

地球をおおう大気が、巨大なプリズムの役目をしますから、光が赤、黄、緑、青とみるみる変わっていく。

—— 博士も同じ説明をしていましたね。見事な色彩の変化に、しばらくわれを忘れてしまった、といっておりました。

池田 人間の凡智は、やはりこうした神秘の實在をひとたび知ると、そこにあるなんらかの法則性をみきわめたいと思うものだ。

ともあれ、宇宙時代はまさしく世界不戦、人類不戦への夜明けとなるであろう。また絶対に、そうしなければならぬ。

木口　宇宙時代は、全人类的視野の時代です。

——　博士は一〇秒ごとに、大気の色の変化をカメラに収めたそうです。

ヒューストンに帰ったら、ぜひ名誉会長にお送りしたいといっておりました。

池田　それは楽しみです。ヒューストンのスペースシャトル^{*}発射を、一度みにきてください。VIP席に夫妻で招待したい、ともいつてくれましたね。

木口　それは、うらやましいですね。（笑）

——　太陽が沈みきると、とつじよ暗黒が訪れます。と同時に、無量の星ぼしが瞬時に輝きだす。

地球上の、ありとあらゆる宝石を集め、黒いビロードの上にまき散らしても、あの美しさにはとうていかなわないだろう、と博士はいつていましたね。

木口　まさしく、輝く星が天空にぎっしりとしきつめられたような、という表現をし

たかったのでしょうか。

宇宙の神秘と生命の不可思議を体験

—— 博士は地球外知的生物の存在も、じゅうぶん可能性のあることだ、というておりましたね。

池田 人間よりも優秀な知的生物がいるかもしれない、とも話しておりましたね。地球のゴタゴタをみながら、地球の人びとは、なにをしているのか、といっているかもしれないと、笑いながらいってました。（笑）

—— 地球より下等な生物もいるかもしれない、ともいってましたね。

池田 そのとおりです。

まあ、人間にとってのたいへんな経験だったんでしょう。

彼は一人の人間ではあるが、宇宙の神秘を体験し、多くの人間よりも、はるかに生命

の不可思議さを感じとったにちがいない。

彼は、自らの人生観、生命観、宇宙観というものの理論を、自身で体系化はなしえなかったかもしれない。だが、仏法の法理を志向している自身を感じとっていたのではないでしようか。

木口　そう思います。彼の人間としての体験は貴重であり、まことに大きい。彼はよき人に出会い、それを率直に披瀝^{ひれき}できた。そして、それがもつ重大な価値を見いだすことができた。

話している姿も、たいへん満足そうでした。

——　そうでした。帰国直前に、博士に原稿の打ち合わせでお会いしましたが、同じようなことを語っていました。

木口　そうですか。

——　会談を終えて、ホテルにもどる車中で、博士は「地上で目印になる北斗七星や南十字星などが、宇宙船に乗っていると、大きさや形が変わってしまうようにみえる

ので、位置確認に困ることがある。同じように、いまの社会は、平和の問題やさまざまな不幸を解決する、確固たる目印を見失ってしまっている」と嘆いていたそうです。

ホテルに帰ってから、心理学博士でもある夫人と、会見をふりかえりながら、夜遅くまで語り合っていたそうです。

木口　そうでしょう。私にとっても忘れえぬひとときでした。

——「今回の来日は講演とかで、いろいろな人に会ったが、生涯忘れることのできない思い出は、池田先生にお会いでき、ともにいきひとときを過ごさせていだいたことです」

とも、語っていましたね。

木口　そうですか。それにしても、宇宙船からみた星はきれいでしょね。地球上からみた何千倍、何万倍の輝きでしょうから……。

池田　きれいでしょね。大気がありませんから。

星は人の心に強く語りかけてくる

—— 日本は世界中で、最も多く星がみえるといわれていますね。

池田 そう聞いたことがあります。国際的に認められている星座は八十八ありますが、南北に長い日本では、そのうち八十五までがみえるということですね。

木口 そのとおりです。東京でさえ、八十四までみえるそうです。このなかには、外国でみられない星座もあります。

—— 冬は大気が澄んでいて、一年中で、いちばん星がきれいな季節ではないでしょうか。

木口 ええ、天文ファンにとっても、本格的な星座の観測ができる季節です。

池田 ウチの三男坊は天文キチガイで、小学生、中学生のころ、よく二月の真夜中にソツと庭に出て、毛布をかぶりながら望遠鏡をのぞいていた。試験勉強よりこっちの

ほうが大事だった（大笑）。

ともかく、寒風の夜空がいちばんきれいなようですね。

木口　そう思います。

池田　星は人の心に、強く語りかけてくるものがある。かのアインシュタイン*が、シューベルトの『星』と題する歌曲を絶賛しておりましたね。

—— 私もそのレコードを持っています。有名な曲ですね。

池田　天才作曲家の彼の心には、やはり、天空を見あげながら、どうしようもない詩的情緒がやどったのでしょう。

最近私は、なんだか忙しくて名曲を聞くひまもない。これではいけませんね。（笑）

—— この曲は、彼が亡くなった年と同じ年の作品だったと思います。

池田　ああ、そうですか。

—— 子供のころよく歌った『冬の星座』や『キラキラ星』など、忘れがたい歌もありますね。

池田 そうだね。冬の星座といえば、「冬北斗」「寒北斗」などと歳時記の冬の季語としても有名な北斗七星がある。また三つ星の「オリオン」、『枕草子』に出てくる「寒^{かん}昴^{すばる}」もある。

全天で最も明るい恒星「天狼^{てんろう}」など、勇壮な荒星も多い。

木口 日本の位置は、本当に恵まれています。一年中観測すれば、ほとんどの星座をみることができます。

—— こうした自然のすばらしさを、子供たちにも教えてあげたいものですね。

池田 少年には空へ、海へ、山へ、そして自然へと、あらゆる機会をとおし志向させていくことが、ひとつの大切な教育であると私は思っている。

—— まったく同感です。

池田 たびたび、ウチの話になってしまい恐縮ですが、三男坊が高校時代の夏休みに、星の観測のため、小笠原諸島の父島、母島に友だちと二人だけで行きたいといってきた。当時は三十数時間の船旅である。女房も初めは心配していたが、育ち盛りの

男の子が都会のゴミゴミしたなかを遊び歩くより、はるかによい経験になる。私は大賛成です、ということになり行かせたことがありました。都会ではみるこのできない満天の夜空は、子供心につよくやきついたようでした。

木口　そうですか。立派に成長するうえでの貴重な経験でしたね。

日本に魅せられた世界の天文学者

——　そういえば、明治時代、日本が世界の国ぐにの仲間入りをするやいなや、世界で指おりの天文学者が、相次いで来日したといわれています。

池田　そうですね。イギリスの有名な太陽物理学者エバシェッドや、火星観測で有名なアメリカの天文学者ローウェルなどが、来日したと聞いたことがある。

木口　それは知りませんでした。いま池田先生があげられた二人の天文学者は、ともに天文学史上、忘れられない人たちです。

—— 私も調べてみましたが、イギリスのターナー、アメリカのシェバーリなどの天文学者も来日しているようです。また、日本についての印象記も残しています。

池田 その印象記を一ぺん読んでみたいです。翻訳はされているのですか。

—— たしか、ローウェルのものは翻訳されていると思います。

池田 ローウェルは、商売で日本にきたようでしたが、それも望遠鏡をもって四回も来ていると、なにかで読んだことがある。

—— 日本海側各地を旅してまとめた旅行記は、ユニークな外国人による日本論にもなっています。

それにしても、当時、まだ未開の地と思われていた日本に、天文学者が続々とやってきた。星の魅力とはたいしたものですね。

木口 むかしから宇宙を観測したり、研究したりする人は、みなロマンチストで、悪人はいないといわれています。（笑）

池田 そうですか。（笑）

大昔のギリシャの時代にも、星の世界に魅せられ、ついに月へ到着するという小説を書いた作家がいた。

やはり、無類の好人物だったようです。

—— ええ、西暦一八〇年ごろ活躍したルキアノスですね。

この小説は、あるとき、主人公の乗った船がとつぜん大竜巻に巻き上げられてしまった。それが宇宙にまで飛ばされ、ついに月面に着いてしまったという内容ですね。

木口 荒唐無稽こうとうむけいともいえますが、SF小説の古典でしょうか。（笑）

—— ところがルキアノスは、真剣にありうることを考えていたようです。

木口 そうですか。

—— ええ、その証拠に、その物語のタイトルを、ギリシャ語で『ベラ・ヒストリア』とつけました。

木口 どういう意味ですか。

—— 「本当の話」です。（大笑）

『法華経』に関心をもったカント

—— そういえば哲学者カント^{*}にも、日本論がありますね。

池田 そうそう。やはり、徳川時代のあの鎖国直後に訪日した、ドイツ人の商人が書いた旅行記がある。それをもとにして、カントが日本に対するあこがれを記したものです。ですね。

—— そのあこがれは、『東方見聞録』のマルコ・ポーロやアメリカ大陸を日本だと思ったコロンブスのように、黄金の国・日本といったイメージではない。

池田 そのとおりです。おもしろいことにカントは、非常に簡単な表現であるが、日本の仏教の中心の教典は、「法の花の経」だと記している。『法華経』の存在に、カントはつよく関心をもっていたような気が、私にはしてならない。

—— 当然そう思います。カント全集にも、そういつたくだりが出てきます。

木口 まことに興味ぶかい話です。

—— フランスに、東洋の古い美術工芸品を一堂に集めた、ギメという博物館があります。

そこの東洋研究者が日本の仏教全般を研究し、初めてその成果を発表したのが、『日蓮の教義』という著書だと、聞いたことがあります。

池田 私も聞いたことがあります。もちろん、日蓮大聖人の大仏法の奥義にかなったものではないでしょうが、それなりの次元の研究書ではある。フランスの文部省の後援を受け、ルノンドーという東洋学者が一九五八年にまとめあげ出版しております。

—— そのとおりです。

木口 そうですか。まったく新しいことを聞きました。

池田 その著書には、「仏教をその正法のうちに復興し、日本をば本源地として、そこから真理が着々と、世界の残りの部分をも被いとする云々」(『日蓮の教義』G. Renon-

deau, La doctrine de Nichiren, (Publications du Musée Guimet) Paris 1953. pp 6-7.) と書

かれ、仏法の世界性を紹介したものと聞いている。

—— 私も抄訳を読んだことがあります。

木口 ぜひ一度、抄訳を読みたいと思います。

池田 また彼は、『立正安国論』『開目抄』『観心本尊抄』をはじめ『法華取要抄』など大聖人の御書を何編か訳している。解説はともかくとして、初めてこの本をとおして、御書にふれたフランス人も多いと聞いている。

—— こうした貴重な資料は、一ぺん日本語に翻訳して、紹介するチャンスがあればと思っています。

池田 そういえばトインビー^{*}博士も、たしか『日蓮』という論文を書いていました。小冊子だったようですが、そうした背景もあり、私との対談については、博士からも強い要望があつたようです。

—— そうでしたか。初めてうかがいました。

池田 その博士が「理論上は“死”というものがわかる。しかし、実際に実感するに

は、やはり熱心な信仰しかない」と、ご夫妻で真剣な顔で語っておられた。その姿は、いまもって忘れられない。

「地球の最期」はどうなるか

—— ところで一九八三年の十一月、ブラック・ホール^{*}があるのではないか、という特異な星が、日本で初めて発見されましたね。

木口 ええ、X線望遠鏡を積んだ天文衛星「てんま」（一九八三年二月二十日、宇宙科学研究所が鹿児島県内之浦から打ち上げた）がみつめました。

池田 ブラック・ホールについては、なかなか関心がたかいようですね。香港で泊まったホテルの真ん前にプラネタリウムがあつて、ブラック・ホールをみせておりました。残念ながら忙しくて行けませんでしたが。

木口 そうでしたか。このブラック・ホールは、それ自体が、まわりの光を吸いこん

でしまう死の世界ですから、なかなかみつけるのは困難です。

池田 アメリカの天文台が過去に一つ、白鳥座で発見しているだけと聞いたことがあります。

木口 そうです。おおかたの天文学者によってブラック・ホールと認められているのは、白鳥座X-1という星だけです。しかし、ブラック・ホールでないかと考えられているのは、一九八二年の十一月に大マゼラン星雲^{*}で発見されたものがあり、今度の発見がブラック・ホールですと、世界で三番目のものになります。

池田 今回は、すぐ近くの星の光のガスがブラック・ホールではないか、とみられる星雲のウズに向かって流れていることから、発見につながったようですね。

木口 ええ、ブラック・ホールのすぐ近くに星がある場合、つまり連星になっていると、その星はかならずブラック・ホールからの影響をうけていますので、みつけやすいのです。

—— ブラック・ホールは、星の終焉^{しゆうえん}の最も神秘的な現象といわれます。われわれの

太陽も、寿命がくると同じ運命をたどるのですか。

木口 太陽ぐらいの大きさですと、ブラック・ホールになるかどうかは、微妙なところですよ。もっと大きければ確実にそうなります。

—— 太陽より大きな星の死となると、ちよつと想像を絶しますね。

木口 そのとおりです。

太陽でさえ、終末的な現象が始まれば、地球の最期はSF小説もどきの地獄絵図の世界となるでしょう。

池田 たしかアメリカの作家に、地球の最期の日を克明にえがいた有名な小説があったね。

—— ええ、リチャード・マティスンの『終焉の日』です。

池田 五千年の歳月をかけて人類が築きあげたこの文明世界が、たった五十時間で、ことごとく崩壊していく。その最期を見事に推理し、描写していたね。

—— 木口さん、天文学では、地球の最期はどこまで解明されているのでしょうか。



スカイラブ船長ジェラルド・P・カー元宇宙飛行士夫妻(左)と会談する池田大作氏。

木口 そうですね。

まず、太陽が膨張を始め、近いところにある水星、金星はのみこまれます。太陽表面ではいたるところで大爆発がおこります。

地球は表面がごとく焼けただれたような状態になります。太陽の壊滅は、五十五億年後ぐらいにおこるだろうといわれています。

池田 銀河系のなかで、太陽のような恒星が大爆発をおこし、宇宙空間に消えゆく姿が観測された例はありますか。

木口 ええ、いろいろあります。

とくにカニ星雲^{*}が、むかしから有名です。

太陽の最期は赤色巨星に

—— なぜ星は最後に膨張していくのですか。

木口 たとえば太陽は、水素の核融合反応によって、黄金に輝いています。いわば、自然がつくりあげた巨大な原子力発電所のようなものです。

—— 水素を原料にして、あの膨大な光と熱を発散させているわけですね。

池田 この宇宙の力を人類が手にしたとき、核兵器が出現した。

木口 まったく、そのとおりです。

池田 宇宙の力も、人間によって善にも悪にもなる。かつて、ある雑誌に書いたのですが、「人間の心清ければ、永遠の平和となる。人間の心卑^{いや}しければ、永久に葛藤^{かつとう}と対立の地獄である」

—— 核時代における大事な視点ですね。この点については、機会をあらためて深く論じていただきたいと思います。

池田 わかりました。

木口 そこで水素が有限である以上、太陽はやがてそれが燃えつきてしまう運命にあるわけです。

また燃えつきるまえに、太陽の老化現象が間違いなくやってきます。

—— どういう姿になるのですか。

木口 水素の核融合燃料がつきてきますと、ヘリウムのカスが灰になって、太陽の中心部分にたまっていきます。

池田 なるほど。燃えつきた石炭ガラのようなものですか。（笑）

木口 ええ、その灰によって、太陽の芯がとじこめられます。そして外側が燃え始め、芯が縮むために、逆に外側がふくらんでいきます。

—— なるほど。

木口　こうして、太陽の外側はますます膨張していきます。膨張した分、表面の温度は冷えていきますから、いままで高熱のため黄色に輝いていた光は、赤い色へと変わっていきます。

池田　それが、赤色巨星^{*}といわれるわけですか。

木口　そのとおりです。さそり座のアンタレスなどは、実際観測してみると、その半径は、じつに太陽の一七五倍——つまり一億二〇〇〇万キロにも膨張しています。池田　すごいものだ。想像もできない。そうしますと、太陽が老年期に入った場合には、どれくらいに膨張することになりますか。

木口　計算してみますと、現在の約一〇〇倍の半径七〇〇〇万キロ以上になると思われます。もしかすると、現在の約二〇〇倍に達するかもしれません。

——　それだけ大きくなると、地球にどんどん近づいてきて、壊滅的な影響がでてしまうことになりますね。

木口　ええ、地球から太陽までの距離は、一億四九六〇万キロですから、たいへんな

影響をうけるでしょう。海は沸騰し、大気も蒸発してしまうにちがいありません。

池田 太陽の体積は、地球の約一三〇万倍だったですかね。

木口 そのとおりです。

池田 そうした巨大な物質が爆発する姿はいかにすさまじいか、想像に絶するといつてよいでしょう。『法華經』に「世は皆牢固ろうこならざること水沫泡焰すいまつほうえんの如し」という経文がある。太陽も地球も、この摂理からはずれることはない。まあ不思議なものですね。

—— たとえ科学で計算できたとしても、もはやイメージもわいてこないでしょう。
木口 ええ、ちよつと想像できません。

「銀河系宇宙の死」と戸田先生の洞察

池田 戦後まもなくのころでしたが、戸田^{*}先生は、銀河系宇宙の壊滅の姿をよく話さ

れていた。当時はまだ、あまりのスケールの大きさに実感もありませんでしたが……。

木口　そうですか。どのようにいわれていましたか。

池田　「太陽系は運行を中止するかもしれない。また邁進まいしんするかもしれない。ある恒星に向かって、他の恒星もまた同様であろう。あるいは運行を中止し、あるいは邁進する。かくして噴煙は宇宙をおおい、電光は宇宙に充満し、大熱は想像すべくもない。宇宙は一大混乱を呈する。分子は分解し、また構成する。このありさまは、壮観といおうか、莊嚴しょうげんというか、見る人なければ、ただ想像するにすぎん」という内容でした。

——　そのお話は、私も戸田先生の「論文集」に載っているのを拝見したことがあります。

そうした銀河系宇宙の死を「小さな発見」と題されていたのをみて驚きました。

木口　すごい洞察と思います。いつごろのお話ですか。

池田 たしか、最初は一九四六年（昭和二十一年）ごろでしょう。

—— そうです。昭和二十一年八月一日とありました。

木口 そうですか。たいへんな卓見だったと思いますね。当時は、科学の世界でも、こうした議論はなされていませんでした。専門家でも、そこまで推論することはできなかったと思います。

池田 戸田先生は数学の天才でした。また、どんな学位でも三か月あれば、ぜんぶこなしでみせる、とよく笑いながらいわれていた。

事実、そういう方でした。まあ平たくいえば、万般にわたる大学者であった、と私は思っております。

—— 星の爆発現象は、とつぜん夜空の一角におこるので、近年まで人びとは、「新しい星」の誕生と間違えていたようですね。

木口 ええ、肉眼でみえるほどの強い光で輝きだすので、「超新星^{*}」と名づけられています。

—— 星の死にいたる現象を、新しい星の誕生と錯覚したのも皮肉なことですね。

木口　そうですね。超新星は、まもなく強い光を失い、やがて宇宙のなかに溶けこんでしまいます。しかし、そうした現象がなければ、新しい星の誕生はないわけです。

仏法で説いている「空」のとらえ方

池田　まえにも申しましたが、星の「生」と「死」もすべて「生死流転の理」にかなっている。星の死によってもたらされた物質が、膨大な時間をかけてまた太陽のような星をつくりだす。

つまり星の死は、次代の星の材料を提供することになるわけですね。

木口　そのとおりです。電波望遠鏡^{*}、赤外線望遠鏡でみますと、宇宙空間には、無数のきわめて小さな物質が遍満^{へんまん}しています。それを形容して「極微」粒子と表現する科学者もおります。

この物質が、また星となる。

—— ところで、宇宙ができたとき、これらの物質は存在したのですか。

木口 いいえ、ありませんでした。銀河や星はもちろんのこと、物質そのものが存在しませんでした。

—— どこからうまれたのですか。

木口 無からうまれた……。

—— この宇宙は空間であつても、決して「無」ではない。

木口 ええ、すべてが消滅してゼロになったようにみえても、宇宙が進化し、条件が整えば物質が生成してくる空間です。

つまり「無」ではないということが、量子力学^{*}の進歩によって解明されてきたのです。最近、陽子の崩壊について興味がもたれているのも、この関連によるのです。

池田 たしかに「無」からは、なにもうまれてこない。

ですから、不思議にも「空間」という言葉が使われていて、「無間^{むかん}」とはいわない。

(笑)

——なるほど、そうですね。

池田 この「空」という問題を、どうとらえるかをあかしたのが、仏法であることを知らねばならない。なにも存在しない「真空」と思われてきた宇宙が、じつは、物をうみだしていく生命空間であつた。この発見は、二十世紀の科学が証明した偉大な成果ですね。

木口 そのとおりです。これはイギリスの物理学者デラックが理論的に実証し、ノーベル賞を受けました。

池田 先生のおっしゃるとおり、今世紀最大の理論のひとつといえましょう。

——このゼロとみられる空間から、物質が創成され、銀河が生まれ、しだいに巨大な星が生まれてくるといふ事実は、いわゆる仏法で説く「空」という概念につうじてくるわけですね。

池田 仏法で説く「空」も、“うつろな状態”とか、“無”とかいうことではない。

簡単にいいますと、仏法では「一切皆空」とも説き、この「空」の状態から万物が生まれ、そしてまた、万物が減していくととらえるわけです。ですから、ちよつとむずかしいいい方になりますが、「空」とは、「有無を超えた実在」ということになりましたよ
うか。

木口　なるほど。そのお話で、すぐ思いうかびますのは、アインシュタインの解明した「場」の理論です。この理論は、やさしくいいますと、あらゆる空間には、かならず物をうみだしていくために働く物理法則があり、その法則が働くところを「場」としたわけです。

—— 次元は違いますが、宇宙を支配する「空」の法理の、一面をとらえている気がしますね。

木口　私もそう思います。

宇宙の深遠なる力へせまるひとつの足がかりだと思っています。

そこで池田先生、「有無を超えた実在」というお話をもう少しご説明いただけますか。

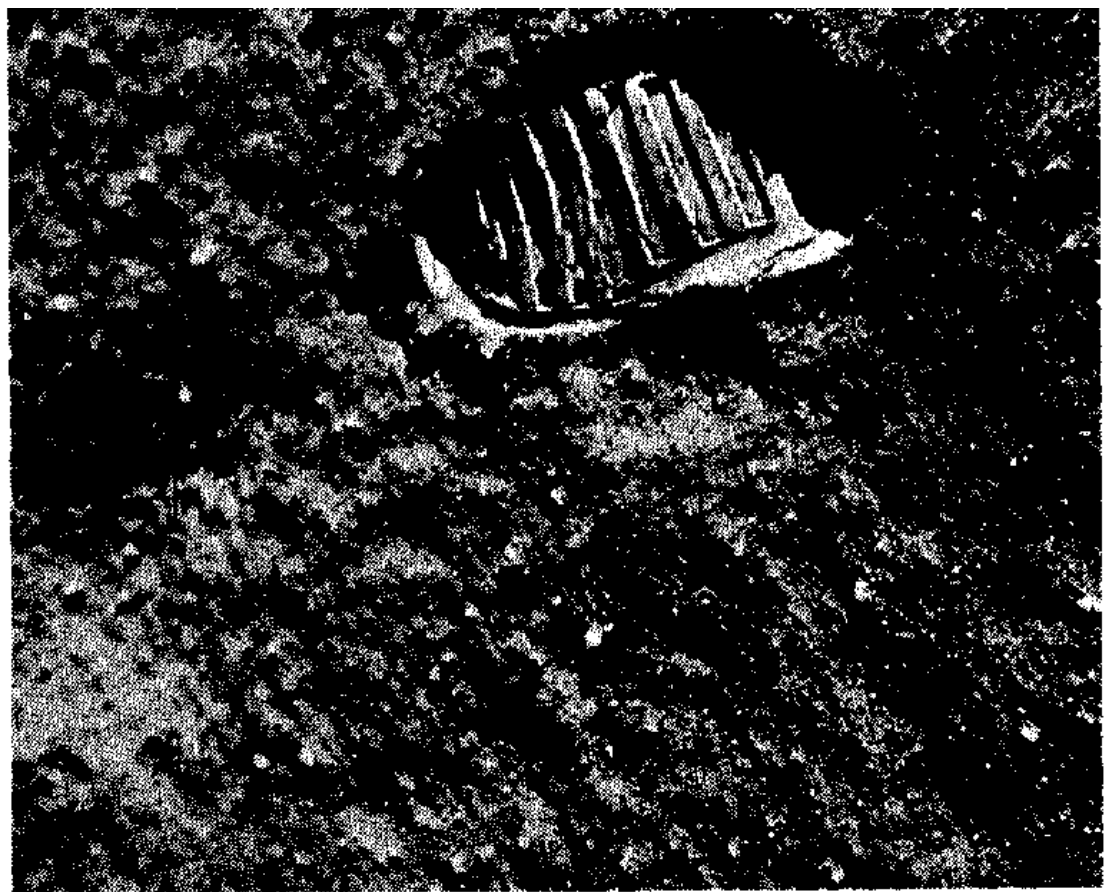
「空」とは無量の創造力を秘めた生命空間

池田　そうですね。端的に申し上げると、「空」というのは、あらゆるものを生み出す可能性を秘めた空間である。それは縁にふれることによって、それなりの条件というか、なんらかの作用で、応じ、働き、新たなものが誕生してくるということです。ですから無量の潜在力、無限の創造力を秘めた「生命空間」ともいえる。

——　この「空」という概念は、東洋の仏法だけのものですね。

池田　そうだと思います。西欧の思想、哲学はもとより、宗教のなかにもみられない。仏法独自の理念と思います。

ところが、科学の進歩によって明らかになったさまざまな真理を裏づけるためには、どうしても西欧思想の範疇はんちゆうではとらえきれないものがある。そこで、この仏法の「空」の理論を唯一のよりどころにせざるをえなかった。



アポロ11号での月面第一歩。科学の進歩によって人類は未知の世界へさらに踏みだすことになった。

——それが戦後にわかにすぐれた科学者が、たとえばハイゼンベルク*や、ボーア*、アインシュタインなどが、仏教へ接近したことの背景になるわけですね。

池田 まったく、そのとおりです。

——そうしますと、たとえば私たちの身体が、死によって、この現実世界には存在しなくなる。この状態を「空」といってよいのでしょうか。

池田 そういってよいでしょう。

この「空」とは、一心一念という不可思議な実在をとらえた、仏法の深遠な哲

理といえる。

この「空」の背景には、八万法蔵＊という膨大な理論体系もあるが、原理としては「空」「仮」「中」の「三諦さんたい＊」として示されております。

木口　なるほど、そうですか。

「空諦」「仮諦」「中諦」の三諦論とは

池田　そこで、仏法ではひとつのとらえ方として、人間があるいは万物が、この現実の世界にそれぞれの姿、形をもって存在しているのは、そうなるべき「因縁＊」によって仮かりに和合していると説かれている。

木口　因縁とは、原因ということですか。

池田　そういつてもよいでしょう。

経釈に「親生しんしょうを因となし、疎助そじょを縁となす」とあります。

結果をうむのに、直接関係するのが「因」（親生）である。また、その因を助けるのが「縁」（疎助）ということになる。

その仮に和合した姿を「仮諦けたい」という。

木口 「諦たい」とは、どういう意味でしょうか。

池田 「真実にしてあきらか」、また「永遠不変の真理」という意義です。

ですから大きくみれば「宇宙」、小さくみれば「生命」といったものの実体を、永遠の法則のうえから明確にみきわめていく、という意義になりましたか。

—— そうしますと「空諦くうたい」とは、どういうことでしょうか。

池田 簡単にいうと、万法の性質、性分のことである。姿、形あるものには、すべて個としての性質がある。

たとえば、どんな小さな素粒子*でも、それぞれ特有の性質が当然ある。

木口 そうです。あります。

池田 この性質、性分をはらんで、因縁によって和合した「仮諦」は、永久にそのま

まの状態ではなく、かならずいつか滅していくわけです。

しかし、たとえその姿、形を失ったとしても、「空諦」である性質、性分は、存在の属性として永久に残るという意味だと私は思います。

木口　すると私たちの身体がなくなっても、「空諦」、すなわちその人の性分というか、生命の傾向性といったものの働きは、永続するということですか。

池田　そう説かれております。

ですから「空諦」には、二面性がある。

仮諦としての「生」に働きかける場合と、「死」によって、宇宙に冥伏みようふくしている場合とがあります。

たとえば、生きる姿のときは、自分としての進歩がある。活力がある。無限に創造の力を発揮してゆく姿がある。

—— 死においては、みることも、とらえることもできないと思いますが。

池田　そうです。しかし、「空諦」には生命自体の永遠不変の核がそなわっている。

つまり仏法で説く「我」という実体として、厳然と存在していくと説かれているわけ
です。

——なるほど、深い哲理ですね。まさに「有無を超えた実在」ということが、私は
わかる気がします。

木口 まえに池田先生が「われわれの肉体が死んでも生命自体の境涯きようがい、つまり『我』
というものは存在する」とお話された意味がよくわかります。

——「中諦ちゆうたい」とは、どういうことになりますか。

池田 「中諦」とは、いま申し上げた永遠不変の生命の核とでもいいましょうか。「空
諦」にも、「仮諦」にも、その本源には「中諦」としての「我」というものが常に実
在している。

この「我」を成り立たしめている原点というか、発動せしめゆく根源の当体を、大聖
人は「中道一実の妙体」（『生成仏抄』）として、明快かつ具体的に説きあかされてお
ります。

—— 木口さん、よく「核」といいますが、原子の「核」というのは、どうなっているのですか。われわれの肉眼ではみることができないのでしょうかね。

木口 ええ、みえません。

—— どんな色をしているのですか。(笑)

木口 核の運動によって異なりますが、波長がまったく違うので、人間の視覚ではとらえられない色です。紫外線より、もっと紫がかっていると思えばよいでしょう。

—— 大きさはどのくらいですか。

木口 一〇兆分の一センチくらいの大きさです。重さも、たとえば陽子の場合、一兆かける一兆個集まって、やっと一・六グラムにすぎません。

池田 われわれの身体は、そんな小さなものの集合体となっているわけですか。なるほど、不思議なものですね。

木口 ところが、この目にみえない原子の核も、生成消滅を繰り返すことがわかっています。たとえば、不滅にみえる陽子でさえ崩壊するのです。

——
なるほど。

木口 近代物理学の眼は、この核の生成消滅をつかさどる不変の法則性にと、向けられてきました。

池田 なるほど。生命それ自体に不変の「核」としてそなわる「中諦」という実在も、こうした物理法則のうえからは鮮明に理解できますね。

——
仏法には「業^{ごう*}」ということもありますね。

池田 これは因縁に含まれるもので、この点についても、簡単に申し上げますと、経釈に「果を招くを因となし、また名づけて業となす」とある。この「我」というのは、生死を無限に繰り返すうちに、一定の傾向性がつくられていきます。

——
生命のクセというようなものでしょうか。

池田 わかりやすくいえば、そうでしょう。それが「業」なのです。

木口 よく「業が深い」というような場合の「業」でしょうか。（笑）

池田 それは、業のもつ意味を、一般化させた言葉でしょう。

「業」とは、過去世からの「宿業^{*}」と、現世につくりあげた「現業」とがあり、ともに来世にもたらされていく「果」の原因となる、といわれております。

この「業」が冥伏^{みようぶく}している空間、すなわち「死」が「空諦」になるわけです。

—— そうしますと、「仮諦」である「生」、「空諦」である「死」は、この「中諦」である生命の「我」があらわす二つの不可思議な働きであるということになりますか。

池田 ひとつは、そういえるでしょう。だが、この「三諦」が不可分と説かれたのが仏法の奥義なのです。ですから生きている現在についても、色心不二^{*}の哲理からいえば、精神面が「空諦」、肉体面が「仮諦」、生命自体が「中諦」ともとらえられる。さらに「仮諦」としての生にも「三諦」があり、「空諦」としての死にも「三諦」がある。常住する生命自体の「中諦」にも「三諦」があるのです。

そうした、それぞれの「三諦」が調和し、秩序ある姿をとっていることを、「円融三諦^{*}」と説いております。これが法華経の極説中の極説となっております。

さらに、大聖人は御文に、「此の円融えんゆうの三諦は何物ぞ所謂南無妙法蓮華經是なり」
（『御義口伝』）と示され、「空仮中の三諦」が完璧かんぺきに円満、円融することが、根本である。その実体は「南無妙法蓮華經」の一法なりとおっしゃっておられるわけです。

「無上宝聚不求自得」の意味

木口 なるほど、仏法はどこまでも深遠ですね。

池田 ですから仏法は、大なる宇宙、小なる宇宙のありのままの姿をとらえ、そして人間、社会のよりよき生成発展を遂げさせゆく万物万法の調和と秩序と、創造と蘇生への無限のエネルギーを示されておるわけです。

—— なるほど。

池田 この円融の三諦たる「南無妙法蓮華經」が、即、一幅いつぱくの曼荼羅まんだらとして顕あらわされたのが当宗の御本尊である。

この御本尊に唱題していくことは、この法義のうえからも、清浄にして円融円満の人格の完成につうずる、ということがわかる気がする。

その確かなる人間完成への英知と情熱は常に、人びとの幸福を志向し、平和へと広がっていく。

—— すばらしいことですね。

池田 「幸福」というものは、誰しもが願い、それを求めて行動する。だが「煩惱・業・苦」のわが身は、いかんともしがたい。自身の満足感の永遠性もない。

木口 よくわかります。人生をまじめに思索していった場合、どうしても、そこにいきついてしまう……。

池田 それが唱題の絶大なる力により、「法身・般若・解脱の三徳」と転じて、自身が幸せと思う方向へ、さらには人びとのため、社会のために行動、貢献しゆく方向へと転じ、流れが変わっていく。

木口 なるほど。

池田　ですから、日蓮大聖人は「無上宝聚不求自得」むじょうほうじゆふくくじとく*とおっしゃっておられる。

この万人が自身の境涯からは想像だにしない幸福境涯をえる。しかも心から納得するにたる、具体的実践方途を示されたところに仏法の精髓せいすいがある、と私は思っております。

宇宙法界へつうじる“祈り”

木口　いつも思うのですが、仏法は深き哲理とともに、自己完成への明快なる方途を提示しておりますね。

池田　そこで、よくこういう人がおります。

信仰していても、貧しい人も病に臥ふせる人もいる。また社会に迷惑をかける人もまれにいるではないか、と。

——　そうですね。おりますね。

池田 たしかに、そういう場合もある。

だが、一言で信仰といっても、段階もある。その浅深厚薄もある。実践年月の長短もある。また弱き自己に破れ、名聞名利のために途中で退する人もいる。

さらに、さきほど申し上げたように、人には「業」もある。そのもつ宿業も個人個人によって千差万別である。

仏法は道理である。一つの開花と結実への過程にあつては、その人の過去の因果の負いもつ姿というものは当然ある。

——なるほど。

池田 ゆえに教義の峻別もなく、冷静なる判断基準ももたずに、また多くの人びとの信仰の実証も知ろうとせず、一會員の部分的姿をもつて、その教団のすべてを推しはかつてしまうのであれば、あまりにも皮相的な物の見方の人といわれざるをえなくなってしまうのではないでしょうか。

木口 まったく、そのとおりと思います。

でいるのです。

木口　日ごろ、われわれがなにげなく使っているテレビやラジオの電波にも、こうした「空」の性質がみられます。

——電波というのも不思議なものです。この部屋にも目にみえないが、世界中で発信されたラジオやテレビの電波が充満している。（笑）

池田　それも短波、中波、長波、超短波とか、ありとあらゆる電波が交差しながらです。しかも受信機の波長を合わせれば、その波長の電波がきちつとキャッチされ、音となり画像となって再生される。じつに、おもしろいものです。

木口　電波は空間のもつ働きによるものです。空間というものはなにもなく、なんの働きもないようにみえる。

しかし実際は、たいへんな運動を繰り返しているのです。ラジオやテレビは、少々むずかしいいい方になりますが、物理学者がゲージ（目盛り）とよんでいる、空間の運動が電気をおこす性質を利用したものです。

——
なるほど。

木口　ですから、こうした事象からも、仏法で説く「空」ということが、私にはよくわかります。

池田　アメリカのケープケネディから発信した電波も、月面に着陸したアポロ宇宙船にまで届く、さらに宇宙のはるかかなたへと飛んでいく。

もったいない譬^{たと}えであるが、宇宙の根源法たる御本尊に唱題するその祈りが、電波のごとく、宇宙法界へとつうずる。

ですから、一念三千^{*}という法理もわかるような気がしますね。

——　ところで、一九八二年暮れから八三年初頭にかけて野辺山の宇宙電波観測所の望遠鏡で、オリオン座の空間に、星が生まれつつあることが観測されましたね。

木口　ええ、宇宙的な時間のスケールでの話ですが、いままでなにもなかったところに、いつのまにかガスが流れこみ、さらに回転円盤ができていることが発見されました。つまり、星の卵です。

池田 宇宙の大空間のなかに、目にみえない塵^{ちり}が、生成発展して星をつくり、そして消滅していく。「空」「仮」「中」の三諦の法理も、無量無辺の宇宙空間を対象とする、いつそう明快に、理解できる。

—— まったく、そのとおりだと思います。

第十二章

核の脅威と仏法の平和論

火薬庫で暮らしているような現代人

志村(司会) 今年(一九八四年)に入ってから、気のせいでしょうか、あいついで宇宙のことが話題になっていますね。

池田 昨年にひきつづき、ますますそのような感じがありますね。時代の進歩とともに、人びとの心の幅は、どうしても宇宙へと広がっていくものでしょう。

—— 先般、名誉会長からうかがった仏法で説く「空」の摂理については、深いお話で感銘をうけたという読者からの相当数の投書がありました。

木口 私もたいへんに勉強になりました。

—— ひきつづきこのテーマを論じていたきたいと思いますが、少々むずかしいむきもありますので(笑)、もう少しお時間をいただき、思索してからにさせていただきたいと思いますが。(笑)

池田 けっこうです。よくわかりました。私も勉強いたします。

木口 ぜひお願いします。

—— 十日ほどまえの朝刊（一九八四年一月九日付『読売新聞』）に、二〇万個の新たな星と、二万の新しい星雲が発見された、という記事が出ておりましたね。

池田 いや、私もテレビのニュースでみました。人間の視野は、いまや肉眼ではみることのできない宇宙の領域にまで達しているわけですね。

木口 その発表は、天文衛星から高性能の赤外線望遠鏡で全天を観測した成果です。関係者の予想では、一九九〇年までには、今回の一〇〇〇倍以上の性能をもった衛星が打ち上げられるだろうということです。

—— なるほど。二万の星雲だけでも驚きですが、いやまして、宇宙は人間にとっての関心事となりますね。

池田 まったく、そうですね。

こうした宇宙の発見は、すぐに人びとの生活に影響をおよぼすものではないかもし

れない。

しかし、人びとの思考性、価値観といったものに、なんらかの変化をあたえてゆくということも、また事実ではないでしょうか。

木口 そのとおりだと思います。過去の歴史においても、新しい宇宙観の発見は、常に時代の変革とともにありました。

—— ルネサンスと、地動説のコペルニクスやまたガリレオ*の天体発見との関連性などは、象徴的なものですね。

木口 いわゆる地球が回っているという発見は、近代科学の夜明けを告げる出来事でした。

—— ところで、アメリカの核戦争の悲惨さをえがいた『ザ・デイ・アフター』（『その翌日』）という映画が、世界中で評判になっているようですが。

池田 ええ、私もアメリカから送られてきたビデオをみました。

すさまじいとしかしいような場面が数多くありましたね。

木口 私もテレビの特集番組で、そのさわりをみました。

一般市民が、ある日、とつぜん核攻撃をうけたらどうなるか、という姿をなまなましく映し出しているようですね。

—— 全米一億人を震撼しんかんさせたといわれていますね。

レーガン大統領も「これは、凄みすこのある映画だ」と感想をよせていたそうです。

木口 ホワイトハウスも、この映画の影響力を無視できずに、「大統領に政治的マイナスとなる影響は、いまのところない」と記者会見で発表したほどだったようですね。

—— あの映画のなかでは、核戦争のもつ象徴的な姿がえがかれていました。

一つは核爆弾が町の上空で炸裂さくれつする瞬間まで、人びとはこんなのだかで平穏な町に、そんなことがおこるはずがないと信じつづけていた。

木口 ええ、そのとおりでした。

—— 二つには、いったん核攻撃の指令が決定されるやいなや、人間の手を離れてしまい、事務的かつ機械的にすべてが処理され、なんのためらいもなくボタンが押され

てしまうということ。

木口 まったく、そのとおりですね。

池田 衝撃的な映画だったね。だが核戦争の本当の恐ろしさは、あんなものではないと私は思う。

人間がうける言語に絶した苦しみ、悲しみは、とうてい映画に描写しきれるものではない。

木口 たいへんに鋭い指摘です。

—— アメリカ人の約五割は、この映画をみたそうです。それほど核に対する彼らの不安と関心は、たかまっているようです。

池田 たしかにアメリカも、核ミサイルにかこまれた環境で生活しているわけですからね。

また同じく全世界の人びとが、核ミサイルにかこまれて生活しているようなことになってしまった。いわば人類が毎日、火薬庫の中で暮らしているようなものだ。

—— まったく、そのとおりだと思います。

事実、この映画をみたアメリカの要人のなかにも、はつきりといま名誉会長が指摘された点に言及している人がいます。

木口 たとえば、どなたですか。

—— ヘンリー・キッシンジャー博士なども「この映画は気にいらぬ。なぜなら、核戦争をあまりにも単純化しているからだ」といっております。

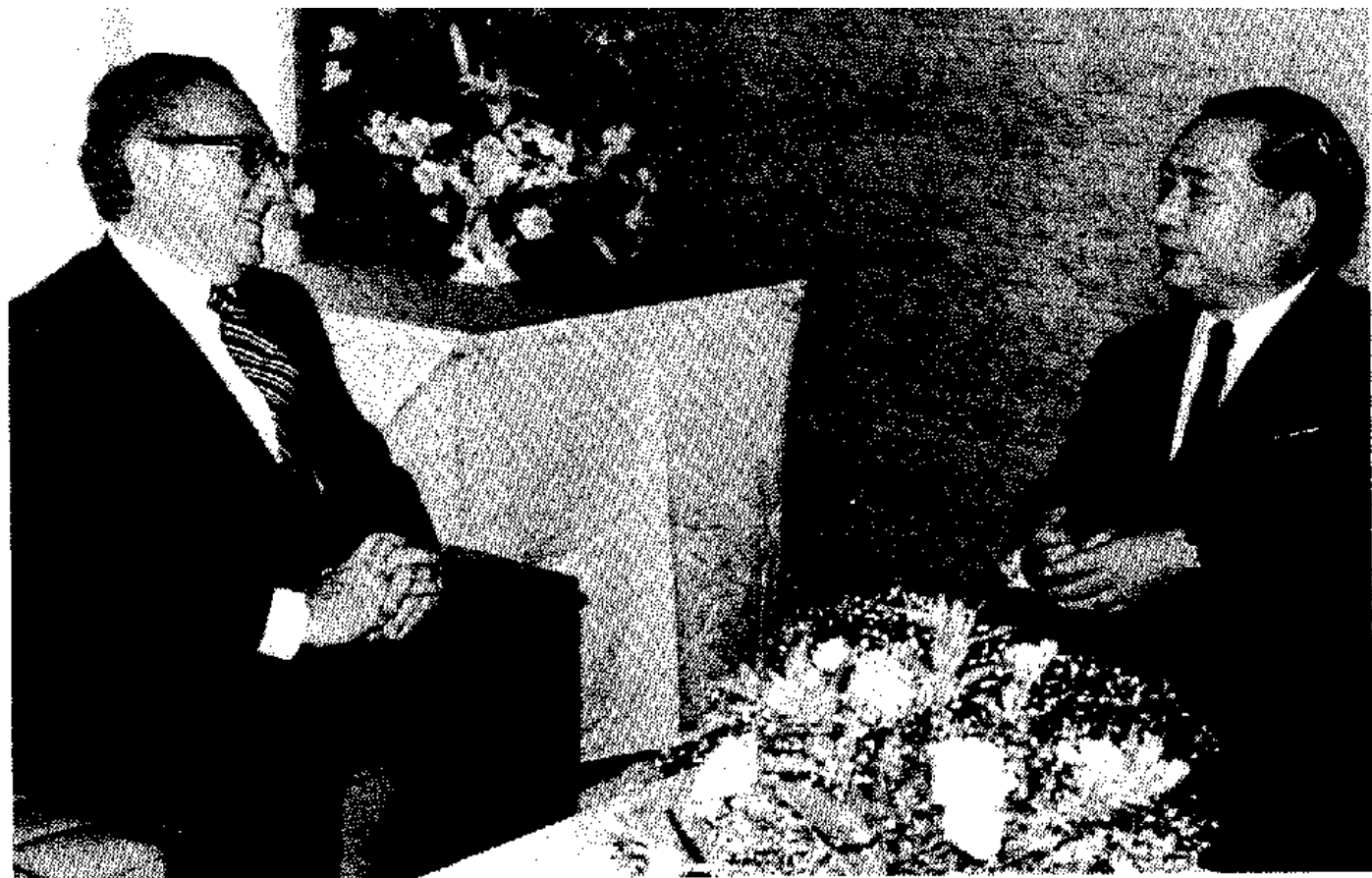
木口 なるほど。そうですか。

いかにも核戦略の当事者の言ですね。核兵器の恐怖を熟知している。

核兵器の悪魔性をえぐり出す時代

—— 名誉会長はキッシンジャー博士とは、何回か会談されておりますね。

池田 ええ、日本とアメリカで三度ほどお会いしております。博士とは、友人として



ヘンリー・キッシンジャー博士(左)と平和・文化について語り合う。(1981年7月)

平和と文化について、さまざま語りあってきました。

博士が「平和というものは戦争がない状態を意味するだけではない」、また「私は哲学が絶対に必要だと思う。それは宗教かもしれない……」と、真剣な表情で語っていたことが思いおこされます。

—— そうでしたか。

昨年、名誉会長を訪ねたカール・セーガン博士も、「実際の核戦争の悲惨さは、画面をはるかにうわまわる」といっています。

木口 セーガン博士は、天文学者であると同時に、平和運動家でも知られておりますね。

——ところで、最近では中性子爆弾による「部分的核戦争」といった、核兵器の使用を正当化しようとする論理までつくりだされようとしています。

池田 ひとむかしまえは、「核」があるから、おたがいに戦争への抑止力になる、といった愚かな論理があった。

だが、そうした非現実的な論理など誰も信用しない。そこで他に被害を広げずに、どう相手だけに打撃をあたえるか、という「使える核兵器」までもが登場してきた。

——世界の軍事費は膨張する一方です。衛星攻撃兵器、レーザー兵器といったものも開発されています。相互不信という人間の愚かな観念は、はてしない軍備拡張へとつながっていく。

池田 ゆえにいかなる形態のものにせよ、「核兵器」というものの悪魔性を、世界的にえぐり出す作業が、今日ほど要請される時代はない。

木口 まったく同感です。

民間次元での平和への交流、行動を

—— 国連と創価学会が共催した『核の脅威展』は多大な反響をよんだようですね。
池田 ええ、青年たちの平和を希求する情熱と努力により、ニューヨーク、ジュネーブ、ウィーンそしてパリの四か所で行われました。

—— 先日、ヨーロッパに出張したおり、パリで会ったユネスコ関係者も、「予想以上の反響に驚いている」といっておりました。

木口 そうですか。

被爆体験のない欧米の人たちにとっては、強烈なショックだったんでしょうね。

—— そうとうなショックをうけたようです。

木口 今年の三月には、日米合同の「平和」をテーマにした青年の集いが、アメリカ

のサンジェゴ市で開催されるようですね。

池田 ええ、日本から約八百人の青年が参加することになっております。

—— たいへんなことですね。

「核廃絶のための一千万人署名運動」といい、また国内四十四か所で行われ、約百三十万人もの人が集まった『反戦反核展』、さらに七十八冊にもおよぶ貴重な歴史の証言である反戦出版など、地道な活動がつづけられていますね。

木口 戦争体験のシリーズは、すでに海外出版もされているようですね。

池田 ええ、三冊だけ刊行されています。

—— 『平和行動展』も一月（一九八四年）に行われている栃木県で二十か所目となり、百十万人の人がみにきている。各地元の知事や学者、文化人も非常に感銘しておりますね。

また創価学会には、戦争と平和に関する資料を収録、それを展示した平和記念館が、神奈川、大阪など五か所にできている。これも、約六十万の内外からの来館者をみて

いる。

木口 難民支援活動や各種講演活動など考えると、まことに幅広いものです。

—— 名誉会長が提唱された民間次元での平和への交流、行動というものが、国の内外にわたり、着実に青年の手によって現実化されている感じがしますね。

池田 いや、どうも。

ただ平和な世界を次の世代へと残すことが、私どもの重大なる責務であると私は思っております。

—— まったく、そのとおりだと思います。

それにしても、平和を語る指導者は多いが、行動する人は少なすぎる。

以前、NHKのワシントン支局長、日高義樹氏の、核問題についての講演を聞いたことがあります。

木口 ああ、そうですか。

いわゆる一流のジャーナリストの話は、学者以上に実感と説得力をもつことがあります。

ますね。

—— 彼は、世界政治の中心地で十年以上もの特派員生活を送っています。

そのなまなましい、かつ豊かな体験をとおして語っていた。

「世界各国の指導者との会談をかさねる名誉会長のような平和行動、民間外交が現状打開のカギである」——と。

池田 あんまりおだてないでください。（大笑）

過大評価で恐縮です。（笑）

日高さんは有名ですね。十数年前になりますか、一度、静岡で桜の満開のころ、花びらを肩にうけながら、ご夫妻とかわいらしい二人のお嬢さんにお会いしたときのことか、いまもって忘れられません。

木口 そんなことがおありでしたか。

日高さんのレポートは、第一線のジャーナリストが、肌身で感じた思いがにじみでていますね。

池田 私も、ときどきテレビで拝見しています。

たしかに鋭く、的を射ていますね。

—— イデオロギーだけ、民族主義だけ、そして政治的次元だけというのでもない。自由に国境を越え、利害も打算もなく、ひたすら人類に平和と安定をとの願望を炎のごともえたぎらせ、活躍しゆく指導者の出現を、多くの民衆は待ち望んでいますね。

木口 同感です。まったくそういう時代に入りました。

—— また彼は「デモクラシーのすすんだ国の知識階層は、かならずこうした指導者に注目し、称賛していくであろう」という意味のことを述べていました。

池田 そのような多くの平和主義者が、各国から出てもらいたいものです。

私は仏法者の信念として、かぎりなく世界の地の果てまで、人間の根源の苦悩である「貪・瞋・癡・慢・疑」「生老病死」の解決のために奔走していく決心です。

—— 政治次元の平和論も大切ですが、人間次元の平和論がなければ不完全ですね。

なぜならば、一個人の不幸を解決しゆく力と、その体験こそが社会全体の不幸の淵源えんげんを解決せしめる奔流ほんりゅうへと連なっていくからです。

木口 まったく、そのとおりです。いくら人類の平和をさげんでも、立派な科学者、天文学者として尊敬されても、自分自身が宿業に流されたり、家庭不和などで苦しみ、悲しんでいてはなんにもならない。

—— そこで具体的には、地球よりも重い人間の生命を守るために、どうしてもさけられないのが「核兵器廃絶」の問題になってくるわけです。

池田 そのとおりだと思います。

多くのノーベル賞学者や文化人による核廃絶運動があり、それなりの価値と影響力もあった。だが人間社会の業ごうというか、目先の利害やめまぐるしい日常生活のなかに埋没してしまい、多くは、なんとなく忘れ去られるようになってしまう。要するに、誰かがやってくれるだろうという、あなたまかせがあまりにも多すぎる。

木口 まったく、そのとおりです。

生命の「魔性」にせまる 「原水禁宣言」

――「核」の悪魔性を鋭く喝破かつぱされた戸田先生*の講演は有名ですね。

木口 「原水爆使用者は死刑に」という宣言ですね。

池田 そうです。

―― たしかもう、二十六、七年前（一九五七年九月八日）のことだったでしょうか。
横浜の三ツ沢競技場で、五万人もの青年たちのまえででしたかね。

池田 そのとおりです。

この戸田先生の遺言は、私の脳裏から瞬時も離れたことはない。この遺言を、弟子たるものはなしゆけ、との恩師の言葉ですから。私は誰がなんと中傷・批判しようと、なにも恐れない。この道は人類にとって正しき道である、と信ずるからです。

―― 戸田先生は仏法者でありながら、なぜ「使用者は死刑に」と極言されたので

しょうか。

池田 たしかに、強い表現であった。

しかし、時が経つにつれ、私は深い意味があつたのだらうと思われてきてならない。
—— なかには原爆が落ちたら、もう死刑にできないではないか、というふざけ半分の批判もありましたね。

木口 広島に原爆を落とした操縦士でしたか、その後発狂していますね。

—— ええ、その操縦士の手記を、『潮』に独占掲載したことがあります。発狂した操縦士は爆撃機「エノラ・ゲイ」の操縦士ではなくて、その一時間前に飛びたった偵察機「B-29 ストレイト・フラッシュ」の操縦士クロード・リーザリーです。彼は精神異常をきたし、廃人のような姿で死んでいます。もう一人は、宗教の世界に入っています。

池田 彼が生前残した『ヒロシマ・我が罪と罰』という、精神科医との有名な往復書簡があつたね。ともかく、原爆を投下したという行為それ自体が、すでに死刑以上の

地獄とってよい。

木口 まったく、そのとおりです。

池田 この恐るべき核兵器を使おうとすることは、生命の「魔性」の働き以外のなにものでもない。瞬間にして何十万、何百万の人類を焼き殺そうとする心の作用である



第4回若人の祭典で「原水爆使用禁止宣言」をする戸田第二代会長。(1957年9月)

からだ。

そこで戸田先生は、仏法が説いている「無明^{むみょう}」とか「煩惱^{ぼんごう}」にそまりきった生命を、今度は「法性^{ほっしょう}」とか「菩提^{ぼだい}」という一心に転じさせていかなばならないという意義、またそういう次元から、あえて「死刑にせよ」という言葉を使われたのでしよう。

——なるほど。ちょうどその年は、有名な「ラッセル、アインシュタインの平和宣言」をうけ、パグウォッシュ会議[＊]の第一回大会が開かれていました。

木口　そうでしたね。この会議は、世界の科学者が核兵器の全面使用禁止と、あらゆる地上の戦争の絶滅を願って、初めて開かれたものです。

——世界の知識人の力によって、平和を達成しなければならぬと立ち上がったものでしたね。

木口　ところがその願いとは裏腹に、核兵器はますます増大しつづけ、その後おこった戦争にも、決定的な歯止めとはなっていないようです。

——当時、欧米の国々には、「核」への関心がまだまだ低かったころでしたね。

池田　ですからこの会議も、その時点においての意義はあったと思う。

しかし、人類的な規模の大民衆運動とはなりえなかったことは本当に残念です。

木口　私もそう思います。

——このパグウォッシュ会議から二か月後、戸田先生は、次代をになう青年、若人に「きょうの声明を継いで、全世界にこの意味を徹底させてもらいたい」と切々と訴えられたわけですね。

憲法第九条の精神は民衆の願い

木口　それは、平和運動というものが、一部の階層だけではなく、むしろ幅広い民衆レベルで受けとめられることの重要性と、その時期到来を、そのときすでに見抜かれていた、とみてよいのでしょうか。

池田　当然、そうみてけっこうです。

ともかく、人間一人ひとりの生命、心の中に「平和の砦」をつくるべきである。つまり、一個人の生命のうちには、悪業をなしゆく面もある。反対に菩薩のように、人びとのために貢献しようとする一心もある。戸田先生の宣言は、その人間生命に巣くう悪業、すなわち魔性を打ち破っていきたい、いかなばならないという強き訴えであった、とみてよいでしょう。

——なるほど。

池田　その人類平和への旗を高くかかげ、「平和」を叫びきっていく民衆の陣列が拡大されればされるほど、平和はちかく戦争は遠い。

この千波万波をつくりゆく以外に人類の完全勝利はない、と戸田先生は鋭く洞察されていたにちがいない。

——なるほど。まだ終戦後十二、三年のころでしたね。日本では、まだまだ心身ともに貧しかった。ですから、こうした高次元の平和運動への主張を受け入れるには、ほど遠い感があった。むしろ売名的な感じにさえ、受けとられかねない時代でした。

戸田先生の先見性は、たいへんすばらしいと思いますね。

木口 そう思います。まったくそうでしょうね。当時、私はまだ少年でしたが、いつも食べ物がなく、ひもじい思いをしていたことを、いまでも鮮明におぼえています。

—— 最近読んだ本に『日本の生き方と平和問題』（岩波書店刊）というのがあります。いかに民衆レベルの平和運動を構築していくか、というテーマで興味ぶかい内容でした。

憲法第九条の精神の普遍化についても論じられていました。

池田 そうですか。まだ読んでいません。

どうも最近は、多忙のためか、読書の時間がなくなってしまう、まことに残念です。諸君はまだ若いんだから、大いに読んでもらいたい。（笑）

木口 いや、それほど読めないんですよ。

池田 それはいけない。

若い諸君がどんどん読んで、私たちに教えてもらいたいものだ。

—— もっともつと読むようにいたします。

池田 戸田先生が、亡くなる直前に、たしか半月前のことだったと思いますが、「きょうは、なにを読んだか」と、とつぜん聞かれたときは驚いた。

またいつも、「若い君たちがドンドン本を読んで、私に教えてくれよ」とおっしゃっていたことが忘れられない。

いま私も、その先生の年齢になってしまった。(笑)

木口 そうでしたか……。

池田 ともあれ、戦争放棄の願いは、すでに世界の民衆の心のなかに深く根ざしたと思う。

民衆のなかに根ざしたからには、今度はその戦争を放棄し、平和を永遠たらしめるための幹を育て、枝を繁^{しげ}らせ、果を実らせていかねばならない。

—— まったく、そのとおりですね。

池田 不思議にも、世界唯一の被爆国であるという事実とあいまって、日本国の憲法

の第九条にこの精神がうたわれているということは、世界の多くの人びとは知らないかもしれない。

だが平和への日本の使命は、いやまして重いということを、国民はつよく自覚すべきであると思っております。

木口 まったく同感です。

日本が世界から信頼される、平和国家の道を歩めるかどうかの重大な分岐点に、われわれはたっていると思いますね。

池田 さらに深い次元でいえば、私は仏法者ですから、日蓮大聖人が日本にご生誕なされたということも、まことに甚深じんじんの意義があると思っております。

——なるほど。さきほどの本のなかで、科学者の豊田利幸氏が核と平和の問題について「最後は人間の問題である」と語っているのが印象的でした。

池田 そうですか。

そうすると、私どもが数十年来、一貫して主張してきたことと一致してくるわけですね。

ガリレオの望遠鏡から四〇〇年

—— さきほど赤外線天文衛星のお話が出ましたが、この地球のまわりには、いくつもの人工衛星が飛び回っているようですね。

木口 ええ、正確にはわかりませんが、約三〇〇〇といわれています。機能を停止したものを含めると一万ちかくになるそうです。

—— そんなにあるんですか。

木口 たとえば、テレビの天気予報などでおなじみの静止気象衛星「ひまわり」は、赤道上に打ち上げられ、東に向かって二十四時間で地球とともに一回転します。

—— 人工衛星は、たいへんすぐれた性能をもつようになりましたね。

木口 そうです。偵察衛星といわれるものは、地上の三〇〇メートル四方ぐらいの場所を映像に撮影できるそうです。さらに詳しくみたいと思う場合は、その部分を、そ

の三〇倍に拡大してみることができそうです。

—— そうしますと、たとえば銀座を歩いている人の姿も、みれるわけですか。(笑)

木口 銀座四丁目の信号を待ちながら、タバコを吸っている人の姿を、クローズアップしてみることができるとの精度だそうです。(笑)

池田 すごいものだ。驚きです。そうしますと、宇宙に打ち上げられた、それらの望遠鏡を地球に向けると、地上のすみずみまで手にとるようにわかるようになったわけですね。

木口 赤外線やX線を使つての地球の地下資源探査も行なわれています。

池田 そういえば、エジプトの伝説に出てくる「幻の川」の跡が、スペースシャトル*「コロンビア」の撮影した写真から、初めて発見されましたね。

木口 ええ、新聞にも報道されたことがありました。

—— ナイル西部砂漠さばくの下に、数十万年前の川の跡が実際に残っていた、という驚くべき発見でしたね。

池田 高いところから、確かな鋭い眼で見れば、すべてのことがわかるということに
つうじますね。(笑)

木口 こうした赤外線やX線などを使った望遠鏡をのせた人工衛星が打ち上げられ、
宇宙も地球で観測するよりも何万倍もの広がりをもって解明されています。

池田 たしかガリレオが自ら望遠鏡をつくり天体を観測してから、ほぼ四〇〇年で
すかね。よくここまでできたと思いますね。(笑)

科学の進歩は、まことに偉大だ。こうした人類の英知が、人類を滅ぼすために使われ
るようなことがあつては絶対にならない。

木口 そのとおりです。

心ある科学者が、最も危惧^{きぐ}するところです。

—— 名誉会長と会談されたカー博士も、宇宙船がオーストラリアの上空にさしか
かったとき、山火事を発見したそうです。

木口 ええ、地上に連絡したところ、山奥のことだったので、まだ発見されていな



スペースシャトル「コロンビア」はサハラ砂漠に
“古代の川”の跡を発見した。(1981年11月)

かったそうです。それで、たいへんに感謝されたそうです。

—— ところで、日本で初めて望遠鏡をのぞいた人は、織田信長だそうですね。

池田 そう聞いたことがある。いまから四〇〇年ぐらいまえ(一五七四年)、たしか三〇〇キロ四方を一目でみられる遠目鏡^{とめがね}を献上された、という記録が残っているようだね。

—— ガリレオが木星の衛星、月の山と谷、太陽の黒点などを発見する数十年前のことのようです。もちろん、天体

を観測するものではなかったようですが、望遠鏡のはしりみたいなものですかね。

（笑）

池田　まあ当時は、そうとうの貴重品だったんでしょうね。外国の元首への格好かつこうの献上品でもあったわけですね。たしか徳川家康にも贈られた、という記録があるようですね。

——　そういえば、江戸時代のおもしろい逸話があります。ある日、殿さまが天守閣から遠目鏡をのぞいていた。すると城を指さしながら、コソコソと話しこんでいる二人の男の姿がみえた。その殿さまは、思わず遠目鏡に耳をあてた。（大笑）

「核エネルギー」の仕組み

——　こうした笑い話のような時代から、科学は長足の進歩を遂げ、ついに星の研究から「核エネルギー」を発見したわけですね。

木口　そのとおりです。人類が初めて原子炉の実験（一九四二年）を行ない、この力を手にしてから、はや四十二年がたっています。

池田　この宇宙の力の発見は、知ると知らざるとにかかわらず、人びとに多大なる影響をおよぼしている。

だが「核エネルギー」という言葉がもたらすイメージは、莫大ばくだいな破壊力をもっている。と同時に、むずかしい科学の世界のものということになってしまふ。

——なるほど。たしかにそうです。

池田　ですから、こうしたことも、人びとが「核」という問題に積極的に取り組もうとする意欲がでてこない遠因の一つになっているのではないだろうか。

——そのとおりだと思います。なにか自分たちには、いかんともしがたい問題という感じがありますね。木口さん、ぜひ一度、わかりやすく教えてください。（笑）

木口　わかりました。簡単にいいますと、この宇宙に存在するあらゆる物質は、「原子」というまことに小さなものから成立しています。しかも、この原子には「核」が

あり、そのまわりを、それにみあった数の電子が回っています。

—— そうしますと、太陽のまわりを、いくつもの惑星が回っている太陽系のようなものですね。

それにしても、原子のような小さなもののなかに、太陽系のようなものがあるというのもまあ不思議だ。(笑)

木口 本当に不思議なのです。この万年筆にしろ、灰皿にしろ、すべてこの無数の原子がキチツと並んで集合しているのです。

—— そうすると、われわれの身体も、数えきれないほどの小さな原子が集まっているわけですか。

ますます不思議だ。(笑)

木口 しかも、原子の大部分は空間で、実際には「空っぽ」だといってもよいものです。たとえば、私たち自身が原子の核の大きさとしみますと、隣の人は一〇キロ向こうにいることになります。

——するとわれわれの身体は、ほとんど“空っぽ”ということになる。もう考えられない。(大笑)

木口　ですから私は、仏法で説く五陰ごおんが“仮和合けわごう”^{*}ということがわかる気がしますね。
——なるほど。そう考えざるをえませんか。

池田　われわれの身体にも数えきれないほどの原子の核があり、そのまわりを電子が回っている。いわば、太陽系の集合体のようなものである。まさに、宇宙の縮図そのままとみてよいでしょうね。

木口　そのとおりです。しかもこの原子の核も、一つの宇宙をつくっており、それは、「陽子^{*}」や「中性子^{*}」といった素粒子からできています。この「陽子」と「中性子」を強い力でひきつけ集めているのが、「核力^{*}」というものです。

これは、この宇宙を支配する四つの力の一つです。まえにも申し上げましたが、宇宙のあらゆる物質は、ニュートンの「重力」、マックスウェル(英国スコットランドの数学者、物理学者)の「電磁気力」、フェルミ(イタリアの物理学者。史上最初の原子炉を建

設)の「弱い力」、そして湯川博士^{*}の発見した「核力」という四つの力の支配をうけています。

——なるほど。

木口 この四つのなかで最も強く、原子の核をつくっているのが、この「核力」の働きです。

池田 なるほど。この力が、原子爆弾のものと力となったわけですか。

核爆弾の原理とその恐るべき魔性

木口 そのとおりです。

十七世紀までの最大の発見は、ニュートンの万有引力^{*}でした。この核力の発見は、二十世紀の物理学の勝利といわれています。

——なるほど。そうですね。

木口 二十世紀になって、宇宙の力についての解明がすすみ、また同時に湯川博士などにより、原子核や素粒子という極小の世界のもつ莫大ばくだいなエネルギーが発見され、時間・空間の性質が明らかにされることによって、いままで思いもよらなかったエネルギー源があることが、つぎつぎとはっきりしてきました。

池田 簡単にいうと、この新たな発見は、アインシュタイン*の相対性理論と量子論に集約される、といってよろしいのですか。

木口 ええ、その二つが、あらゆる宇宙の事象にあてはまることが実験により証明されました。

池田 リンゴが落ちることによって発見されたニュートンの理論ですと、私たちもなんとなく理解できる気がする。(笑)

しかしアインシュタインの理論は、われわれの感覚ではとてもとらえきれない。(大笑)
木口 まったく、おっしゃるとおりです。アインシュタインは、目でみることできる物質の中に、目ではみえない膨大なエネルギーの存在を明らかにしたわけですか

ら。

——
なるほど。

木口　アインシュタインの計算によると、物質のもつエネルギーとは、物質の質量に光の速さの二乗をかけたものに等しいということになります。

——
なるほど。なるほど。

木口　これは、ほんのわずかな質量でも、それがエネルギーに変わったとき、膨大な力になるという宇宙の法則です。

科学の世界では、それまで物質の総量とエネルギーの総量は、それぞれ別々に永遠に変わらないと考えられていました。

池田　なるほど。そうですか。

木口　実際にアインシュタインの公式に数値を入れてみますと、質量一グラムはだいたい二〇兆カロリーの熱量に匹敵します。つまり一グラムの物質があれば、一〇〇メートル立方の水を二〇度温めることができます。

—— この原理から核爆弾ができたわけですか。

木口　そのとおりです。ある核物質が他の核物質に変化するとき、働く核力の大きさが変わるので重量が変わります。反応前と後の重量の差が、放出されるエネルギーです。

ところで、原子のなかで素粒子*一個あたりについて、重量のいちばん軽いものが鉄です。この軽いものにむかって変化するとき、エネルギーがでます。

水素が鉄に変わっていく反応を「核融合」といい、「水爆」もこの原理からできます。ウランから鉄にちかづいてゆく反応を「核分裂」といい、「原爆」の原理になります。

—— なるほど。

木口　この物質を強力なエネルギーへと転換する核の反応は、この宇宙では、星の光のエネルギー源として知られております。地球上では、しぜんにはおこらない。人間の操作によってのみおこります。

池田 広島に落ちた原爆は、わずか一グラムの質量からうまれるエネルギーと同じといわれていますね。

たしかに人類は、このかけがえのない地球という「生命のオアシス」をも破壊してしまふ、巨大な宇宙のエネルギーを手中にしたわけである。

ゆえに人びとは、平和に対し、無関心であってはならない。常に賢明でなければならぬ。

—— たしかに、そういう時代に入りました。現在、全世界に核弾頭は、五万个以上あるといわれます。その破壊力は、広島に投下されたものの一六〇万倍にもあたるそうです。

しかも、こうした軍拡は、ますますエスカレートする一方です。

木口 恐るべきことです。

池田 御書にも「賢きを人と云いはかなきを畜といふ」（『崇峻天皇御書』）とありますね。

—— こうした事態は、人類の業というか煩惱というか、これをつくった人類自身
が、もはや手におえないところまでいってしまった。

木口 核兵器の魔性は、まるでガン細胞のように文明を破壊してゆく。

気づいたときには、死の病になっているようなものです。

—— なかには、人間死ぬときはいつしよというような、あきらめの姿も感じられま
すね。

池田 平和の大切さや、平和の恩恵というものを人間は、ふだんは実感にくいものだ。
同じように、核戦争という大きな不幸も、なかなか真剣に考えることができない。

—— そのとおりですね。なかには、広島も長崎もわずか十年たらずで復元した。
だから、かりに核戦争があっても、また復元できるというような乱暴な論理もあり
ます。

木口 問題はそうした方法論、各論ではない。平和への各国間の話し合いであり、平
和を願う民衆の声の結集ではないでしょうか。

人間のもつ「煩惱」とは

—— ところで、むかしのオランダの哲学者の言葉に「平和とは戦争のないことではなく、美德であり慈愛と確信、そして正義への性向である」というのがあります。

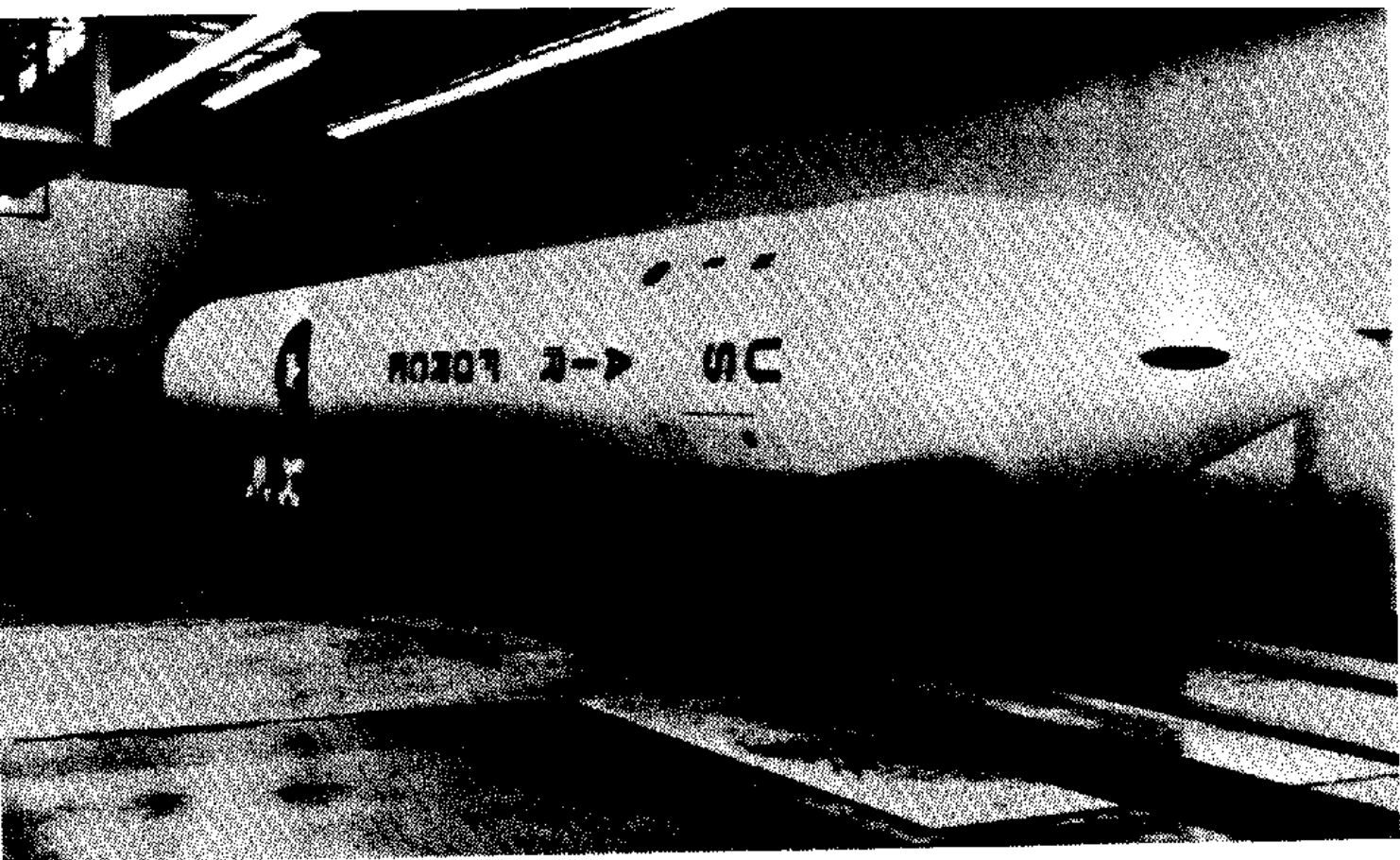
木口 蘊蓄うんちくのある言葉ですね。

池田 スピノザの有名な言葉だね。私も、たいへんに共感をおぼえる言葉です。

いかに平和をとえ、行動しようとしても、その人自身の人間性をたかめゆく確たる哲学性、思想性がなければ、永続性のあるものにはならない。

木口 「慈愛」「正義」とは正反対の、人間のもつ欲望というか、煩惱というか、このさけがたき一点を無視しては、真実の自身の向上、社会の変革もありえなくなってしまう。

—— 大事な点です。「煩惱^{*}」とは、どういうことをいうのでしょうか。



世界に核弾頭は5万個以上あり、その破壊力は広島投下の原爆の160万倍にあたるといわれる。

池田 簡単に説明しますと、人間には「見思惑」^{けんじわく}、「塵沙惑」^{じんじゃわく}、「無明惑」^{むみょうわく}という三惑がある、と仏法には説かれております。

—— なるほど。

池田 「見思惑」とは、見惑、思惑のことである。見惑は、物事の道理に迷うことである。

思惑は、生まれつきそなわっている本能的迷いをいいます。これがいわゆる「貪」「瞋」「癡」「慢」「疑」というような煩惱の姿となって発現してくる。

—— そうしますと、煩惱という意味

は、私たちの心身を煩^{わづら}わせ悩ませる、いろいろな精神作用の総称とっていいわけですね。

池田 そういつてよいでしょう。

先天的にしろ、後天的にしろ、生命そのものがもつ働きであるがゆえに、消そうにも消せないわけです。

木口 よくわかります。本当にどうしようもない。(笑)

「塵沙惑」とは、どういうことでしょうか。

池田 これも簡単にいいますと、いまの見思惑は自身の内面における迷いである。
——なるほど。

池田 これに対し、塵沙惑とは他人を救おうとしたときに生ずる煩惱といえます。

木口 なるほど。一步高度な悩みとなるわけですね。

池田 それぞれ異なった性格、立場の人びとを救うためには、この社会のありとあらゆることを知らねばならない。その妨げとなる惑いをいいます。

さらに広げていえば、いくら社会的に救済策、制度がつくられても、そこに慈悲の精神がなければ現実に救済されない人の数は塵沙のごとく、無量無数という意味にもなります。

木口　まことに鋭い観点ですね。

——　そうしますと「無明惑」とは、どういうことでしょうか。

池田　無明とは、創造への生命発動を一切消滅させてしまふ働きともいえる。

ですから、人間生命が本来もつ生への力、無限の知恵や慈悲の行動が、完全に閉ざされてゐる姿をいっております。

御文には、こうした姿を「無明は明かなること無しと読むなり、我が心の有様を明かに覺らざるなり」（『総勘文抄』）と説かれております。

——　なるほど。

池田　さらに、この無明惑は根本惑ともいい、見思惑、塵沙惑も、ここからすべて派生していくといわれております。そこで、大聖人は、「末代濁世の心の貪欲・瞋恚・

愚癡^{ぐち}のかしこさは・いかなる賢人・聖人も治めがたき事なり」（『滅劫御書』）とおっしゃっておられる。

木口 まったく、そのとおりです。いかに高名な学者、哲学者もいかんともしがたい。妙法の力用で無明を転じて法性に

池田 この人間の本性ともいうべき、どうしようもない「無明」が、即^{すぐ}すばらしき人間性の「法性」へと転換しうる現実的方途を示されたのが、日蓮大聖人の仏法といえるでしょう。

木口 なるほど。たいへんな哲理だ。

—— そうしますと、誰人もが妙法の力用によって、この無明をも法性に転じゆくことができるという意味ととってよろしいのでしょうか。

池田 そうです。

御文に、「妙とは法性なり法とは無明なり無明法性一体なるを妙法と云うなり」（『御義口伝』）と説かれています。

木口　なるほど。

池田　少々むずかしい論議になりますが、いわゆる大乘仏教^{*}では、人間のもつ煩惱というものを滅尽させる必要はないと説かれています。むしろ煩惱を離れるということとは、生命それ自体の否定につながるまで説くわけです。

木口　そうしますとこの悩み、苦しみ、悲しみの人間が、じつは尊極^{そんごく}なる法性をもっているというわけですか。

池田　そのとおりです。したがって、小乗仏教^{*}で説く、わが身の存在をも否定してしまふ「灰身滅智^{けしんめつち}」というような、非現実的な修行を厳しく否定するわけです。

——「灰身滅智」といえば、有名な仏法の説話に、釈迦と法論をたたかわせた外道のジャイナ教の教主・大雄^{だいおう}の話がありますね。

池田　そうだね。釈尊は法論のはじめ、大雄の豊富な知識に圧倒されたかのようにみ

えた。しかし当然のことながら、釈尊が大雄の偏見を打ち破ったその瞬間、洞窟の中で対座していた大雄の身体は、とつぜん灰やチリのようにくずれ、吹きこんだ一陣の風と共に消えてしまう。

この故事は、自分の知識や智恵のみをたより、自分の力だけで悟りをえることができるという二乗、つまり知識人の限界を厳しく示した話だと思っています。

—— 自己の知識や智恵だけを頼っていては、最後は自身のなかで矛盾が生じ、自らを滅するしかないということですね。

木口 なるほど。身につまされるような話ですね。（笑）

「核兵器」は「第六天の魔王」の働き

—— 大乘仏教というのは、人間のもつ煩惱を否定しないわけですね。

池田 そのとおりです。

まえにも申し上げましたが、「法華宗の心は一念三千・性悪性善・妙覚の位に猶備われり元品の法性は梵天・帝釈等と顕われ元品の無明は第六天の魔王と顕われたり」（『治病抄』）という御文がある。

—— ええ、ありました。

池田 この妙覚の位とは、簡潔にいいますと、仏の悟りの境地ともいえる。それであつても性悪、性善の両者がなおそなわっている、と説かれているわけです。

木口 なるほど。仏法は平等ですね。（笑）

池田 この宇宙のあらゆる生命にも、この無明と法性が一体となって存在している。この無明と法性が、一小宇宙たる人間の善と悪の作用となりあらわれてくる。

これが妙法を根幹としたとき、「梵天・帝釈」すなわち人間生命の存在を守りゆく働きとなる。

—— 「第六天の魔王^{*}」とはどういう意味でしょうか。

池田 人間の悪なる働きの根源とでもいいましようか。

これは欲界の最頂に住し、精気を奪うことをもって自己の楽しみとするので、「奪命者^{しゃ}」とも説かれている。

この生命の根源的魔性こそが、一個の人間にあつては「生」への力を奪いとっていく。社会にあつては、多くの人びとの「生」を奪っていくということになる。

ですから「核兵器」は、仏法で説くこの「第六天の魔王」の働きといえるでしょう。
木口 なるほど。

—— 大なり小なり私たちは、煩惱^{ぼんのう}のかたまりであり、精神的肉体的欲求を繰り返しています。

おいしいものを食べたい、お金が欲しい、美しいものをみたい、樂をしたい……。これは人間誰しもの願いだと思ひますが。

池田 そのとおりです。「無明法性一体」ですから、そうした人間がもつさまざまな欲求・欲望を否定するわけではない。

それを人間らしい崇高な次元の欲望へとたかめていく、これが「煩惱即菩提^{*}」であ

り、「無明即法性^{*}」という原理である。

これを御文には、「煩惱^{ぼんのう}の薪を焼いて菩提^{ぼだい}の慧火^え現前^{げんぜん}するなり」（『御義口伝』）と説か
れている。

木口 なるほど。仏法はどこまでも深遠ですね。

池田 ですから、妙法にてられながら、個人にとっては人のため、社会のため、ど
う貢献しゆくかという煩惱をもやす。

社会にあつて指導者は、どう人びとを幸福と平和へと導いていくかという大煩惱を
燃やしていく、という方程式になってくるわけです。

木口 なるほど。よくわかります。

—— すばらしい法理です。大いなる煩惱は、民衆救済への偉大なるエネルギーへと
転換していくことになる。

木口 凡智では、はかりしれない仏法の卓越した生命観ですね。

これこそ偉大なる「変革の原理」といってよい。

池田　ともあれ、道遠きようであるが、この一個の人間存在を確実に変革しゆく道こそが、確かなる平和への第一歩といってよいでしょう。

木口　まったく、そのとおりだと思います。その意味で私は、生命尊厳、人間主義である仏法の「中道」のいき方に共感をおぼえますね。

地球破滅の道を回避する方途

—— 先日（一九八四年一月十四日）、名誉会長と対談したハーバード大学の平和と開発問題にたずさわるモンゴメリー教授も、「中道の拒否は『死せる平和運動』、賛成は『生きた平和運動』」と創価学会の平和運動をたかく評価しておりましたね。

池田　ええ、たいへんに楽しく有意義な語らいでした。

教授は、ハーバード大学の政治学部長という立場にありながら、まことに謙虚で温厚な方でした。かつ学者らしい鋭い眼をもっていた。

私の数年来の友人である平和学者のページ・ハワイ大学教授も、ストックホルムの世界未来研究連合会に出発する寸前のようでしたが、いっしょにこられました。

—— そうらしいですね。

池田　ともあれ、政治や経済の革命もあつた。産業や科学の革命もあつた。だがその革命は、常に新たな別の問題をもたらしてきた。

木口　まったく、そのとおりです。

池田　ゆえに私は、人類に残された最後の革命は「精神革命」、さらにいえば「人間革命」にあると思っております。

—— まったく同感です。

ページ教授も、「私はそれを、非暴力による革命とよんでいる」と、名誉会長とまったく同じ志向性であるといっておりましたね。

池田　ですから私どもは、この破滅の道を回避する方途は、人間原点に立った、すなわち仏法による運動以外にないと、つねづね訴えておるわけです。

木口　なるほど。

池田　日蓮大聖人は、その具体的方法を、「心地を九識にもち修行をば六識にせよ」(『上野殿後家尼御返事』)と教示されております。

――　六識とは、どういうことなのでしょう。

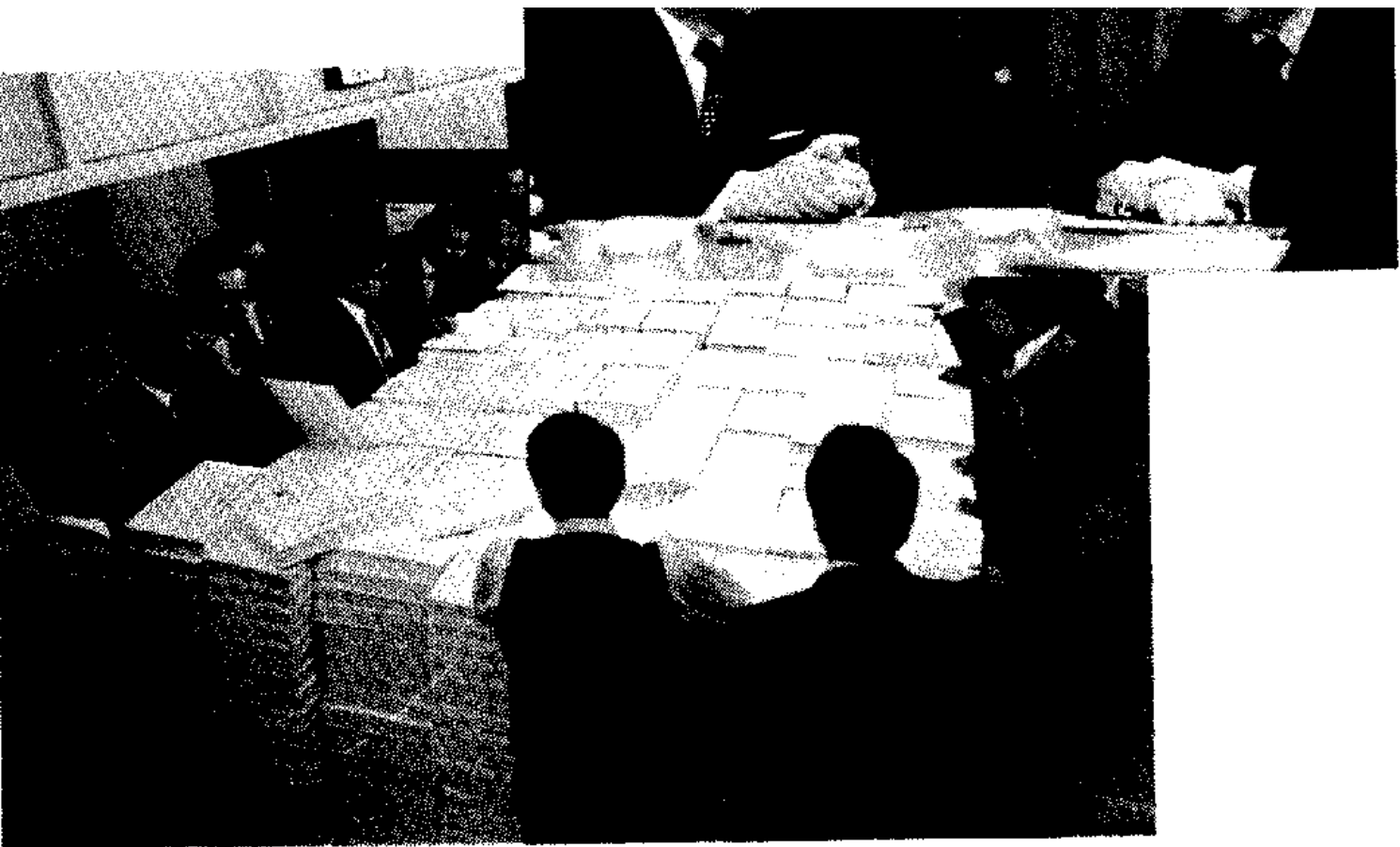
池田　簡単にいいますと、人間が生きていくうえで意識される感覚や心の六つの働きのことである。

「目、耳、鼻、舌」の四識、「身」の五識、さらには「意識」としての心の働きを含めての六識です。

――　なるほど。よくわかります。

池田　この六識とは、いわば日々の生活のなかで、家庭や、社会での人間の営みを創造せしめゆく働きとみてよいでしょう。

ゆえに信仰は即生活でなければならぬ。深山幽谷に閉じこもっての仏道修行ではない。また一人だけの信仰もありえないと思います。



ワルトハイム国連事務総長に創価学会青年部による
核廃絶—1000万署名簿を手渡す。(1975年1月)

木口 なるほど。そうすると一般には九識というのでしょうか、なにか「悟り」の境地に達することが仏法の修行の目的のように思われていますが。

池田 通途の仏教においては、そういうことになるでしょう。

そのために歴劫修行りやくこうといって、数生にもわたる長い厳しき修行を経て「法」の覚知があるとした。

しかしそれだけにとどまるのでは、自己満足にすぎなくなってしまう。また厳しき現実社会の変革の論理にならない。

—— そのとおりです。宗教というのは觀念の遊戲であつてはいけませんね。

目ざめる人びとの運動こそ平和への力

池田　ですから、文底独一本門たる大聖人の仏法においては、この仏法自体が有する絶大な仏力・法力によつて、ただただ「南無妙法蓮華經」を唱えることにより、因果俱時^{*}で、ただちに九識という尊極の生命に事實のうえで立脚することができると説かれておるわけです。

つまり「心地を九識にもち」——わが胸中の心の奥底に、「九識心王真如の都^{*}」たる南無妙法蓮華經を信受して、九識の生命に立脚することである。

また「修行をば六識」——すなわち、九識の生命を根幹として、今度は六識の生活や社会に積極的に働きかける。

人びとに貢献し、平和な樂土を築くために行動する。さらに、多くの人びとが安穩な

る日々をおくるための指標をあたえる。——つまり人間が安心して、豊かに暮らしていける社会の建設。まあ仏国土をつくりあげゆくための布教や実践活動を、さすわけだと思っています。

——なるほど。人間の個の確立というものの具体的姿は、あくまでも時代、社会のなかにおいてのみ発揮されるべきであるということになるわけですね。

池田 そのとおりです。

ゆえに妙法は、ゆきづまりの現代社会にあつて、人びとに無限の創造性をもたらす。そして、生きいきとした活力をあたえゆく「蘇生の法」といわれるわけです。そしてその妙法を基調とした、目ざめたる人びとの運動こそ平和への確かなる力となり、波動となつていくと信じております。

木口 自らが常に向上し、充実した生き方をするなかにこそ、真実の平和運動の軌跡がある……。

—— 汗水流して仕事に励む。子を育て家庭を守る。また勉学にいそしむ。その日常

生活のなかで、人びとに強靱きやうじんなる「平和への意志」を広げゆくことは、決してムリがない。またそうでなければ、運動の永続性もなくなってしまう。

木口 まったく同感です。平和運動の理想ですね。

—— 先日、ヨーロッパに長期滞在し、いちじ帰国した友人から、次のような話を聞きました。それは、彼が欧州国連本部のジャイパール氏に会ったときの話です。

池田 そうですか。ジャイパール氏は、ジュネーブにおいて国連事務次長を務めている人物ですね。

—— ええ。

氏は、「これまでの反核・平和運動は、どうしても反権力・反政府運動のみに片寄りがちだった」

木口 そうですね。

—— 「それに対し、創価学会の平和運動は人間生命尊厳の理念を根底に、幅広く民衆の覚醒をうながすという意味で、これまでの運動とはまったく違っており、私は心

から共感をおぼえる」と述べていたそうです。

木口　なるほど。よくみておりますね。

——　さらに「今後も、全面的に支援していきたい」と、熱っぽく語っていたそうです。

木口　心ある人びとは、人間に光をあてた運動に着目し、かつ確かなる希望を見いだしている。

——　最後になってしまいましたが、木口さん、なぜ二月が「閏月^{うるす}」なんですかね。

木口　古代ローマの暦では、いまの三月が一年の始まりになっていました。当時の閏年というのは、一年の終わり、つまり二月の最終日に一日加えていたわけです。

——　ああ、そうですか。その習慣が、そのまま今日の暦にも引き継がれてきたわけですね。

木口　そのようです。

——「閏」という文字は、ふだんあまり使われませんね。

池田 そうだね。この文字には、なかなかおもしろいわけがあるようだ。

『大漢和』などみると「告朔の礼、天子宗廟に居る。ただ閏月は門中に居る」（『説文』）という言葉から派生したとあるね。

木口 むかしは、王さまは毎日宗廟へ行く習わしだったそうですね。

池田 そうです。ところが、王さまは閏月には門外に出歩くことをしなかった。文字どおり、門の中に王さまがいた（笑）。この字は、こうした意義から生まれたとされているようですが。

——なぜ外に出なかったんでしょうか。

木口 そのころ、中国で使われていたのは太陰暦ですね。この暦では、ひと月は二十九日になります。

したがって、一年に十数日が余りました。そこで三年、あるいは五年、十九年という割合で閏月をおいて調節しましたね。

池田　ですから閏月は、余分な月であつたわけですね。この月に亡くなつても、数年に一度しかこないのです、この月に命日を定められなかった。

だから王さまも、宗廟に参る必要がなかった（笑）、という説を聞いたことがあります。

木口　それにしても、いかにも「文字の国」らしい発想ですね。（笑）

——　そのころの日本には、まだ正式な暦がなかったと思いますが。

池田　そうですね。

まえに調べてもらったんですが、中国の有名な『魏志倭人伝』（中国の史書、日本古代史に関する最古の資料）の中に「倭人はこよみを持っておらず、ただ春耕、秋収をしるして、年紀となす」と記されている。

——　暦という日本語は、もともと「日読^{かよみ}」といい、日を数える——つまり、太陽が昇るのを数えるところからおこつたそうですが。

木口　ええ、それにしても、中国にはたいへんにすすんだ暦がむかしからあつた。

池田　そうですね。この中国のすぐれた暦も、じつは仏教の影響が強く反映したようです。

古代インド仏教の教典である『摩登伽經』『二十八宿經』『大集經』『宿曜經』などに記された考え方が、一つの基準となつてできあがつている。

木口　そうでしたか。そうした事実はまだ知られていませんね。

—— 古代インドにも、仏法の宇宙観の影響から、すぐれた暦の発達がみられたようですね。

木口　なるほど。中国ではそれを応用し、八世紀ごろには、世界で最もすすんだ暦を使つていたわけですね。

—— そのころ、仏教の宇宙観をふまえ、天体の運行をまとめた『大衍暦』というものもあつたそうです。

これは五十二巻にわたるもので、奈良時代に日本にもわたつてきたそうです。

木口　ああそれは、世界の科学者がその見事な計算法に驚嘆した、というものではない

いでしょうか。

たしかに仏法の宇宙観は、直観的なものであつたかもしれない。だが不思議と現代科学と合致するところが、じつに多いですね。

第十三章

宇宙に生死はあるのか

白い宇宙服で遊泳する天男・天女

志村(司会)　今回は長期の北米、南米訪問の出発直前のお忙しいなか、貴重なお時間をとっていただきありがとうございます。

池田　いや、こういうときはつらいですね。

たまには一回ぐらい、お休みがあってもいいんじゃないでしょうか。(笑)

―― 読者からの強い要望もあることです、よろしくお願いいたします。(笑)

木口　私も勉強になりますので……。 (笑)

―― おかげさまで、この連載が始まってから、今回でちょうど十二回目、まる一年になりました。

池田　木口さん、長い一年でしたね。(笑)

木口　ともかく好評のようで、なによりです。

—— ところで、完全宇宙遊泳が成功しましたね。すばらしいですね。

木口 ええ、私も深夜のニュースを興奮してみました。（笑）

宇宙空間は無重力ですから、人間が宇宙船の外へ出ても落っこちたりしません。（笑）ところが、自分の身体を自由に移動することは、たいへんにむずかしいのです。ですから、とても危険です。

—— なるほど。

木口 そのために、リュックサックのような窒素ガスのタンクをつけ、噴射させながら動きます。いわば、人間自身が小型ロケットになったようなものです。

—— なるほど。それで、あんなイスにすわったような姿をしているわけですか。（笑）

池田 よく寺院の壁画などに、衣をまといながら空を自在に飛ぶ天女の絵がありますが、二十世紀末の現代に、白い宇宙服を着た天男、天女が宇宙を遊泳するわけですね（笑）。ちょっと、スタイルは違いますが。（大笑）

—— それにしても宇宙というものが、ますますわれわれの身近なものになってい

ますね。

池田 まったく、そのとおりだ。このような時代にあつては、すべての人類が狭い視野であつたり、小さな世界観に閉じこもつていてはなりませんね。

もはや時代は、世界平和、世界不戦へと絶対に志向していかざるをえない。とくに指導者たちは、この点をよくよく考えてもらいたいものだ。

木口 まったく同感です。

偉大なる科学者は仏法を志向

—— 先日、ヨーロッパへ出張したおり、イギリスの有名な出版社の会長であるマックスウエル氏を訪問する機会がありました。

木口 そうですか。

—— マックスウエル氏は、名誉会長のことをよく知っておりましてね。こちらが驚

いたくらいでした。

池田 そうでしたか。私はまだお会いしたことはないと思いますが。

彼は、先生とトインビー^{*}博士の対談をたかく評価しておりました。

池田 それは恐縮です。(笑)

この『仏法と宇宙』を語る」のことも多少知っているようでした。

木口 それは、うれしいですね。(笑)

氏は、世界で初めて科学者が平和のために立ち上がった「パグウォッシュ会議^{*}」の設立に、自分もかかわったといっておりました。

木口 なるほど。そうですか。

その彼がいうには、「いままで自分は、科学と宗教は、時代とともにどんどん距離がひらいていくものと思っていた。だがこの対談は、最新の科学の成果をもつて、ここまで宗教が語られている。これは驚くべき事実だ」ということでした。

木口 そうですね。ヨーロッパの人が「科学と宗教」という場合の宗教は、主にキリ

スト教のことをさすんでしようね。真実の仏法にふれたのは、たぶん初めてだったんでしよう。

池田　　そうかもしれませぬ。ともあれ、科学時代に果たす宗教の役割は、これからますます重要になってくるのではないでしようか。

—— まったく同感です。

木口　　私は一科学者として「ラッセル、アインシュタイン宣言」の、次の言葉は重大だと思っています。

それは「私たちは人類として、人類に向かって訴える。あなた方の人間性を心にとどめ、そして、その他のことを忘れよう、と。もし、それができるならば、道は新しい樂園に向かって開けている。できないなら、あなた方のまえには、全面的な死の危険がよこたわっている」と。

——　じつに、重みのある言葉です。

それにしても、かのアインシュタイン^{*}が、晩年に「私は東洋の英知に期待する」といっ

たことは忘れられない。

池田 そうだったね。

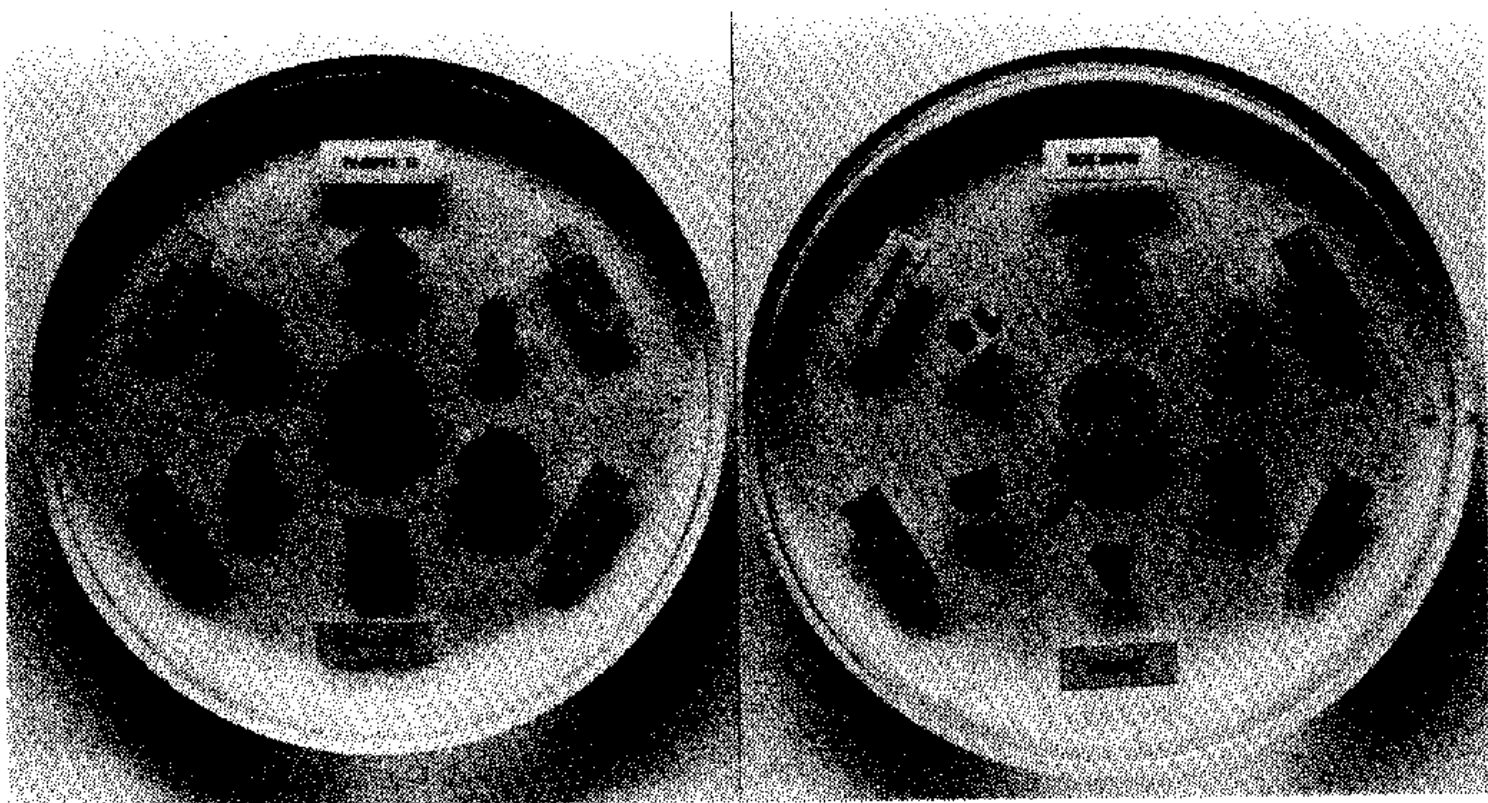
やはり偉大なる科学者は、偉大なる人間性を志向していく。その延長として、どうしても宗教、なканずく東洋の英知たる仏法へと、光をあててこざるをえなかったという気がしますね。

木口 まったく、そのとおりだと思います。

青年交流こそ世界平和への道

—— ところで、米航空宇宙局（NASA）から、名誉会長にたいへんなプレゼントがあったそうですね。

池田 ええ、昨年（一九八三年）お会いした、スカイラブ^{*}の船長だったカー博士との友情で、「月の石」を六種類、世界各地から集めた「隕石^{いんせき}」の破片を六種類、特別に



米航空宇宙局(NASA)から池田大作氏へ
貸与された「月の石」(右)と「隕石」。

貸与してくれましてね。

木口 それはすごい。(笑)

たしか「月の石」は、日本では東京の国立科学博物館に、展示されているだけではないでしょうか。

—— ええ、非常に貴重なものですね。

木口 ぜひ一度みてみたいものです。

いま、どこにあるのですか。(笑)

池田 NASAから厳重に警備するよう
うにいわれましてね。(笑)

なるべく多くの青少年にみてもらえれば
ばと思い、東京・八王子の東京富士美術館にある創価大学の付属博物館に展示

しております。

木口　そうですか。早速みにいこう。(笑)

池田　またカー博士からは、NASA制作の映画を贈呈してくれましてね。

木口　いや、それはうらやましいかぎりだ。(大笑)

池田　先日(一九八四年一月三十日)、東京の創価学園や小学校の生徒たちにみせてあげました。

ともかく青少年の好奇心というか、知識欲は旺盛だ。おうせい初めてみる宇宙空間での体験に心おどらせているようでした。

——それは貴重なことですね。

木口　そういえば名誉会長は、大学のみならず高校、中学や小学校にも、海外の重要なお客を招いていますね。

——そうですね。いま思い出すだけでも、モスクワ大学の故ホフロフ総長、ペルーのサンマルコス大学のゲバラ元総長、ムッソ総長、フランスのルネ・ユイグ氏、中国

の学者や友人等々かなりありますね。

池田　いくら平和文化の交流を青少年に訴えても、現実の行動がなければ観念にすぎなくなってしまう。

ですから私は、青少年に対しても大人とまったく同等に、なるべく多くの機会をとらえ、世界への交流、あらゆる国々の人びととの交流の道を開いてあげたいと思っています。

——なるほど、大切なことですね。体験にまさるものはないですからね。

木口　そうしたお客たちも、学生や生徒のまじめで真摯な姿に、たいへん感銘をうけているようですね。

池田　それはどうも。(笑)

そういえば、ルネ・ユイグ氏が関西の創価学園を訪れたとき、「こんなに生きいきとした若い人たちの姿、目の輝きはみたことがない。中学生、高校生といえ、いちばんむずかしい年代なのに、フランスでは考えられない」と感嘆しておりました。ま、

半分はお世辞もあると思いますが。（大笑）

—— みる人はみていますね。こわいですね。

木口　いつも感心するのですが、池田先生は多忙のなかにあっても、若い人たちや学生と対話することを大切にされていますね。

—— そうですね。福沢諭吉といえ、日本人として初めて広く世界を見聞した人^洋ですが、彼はひまさえあれば学生のもとを訪れ、よくこういつていたそうです。

「諸君が私とともにいるということは、私の見聞とともにいることなのだ」と。

木口　有名な話ですね。

池田先生にピッタリの言葉ですね。

池田　いやいや、私のことはともかくとして（笑）、そうした教育者が少なくなってきたのは、まことに残念なことだ。

指導者は、あるときは食事をしながら、またあるときは風呂に入りながら、また夜空の星をながめながら、なるべく多くの青年たちと人生と平和を語りあうことが大切

ですね。

—— そのとおりだと思います。

池田 私も何人かの生徒や、学生たちといっしょに風呂に入りながら語り合ったことがある。

彼らは社会に出てからも、そのことを、なによりも深い思い出としてくれているようです。

まあ私としては、特別なつもりはなかったのですが、若い世代と肌でふれあうことは、どれほどまでに大切であるか実感しております。

木口 なるほど。そうした教育をうけることができた人は幸せと思いますね。

一九八八年九月、火星が大接近

—— ところで木口さん、火星が地球に接近するそうですね。

木口 ええ、地球と火星の距離が最も近くなるのは、（一九八四年）五月十九日の夜八時ごろです。

池田 そうとう大きくみえるのですか。

木口 いや肉眼では、ふだんとあまり変わらないでしょう。ただし倍率一〇〇倍ぐらいの望遠鏡ですと、満月を肉眼でみるぐらいの大きさに観測できます。

池田 なるほど。そうですか。

木口 ただ火星は、太陽のまわりを楕円に回るので、太陽、地球、火星と一直線に並ぶのは、五月十一日の夕方五時ごろです。

—— 今回は、大接近ということではないようですね。

木口 ええ大接近は、十五年目か十七年目に一回おこります。次回は一九八八年九月です。

池田 そのときは、どのくらいの大きさにみえるのですか。

木口 肉眼でも、十円玉を二五〇メートルほど離れた大きさになる計算になります。



若い世代と常に交流し、人生や平和について語りかけていく池田大作氏。

これは、そうとう大きなもので、だいたい橙色がはつきりみてとれます。

池田 この「火星」という表現は、日蓮大聖人の御文のなかにもみられますね。木口 そうですか。当時は「火星」という表現は、あまりなかった気がします。

池田 蒙古の襲来を予言された有名な『立正安国論』のなかにもみられる。

—— ええ、『仁王経＊』という経文を引用されていますね。

当時は一般的には司馬遷しばせんの『史記』に出ているように「けいわく熒惑」とよんでいたよう

ですね。

池田 日本で最も古い記録といわれる『日本書紀』をみても、「熒惑」と出ている。

天文史料によると、「火星」という記述があるのは一八二四年、つまり江戸時代の『鎔造化育論』のなかに出てくるようです。

木口 なるほど。日本では、そのくらいでしょうね。

—— この火星という文字を使った最初の人には、『法華經^{*}』の翻訳でよく知られている羅什^{らじゅう}のようです。

この羅什は、いまから約一六〇〇年前の人ですね。

木口 そんなに古いのですか。いつもながら、仏法には宇宙への深き洞察がある。驚きです。

—— 中国では、この星に少しでも変化があると、飢饉^{ききん}、兵乱がおこるといわれていたようですね。

木口 ええヨーロッパでも、火星は「マース」とよび、「軍神」になぞらえていま

す。

観点は違いますが、ケプラーやコペルニクスも、この火星の軌道が楕円なので、地球に衝突するかもしれないと危惧^{きぐ}していたようです。

池田　なるほど。そうですか。

木口　天文学者のなかにも、イギリスの有名なホイルのように、天体の変化は、地球および人間になんらかの影響をあたえることは事実であるという研究もあります。

——
なるほど。

木口　それにしても大聖人は、天体のことについてもよくご存じでしたね。

池田　仏法は人間の幸、不幸の根源を究めていった法である。

宇宙と人間との深き思索があったことも、当然のことといってよいでしょう。

——
そうですね。この点については、地球に関する資料も残っているようです。のちほど、また具体的にお話していただきたいと思います。

池田　わかりました。

芥川龍之介の火星人観

—— 火星の大きさは、地球の約半分だそうですね。どのくらいの期間でできたのですか。

木口 約二年で火星の芯しんができ、一〇万年という短期間で隕石がぶつかって大きくなりました。地球の芯は約一年でできたのですが、火星は地球よりも太陽から離れているので、約二年になるわけです。

また地球ができた場所よりも、たいへん低温のところだったので、冷たい惑星になりました。

池田 火星の地形は、地球に似ているといわれていますが。

木口 ええ、オリンポス山と名づけられた山は、富士山そっくりです。その裾野すそのは、

たいへん広くて、六〇〇キロ（東京―神戸間）もの巨維です。

池田 宇宙船が着陸して調査結果が確認されるまで、長い間、高等生物がいるかもしれないと考えられていたのは、水があるとみられていたからです。

木口 そのとおりです。水はあることはあるのですが、非常な寒さのため、地下一キロもの深いところに氷になって、閉じこめられているのです。

—— 火星が大接近するということで、日本が大騒ぎになったのは、いまから六〇年前（一九二四年）の、大正時代のことでしたね。

木口 そうでした。

当時は、火星にも生物がいると考える人も多かったようですね。

—— ええ、芥川龍之介のような知識人でも、そうとう火星人については思索をこらしていたようです。

池田 芥川は人間という存在の延長から火星人を考えたようで、なかなか鋭いとらえ方をしているのを読んだ記憶があるが……。

—— 有名な芥川の『侏儒の言葉』^{しゅじゆ}のなかにあります。

池田　そうそう。正確にはあとで調べてもらいたいけれど、こんな内容だったと思う。「火星の住民の有無を問うことは、我々の五感に感ずることのできる、住民の有無を問うことである。しかし、生命は必ずしも、我々の五感に感ずることのできる条件をそなえるとは限っていない。もし、火星の住民も、我々の五感を超越した存在を保っているとすれば、彼らの一群は今夜もまた、篠懸^{すずかけ}を黄ばませる秋風と共に銀座へ来ているかもしれないのである」

—— 芥川らしい文学的直観ですね。

池田　この表現からも、芥川が仏教に深く影響をうけていたことがうかがわれるね。—— 火星人といえ、誰でもあのタコ型を思い出す（笑）。あれを最初に考えついたのは誰なんですかね。

池田　有名なイギリスの作家H・G・ウェルズだったですね。もう八〇年もまえの名作『宇宙戦争』に登場していたね。これが、その後の典型的な宇宙人像として受け継がれたわけだ。

知的な生物はかならず人間型になる

木口　この火星人が、じっさい存在するかのようには思わせてしまったのは、天文学者にも大きな責任がありました。

——　そうですか。天文学者もやはり人間だ。（笑）

木口　一八七七年、イタリアのスキヤパレリという天文学者が、毎日火星を観測しているうちに、表面に何本もの筋が交差しているのを発見した。そこで「火星には水路がある」と発表しました。

——　なるほど。

木口　ところが、その水路（カリーナ）がどういうわけか、カナル（運河）と発音されてしまった。運河といえ、人工のものに決まっています。

池田　それをつくった知的生物がいなければならぬと考えたわけですね。

木口　そうです。

多くの天文学者が誤推してしまうほど、望遠鏡で火星の表面に、そうしたもようが観測されるわけです。

——なるほど。

木口　アメリカのパーシバル・ローウェルという天文学者も、この運河説を最も主張した一人でした。

アリゾナ州に大きな天文台を自分でつくり、克明にスケッチしました。そして地表全体に、網の目のように幾何学的にはしる線がある。大運河のネットワークにちがいない、と発表したわけです。

——いまでも、その天文台は火星観測で有名ですね。

木口　ええ、彼は、火星には水が少ない。だから火星人が生きていくためには、すみずみまで運河をつくって水を供給しているのだらう、と想像してしまったわけです。

（笑）

池田 なるほど。そんな高度の科学技術をもった火星人は、地球にも移り住むことを考えるだろうというのが、「火星人間襲来」というSF的な発想につながったわけですね。

—— ただ当時の人が考えた火星人のイメージは、それなりに理屈にかなった面があったようですね。

木口 ええ、頭でっかちも、胴体がないのも、しなやかな十六本の手も（笑）、人間の体型をもとに、火星の環境に適応した合理的な姿になっています。

池田 ギリシヤ以来、思考する脳、高度に文明を進歩させうる能力、美しく洗練された機能美、それらを合わせもったのが、「人間」であるという考え方は変わることがない。

—— 西洋人の考えた生物の理想型ですね。

木口 たとえば、ソ連の高名な生物学者であったラリ博士は、「知的な生物」はかならず人間型になるといっています。

仏法で人間を「法器」ととらえる意味

—— そういえば、イランとの国境にアルメニアというソ連の共和国があります。

二〇年ほどまえ、日ソ出版交流で招待されて行ったことがあります。

まあ砂漠にかこまれた、なにもないところで辟易へきえきしましたが（笑）、むかしは東西交流が行なわれた歴史の地のようです。

木口 いいですね、ジャーナリストは。自由にいろいろなところへ行けて……。 （笑）

—— ちょうどそのとき、首都エレバンで「宇宙に知的生物がいるか」という国際会議が開催されていました。

木口 ああ、それは初めての会議で有名です。

—— その会議でのラリ博士の発言を、エレバンの出版代表者の人が、食事をしながら話してくれました。

木口 どんな内容でしたか。

—— そのときのメモを持ってきました。少々長いのですが、読ませていただきます。「知的生命は、かならず高度に組織された神経系統と、その中枢の頭脳があり、それは外部の危険に対し、保護されねばならない」

木口 なるほど。

—— 「身体の負担をうけない位置のいちばん上部にあるのが必然である」

木口 なるほど。

—— 「頭の下には、考えたことをすぐ実行に移す腕がある。次に生命を維持する内臓器官が胴体。いちばん下に移動のための足。そして、それぞれが対^つになっているのは、能率的でバランスがとれているからだ」

木口 そのとおりですね。これが科学者の常識的な考え方です。最近では人間の大きさとか、頭の大きさが、なぜこのようになっているのか、いろいろ議論があります。地球の重力の大きさと、化学的な結合力を比較すると、人間の大きさというのは、ど

うも最適のものらしいです。

池田　なるほど。

仏法は、この人間の身体を、かけがえのない「法器^{*}」と説いております。

こうした宇宙に適した絶妙なる姿ということからも、この「法器」の意味がわかる気がしますね。

火星のナゾは解明されつつある

——　火星の地下の氷が溶けたとすると、深さ一〇メートルもの海ができるだろうといわれていますね。

木口　ええ。しかし太陽と火星の位置からすると、太陽光線は氷を溶かすほどの熱がありません。

池田　火星の南極あたりでは、雲が観測されることがあるそうですね。

木口　八年前、バイキング1号（アメリカ火星軟着陸用無人探査機。一九七六年七月二十日、着陸に成功）が火星に軟着陸し、それが送ってきたデータによると、地球に降る雪と同じ現象だとみられています。

——　すると雨雲ではなく、雪雲ということになりますか。（笑）

この探査機は、いまも八日ごとに、火星の写真とデータを地球に送りつづけているそうですね。

池田　そうすると、さらに火星のナゾは解明されていきますね。楽しみですね。（笑）

木口　ええ、探査機はあと八年活動をつづける予定になっています。

池田　さきほどのオリンポス山は、エベレストの二倍半以上もある火山ですね。その溶岩の流れからみて、かなり活発に噴火していた時代があったといわれていますが。

木口　ええ、火星は地球と比較にならないほど、火山におおわれています。

一〇〇キロをこえる裾野のある火山の数は、一〇をこえます。

火星では重力が弱いので、少々重いものを上にのせても下がつぶれたりはしません。

したがって山も高くなります。地球では一〇キロが限度といわれております。

—— 火星の酸素はどれぐらいですか。

木口 九五パーセント以上は炭酸ガスです。

酸素はわずか、〇・三パーセントしか測定されていません。

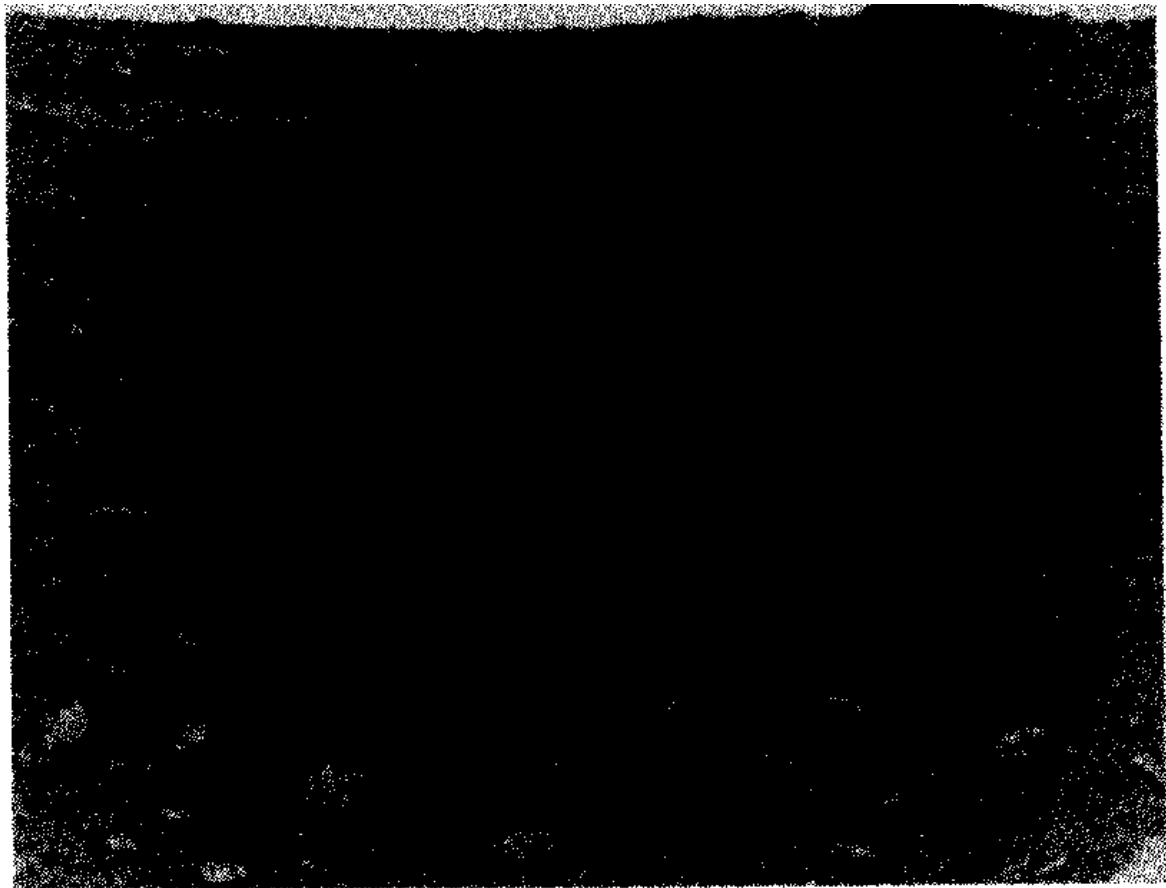
—— やはり火星人はいない。(笑)

木口 さきほどの探査機のデータでも、いまのところ微細な生物すら存在する兆候はありません。ただただ、鉄分を多く含んだ赤茶色の土壌でおおわれているのみ。また温度は、赤道のあたりで一六〜二四度です。ただし夜ともなると、マイナス八〇度まで下がります。

—— 火星に行くには、どのくらいかかりますか。

木口 現在の技術で約二年です。

池田 そういえば、アメリカのスペースシャトル「コロンビア」*は、昨年（一九八三年）十二月に、人間を火星に運べるほどのソ連の巨大ロケットの写真を撮ったという



1976年7月20日 バイキング1号の火星
着陸船が着陸に成功したクリュセ盆地。

報道がありましたね。

木口 ええ、ソ連中央アジアのカザフ共和国のロケット基地にあるのを発見したそうです。長さ八八メートルです。

—— そんなに大きいのですか。

木口 これまでの、どのロケットよりも運搬能力はあるだろうといわれています。

死の自覚こそ人間としての目ざめ

—— ところで今年は、古代史のナゾがあいついで解明されておりますね。

木口 島根県では、出土した刀に彫られた文字がX線によって解読され、大和朝廷以前の豪族の名前がわかりましたね。

—— 先日（一九八四年一月十四日付）の新聞にも、京都の丹後方面で、すでに二千年前、近畿地方でも鉄がつくられていたことを示す遺跡が出てきましたね。『読売新聞』などは、朝刊のトップで扱っていました。

池田 なかなかの古代史ブームのようですね。

そういえば先日、創価大学に行ったときも「太陽の丘」というところで、盛んに発掘が行なわれていました。

木口 日本史の教科書も、新学期の書きかえに間に合わない。（笑）

—— こうした古代のナゾのなかでも、最も興味ぶかいのが、いったい人類はいつごろから「死」という問題を意識するようになったのか、ということではないでしょうか。

木口 大昔のわれわれの祖先のことがわかってくるといいうのも、なにか心をかきた

てるものがありますね。

つまり、人間としての自覚に目ざめたのはいつか、ということになりますね。

—— そういうことですね。このことが端的に象徴されるのが、いわゆる「葬」^{とむらい}という慣習の発生ですね。

池田 そうですね……。

人類の長い歴史のなかで「生命」のもつ厳粛な理^{ことわり}に目ざめ、その尊さを、たとえば「死者を葬る」というかたちにあらわしたのは、およそ二〇万年ぐらいまえからではないか、と聞いたことがあります。

木口 すると、まだ石器時代のころでしょうか。

池田 ネアンデルタール人の遺跡で、死者に花をたむけて埋葬したあとが発見されているそうです。

—— そのとおりです。三年前だったでしょうか、東京で「ネアンデルタール人とクロマニヨン人」の展覧会があり、行ってきました。

木口 いわば人類の祖先ですね。

—— ええ、二万五〇〇〇年前に埋葬された「少年と少女の化石」が復元展示されて
いました。

多くの人がその前で立ち止まり、見いつている姿が、私にはまことに印象的でしたね。
それをみると、この埋葬という死者への畏敬いけいの行為が、ひとつの宗教的感情の始
まりではないかと思われてなりませんでした。

池田 たしかに、そういえるでしょう。

もちろん、素朴なものだったのでしょうが。「人間」の発生と時を一にして、宗教的
感情の発生があつたことはたいへん興味ぶかい。

死をもつて何かを示そうとする動物

木口 そういえば動物も、自らその死をよみとり、一匹でどこかにかくれるといいま

すね。

—— スズメやハトも、死骸はあまりみせませんね。

木口 イヌやネコも、とつぜんいなくなると思います。

池田 動物の本能なんでしょうかね。たしかにそういわれてみれば、事故死などの場合をのぞいて、野生動物の死をみた人は少ない。

象のような大きな動物も、死骸を人前にみせない方法を知っていますね。

—— まえに象牙をみつけて商売をしている人の話を聞いたことがあります。

一頭の象が不運にも、人目につく場所で死ぬ。すると、かならずといっていいほど、仲間が群れをなして、その象をどこかに運んでいく。そのあとをつけていくと、たくさんさんの象牙にありつけ一儲けできる。(笑)

しかし、ふだんはおとなしい象も、そうしたずる賢い人間には、かならず逆襲してくる。(笑)

木口 この象の話は有名ですね。まさに自然の驚異ですね。

——ワシの群れを統率する長の死も、壮絶なようです。自らの力の衰えを知ると、長は、ある晴れわたった日、高く高くどこまでも天空に上がっていく。

そして一点の雲もない中天から、真っ逆さまに山頂の岩頭に突っこみ、わが身を打ち砕いてしまうといひます。

池田 たしか『鳥の物語』（中勘助著、岩波書店刊）にも、そんなことが載っていましたね。

一族のワシは、あたりに散った長の肉片を形を残さないように黙々とついでばむ、というくだりが克明にえがかれていたと思いました。

木口 たとえ動物の世界であっても、自らの寿命を知り、死をもってなにかを示そうとする姿には峻厳ささえ感じますね。

——生命をもつものの本然的な姿なんでしょうね。それにしても、最近では、こうした生命のもつ峻厳さ、尊厳性というものに、人間自身が鈍感になってしまっている気がしますね。

昔も今も変わらない「死の恐怖」

木口 たしかに深い人生の思索、永遠なるものへの思索がなくなっている。だから現世享楽主義的な、「いまがよければ」という風潮になってしまいうんですかね。こんな時代相も歴史上、特異な時代のように思いますが。

池田 いや、いつの時代も、このような傾向はいくぶんかあったと思います。しかし、これほどまでに社会のすみずみにまで弊害が蔓延まんえん化してしまった時代は、たぶんないといってよいでしょう。仏法で予言した「末法」^{*}という時代相そのものを、私は感じてなりません。

—— とくに、生命軽視の風潮がはなはだしい。

木口 最近テレビやなんかの影響でしょうか。青少年にも、自殺や殺人がふえていく。恐ろしいことです。

—— ちよつと文献を調べていましたら、平安時代の天皇は、人間死ねば地獄におちてしまう、ということを実際に考えていたことがうかがわれるものが出てきました。

池田　そうですか。醍醐天皇（八九七年、平安時代初期に即位）の和歌にも、そのような心情をうたったものがありましたね。

—— ええ。

「いふならず 奈落の底に入りぬれば 刹利も首陀もかはらざりけり」
という歌です。

池田　「奈落」とは地獄のこと。「刹利」とは王族のこと。そして「首陀」とは奴隸のことと思います。

木口　なるほど。むかしの人は、死後の世界があるという考え方だったんですね。

—— こうした話は一見、むかしの無知の時代だけのもののようにですが、現代人は真正面から考えようとしないだけで、死の恐怖は、いまの時代もなんら変わっていないのではないのでしょうか。

池田 まったく、そのとおりだ。

御文には「世末になれば人の智はあさく」（『報恩抄』）とおっしゃっておられる。

現代人は忙しさのためか、また即物的なものの見方のためか、ふだんはこうした死への意識があまりにも薄い。

だが昔も今も、死の問題だけは一步も前進していない。

木口 同感です。

むしろ便利さや豊かさの半面、肝心の人間の精神性の弱さが、あまりにも目立ちすぎる。その意味で、不幸な時代です。

生死をこえた永遠なるものへの希求

—— いまは亡きフランスのアンドレ・マルロー氏は、行動する作家として、いまなお多くの読者をとらえております。

その彼の文学をささえたものは、生死をこえた永遠なるものへの希求にあるということとは、彼自身も語り、世の人びともそうしたとらえ方ですね。

池田 マルロー氏は、祖父と自分の父が自殺している。

また自身が、レジスタンス運動に加わっていたさなかに、ドイツ軍の捕虜となり、さまざまに死というものを感じとっていたにちがいない。

木口 池田先生は、マルロー氏とも対談（注）されておりですね。

私はその本を読ませていただき、たいへんに感銘をおぼえました。

池田 それは恐縮です。（笑）

もう十五年ほどまえにもなりましょうか。日本とフランスで二回お会いしました。少々傲慢（ごうまん）でしたが（笑）、たしかに「二十世紀の行動する知識人」という言葉がピツタリの人でしたね。

—— 彼は生命の永遠なるものを、美の世界に求めていった。またその奥深い思索のはてに、仏法を志向したのではないでしょうか。

池田 ええ、たしかにそうでしょうね。

トインビー博士もまた同じでしょうね。

木口 その思索の延長として、現実に行動する、生きた仏法の実践者との出会いとなった。

池田 いやいや私はともかく（笑）、彼こそ民間外交、文化交流の先駆者といえるでしょう。

—— フランスの文化遺産である『ミロのビーナス』や『モナリザ』などを、国外に展示する最初の国として日本を選んだのは、文化大臣もやったことのあるマルロー氏です。

木口 当時、まだ学生でしたが、私も一目だけでもみようと思い、長い列の後について遠くからみました（笑）。ともかく、すごい人気でしたね。（笑）

池田 私も同じ思いでみに行きました。（笑）

—— 彼が日本を選んだのは、仏教の国であり、永遠なるものへの理解をもった精神

風土がある、と認識していたのが一つの大きな理由だったようです。

木口　なるほど。

彼は当初、真実の仏法というものの理解はなかったかもしれない。

だがその模索もさくの方向性は、たしかにトインビー博士などとも一致していましたね。

「我」を解明する仏法の九識論

——　やはり一つの分野を究めていった人の眼は、どうしても最後は、内なる自分自身へと向かわざるをえなくなっていくのでしょうね。

木口　いわゆる、仏法で説く「我」というんでしょうか。最も身近でありながら、最も重大かつ困難な問題へとですね。

池田　そうですね。

まえにも少々話しましたが、仏法は、人間の「我」という存在をとらえていくうえで、

「九識」というものを説いております。

——「九識論」とは、仏法が物事を識別する心の作用として説いたものですね。

池田　そう思います。簡単にいえば、そういつてもよいでしょう。しかし、日蓮大聖人の寿量文底じゆりようもんていの仏法からみたときには、これこそ生命の全体像をくまなくとらえていった法理となつていくと思つています。まえにも話したように、まず五識とは、「眼・耳・鼻・舌・身」という五官にともなう感覚と意識である。第六識は知性、理性にもとづく思考力といえるでしょうか。

——なるほど。よくわかります。

池田　まあ仏法では、さらにこの第六識の奥に、第七識すなわち「末那識まなしき」という無意識にまでいたる領域があると説いております。

——末那識とは、あまり聞きなれない言葉ですね。

池田　この語源は梵語ぼんごの「マナス」で、これを漢字に音写したものです。「マナス」とは「思量する」「推しはかる」という意味です。

——
なるほど。

池田 この第七識というのは、いわゆる日常の瞬間瞬間の思慮をこえた、学問とか芸術とかいう領域の範疇はんちゆうに入るととらえることができるような気がします。

木口 たいへんな努力をして、真理の発見や美の極致といわれるような普遍的な価値を見いだすことが、それに類するものになりますか。

池田 そのようにとらえてよいと思います。しかし第七識では、まだまだ人間存在の根本とか、エゴとかいう生命の究極、内奥の衝動からみるならば、完全なる自由な存在の範疇はんちゆうとはいえない。

——
たしかにそうですね。

オーストリアの精神医学者フロイトにまつわるおもしろい話があります。

彼は、人間の深層心理にせまった学者として有名ですが、ドイツのある世界的医学者のいわく、「彼は人間の深層心理を発見したが、自分自身はどうにもならなかった。

なぜなら彼は、自分の怒りのあまり、引きつけをおこしているからだ」(笑)



行動する知識人として著名なアンドレ・マルロー氏
(左)と対談する池田大作氏。(1975年5月19日)

木口 なるほど。(笑)

池田 そこに仏法は、そうした衝動をも動かす「我」の存在へと眼をむけていったわけである。それが第八識、つまり「阿頼耶識あらいやしき」といわれるものになります。

木口 この阿頼耶識というのですか、これも梵語からきているのですか。

池田 そうです。「蔵」という意味になります。ですから、これは、「蔵識ぞうしき」ともいわれます。この阿頼耶識という存在に、人間のいわゆる「業ごう」というものが集約されていると説くわけです。

またこれは「無没」、つまり生死にあつても没失しないという意義があります。

——なるほど。そうするとこの阿頼耶識が、すべての「業」をはらんで生死を流転していくわけですか。

池田　そうおとりになって、けっこうです。

この第八識に包含された自らの生命が、そのまま死後においても「空」の状態として、かならずつづいていくわけです。

——なるほど。

池田　ですから、生きているあいだに活動していた自らの五、六、七識も死の瞬間には、この第八識に嚴として包含されてしまう。

「生」の状態において、生命にきざみこまれた記憶・習性・業によって「死」の状態における「我」が刻々と成立していくことになる。

——すると阿頼耶識とは、過去世からの宿業の蔵のようなものですか。（笑）

池田　たとえば、そういつでもよいでしょう。いま申し上げましたよう

に、いわば「業」というものがおりなされる「場」といつてもよいかもしれない。

——なるほど。「生」の状態のときにきざみこまれた業が、「死」の状態になってもはつきりと残ってしまうというわけですか。

池田　そう説かれております。たとえば、地獄界の悪業を最も強くきざんだ阿頼耶識という存在は、間違いなく宇宙生命のなかの地獄の「場」に存在していく。

当然、その生命の「我」は、地獄の様相と苦悩のなかにある。

そこで、このうえない極苦^{ごく}を味わわざるをえないという意味になります。

——そうですか。それはたいへんだ。

ブラック・ホール^{*}もあることですから。（笑）

「臨終の相」こそ人生の総決算

木口　そうしますと、宇宙生命の「場」に融合した「我」にも、いわゆる「十界^{*}」と

うことができる。

—— それを生きているうちに、実感できないものでしょうか。（笑）

池田 それは深き信仰のつみかさねによるしかないでしょう。ただ仏法が「臨終の相」を一個人の人生の総決算として重視する意味も、こうしたことからうかがい知ることができる気がしますね。

木口 なるほど。

池田 たとえば、御文には、「人は臨終の時地獄に墮おつる者は黒色となる」（『千日尼御前御返事』）と説かれています。

また經典にも、「地獄に墮おちる相に十五種、餓鬼に墮おちる相に八種、畜生に墮おちる相に六種」（『守護国界主陀羅尼經』卷十）ともあります。

—— なるほど。それにしても、仏法は明快に「臨終の姿」というものを説いておりますね。

池田 そうです。日蓮正宗の第二十六世の猊下であられた日寛にちかん上人は、『臨終用心抄』

を著わされ、臨終にさいしての本人自体の心構えを、具体的に教示されておられます。

木口　よくわかりました。最後の第九識はどうなってくるのでしょうか。

「九識」の覚知こそ信仰の本義

池田　御文に「九識は悟なり八識已下は迷なり」（『御義口伝』）と説かれています。

ですから仏説の究極は、この「第八識」のいちだん奥にある宇宙的大我ともいえるべき「九識」への覚知となっていくわけです。

——この「九識」の実体を、初めてあかされたのが日蓮大聖人の仏法になるわけですね。

池田　そのとおりです。

簡単にいいますと「第八識」においても「染浄の二法」を含むといって、いまだ確固

を著わされ、臨終にさいしての本人自体の心構えを、具体的に教示されておられます。

木口　よくわかりました。最後の第九識はどうなってくるのでしょうか。

「九識」の覚知こそ信仰の本義

池田　御文に「九識は悟なり八識已下は迷なり」（『御義口伝』）と説かれています。ですから仏説の究極は、この「第八識」のいちだん奥にある宇宙的大我ともいうべき「九識」への覚知となっていくわけです。

—— この「九識」の実体を、初めてあかされたのが日蓮大聖人の仏法になるわけですね。

池田　そのとおりです。

簡単にいいますと「第八識」においても「染浄の二法」を含むといって、いまだ確固

不動のものではない、と仏法では説かれている。

この「八識」の奥の宇宙の本源的生命、それがいわゆる「九識心王真如の都^{*}」たる「南無妙法蓮華經」という末法の極説中の極説なわけです。

木口　なるほど。

池田　ですから、私どもはこの生命の本源といいますが、宇宙の本源といいますが、その根源の力を知りたいがゆえに信仰しているのです。

具体的にいうならば、信じ行じた万人がそのような境涯^{きようがい}にちかづき、確固たる自身の構築がなされていく。

私どもは、ここにこそ根本的かつ完全なる平和社会建設への道があると信じております。

——　どこまでも人間が主体である。それを見失ってはならないですね。

木口　たしか、ユネスコ憲章にも「戦争は人の心のなかで生まれるものであるから、人の心のなかに平和のとりでを築かなければならない」という有名な一節がありま

したね。

池田 遠まわりのようであるが、もはや、そこにしか道はない。その信仰の奥義が、日蓮正宗の仏法にあるわけです。

木口 なるほど。

池田 創価学会はその信徒の団体です。

ですから、私は「御本仏」ではありません（笑）。私をおとしいれようとするさんげん讒言もはなはだしい。（大笑）

木口 当然ですね。

少しみて知っている人は、みな見破っております。

池田 もちろん、信仰の深き強さによって境涯が違ってくるのは当然なことである。

—— そうでしょうね。そうでなければ、なんのために信仰したかわからない。

信仰した結果がなければ、仏法の意義はなくなってしまふ。

理不尽な言々句々など、仏法の信仰者につうじないことは誰でもわかっています。

ちよつと時が経てば、すべてわかつてしまうことですね。

池田 さらに御文には、そこで「内よりは勸発^{かんぱつ}し外よりは引導^{いんどう}し内外相応^{ないげそうおう}し因縁和合^{いんねんわごう}して」（『総勘文抄』）と、死の生命すなわち「我」というものの自体がもつ「業」と、外なる「縁」とによつて、生の生命がふたたび発動されゆく姿をも説かれております……。

少々むずかしくなつてしまつてすみません（笑）。なにかの機会に、もっとくだいてお話できればと思つておりますので……。 （笑）

木口 ぜひとも、この生命という問題については、『宇宙と仏法』の観点を広げて、『生命と仏法』というような観点からも、私どものために論じていただければと思います。

池田 そうですね。

志村君、いっぺん考えてみましょう。

—— 大事な問題ですので、この連載のあと、ぜひよろしくお願いします。

最高にして最善の「良縁」が大切

池田 このように、外なる十界三千と、内なる一念三千の波動が共鳴しあって、寸分の狂いもない。これをあかしたのが、じつに仏法なのです。正確にして無比なる厳しき因果の法則になるわけです。

この因果論についても、もっと深く論じなければならぬのですが、これだけは、人間の情愛や思いだけではどうにもならない。

木口 なるほど。

科学的という言葉を使わせてもらいますと、これほどの厳しく徹底した科学性というものもないわけです。

池田 ですから、戸田先生はよく「自然界の法則を追究したものが科学である。人間の生命というものの、因果をあかした論理的宗教が仏法である。真実の宗教は、その

研究態度が科学的であり、この両者は相矛盾しない」とよくおっしゃっておられた。木口　なるほど。たしかに、われわれはあまりにも自身の外のことばかり追い、肝心の自分自身のことを忘れすぎている。

池田　御文にはさらに、「因とは一切衆生の身中に総の三諦有つて常住不変なり」（『総勘文抄』）とも説かれている。

少々むずかしくなりますが、「因」とは過去から現在へ、そして未来へわたっても、常住にして不変なる一切の生命の「仏性」と拝することができ。

すなわち誰人たりとも、尊極なる「仏性」がそなわっている、と説かれているわけです。

——しかし、この「仏性」というのでしょうか、それがそなわっているといわれても、現実の人間の姿をみると、なかなか信じられませんが。（笑）

池田　そこで、これまた仏法の深い論議になりますが、じつはさきほどの縁というもの、たいへんに重要になってくるわけです。

——
なるほど。そうですか。

池田 いまの御文には「三因^{いんぶつしやう}仏性は有り^{いへど}と雖も善知識の縁に値^あわざれば悟^{さと}らず知らず^{あらわ}顯^{あらわ}れず」（『総勘文抄』）とおっしゃっておられる。

まあ簡単に申し上げますと、この自身にそなわっている「仏性」というものを日々の現実の生活、社会への活動の中で顕現しゆくためには「善知識の縁」、私たちにとっては「大法」というものが、どうしても不可欠となっていくという意味と 생각합니다。人はそれを知ろうとしないがゆえに、気づかないだけなのです。

——
なるほど。よくわかりました。

仏法はきびしき生命の因果の法

池田 生命にきざまれる因果というものは、厳しいものである。「きびしきなり三千羅^{られつ}列なり」（『御義口伝』）とあるごとく、いささかのごまかしも許されない。またプラ

スもマイナスもない。

木口 一切の妥協も許されないわけですね。

池田 いわゆる世間法、つまり法律や制度というものは、いかに嚴格精緻せいしちにつくられたとしても、これは人間世間の範疇はんちゆうのものである。それが完全でないことは、国によつてその制度や法律が大きく異なることからわかる。

—— まったく、そのとおりです。この世間の法律の網の目を、一見、合法的なかたちでぐりぬけ、真面目な人びとをあざ笑うような、ずる賢い人間は、いつの時代にもたくさんいる。(笑)

池田 だがいくら社会の眼、また他人の眼はごまかせても、汝なんじ自身はごまかせない。なぜなら、そのことを本人がいちばんよく知っているからだ。

木口 なるほど。

池田 ですから、さまざまな偏見やねたみからの中傷や批判があつても、私がなにも恐れぬ理由は、そこにあるのです。

—— アウシュビッツの収容所での理不尽な大量虐殺ぎやくさつの話は、あまりにも有名ですが、数多くのユダヤ人をガス室に送りこみ、死にいたらしめたナチの党員にもそうした話があります。

木口 ええ、たくさんありますね。

—— 第二次世界大戦後、ある党員はドイツから遠く南米の、それもジャングルの奥地まで逃げこんでいくわけです。ところをかえ、十数年も追及の手をのがれることはできた。

だが寝てもさめても、殺した人たちの「亡霊」がつきまとい、苦しめられたといっています。

木口 有名な話ですね。

ともかく、いまの池田先生のお話をうかがっていると、仏法はまさしく生命の因果の法であることがよくわかります。

—— まったく同感です。



宇宙の生死は繰り返すのか、1回限りか、現代の科学ではまったくの未知である。(さんかく座の銀河M33)

生死を繰り返す宇宙の実相

—— ところで木口さん、天文学では宇宙それ自体の死については、どこまでわかっていますか。

木口 これが困るんです(笑)。むずかしい問題なんです。

いまから一〇〇―二〇〇億年前におこったといわれるビッグバン^{*}以後の、宇宙誕生の研究は、さかんに行なわれています。私も取り組んだことがあります。

—— そうですか。

木口　ところが、宇宙が生死を繰り返すのか、一回かぎりであるのか、現代の科学ではまったく未知なのです。とくに死の分野は、将来においておこることなので、実験的な検証ができません。それゆえ、あまり研究はすすんでいません。

池田　そうですか。私は直観的に、銀河系などの死はあっても、宇宙それ自体が死で終わることはないと思いますが……。

――なるほど。この問題について宇宙論研究者の予想を、簡単に教えていただけませんか。

木口　そうですね……。銀河についていえば、まず、核のエネルギーを使い果たして恒星の輝きがとまります。このとき、恒星の膨張によって地球のようにのみこまれたり、また爆発によって吹き飛ばされる惑星もあります。そのうち、他の星の影響で大部分の惑星は、恒星から引き離されます。

池田　いわゆる太陽系の崩壊ですかね。

木口　そうです。さらにその後、恒星が銀河から引き離されます。そして何百億年も

かかって、あらゆる物質が溶けて液体化するといわれます。

—— 液体ですか。本当にそうなるんですか。(笑)

木口 ええ最終的には、物質はことごとく鉄の液体になります。これは量子力学の予言するところです。その後、すべての星はブラック・ホールになり、それがホーキングが予言したように大爆発を遂げます。

池田 やはり大爆発ですか。いや、すさまじいものだ。

木口 こうなるまでには、 10 の 10^{26} 乗× 10 の 10^{76} 乗年といった無限にちかい時間がかかることになります。

—— 気が遠くなる(笑)。計算するだけでも、たいへんな時間がかかってしまう。

(笑)

池田 仏法に「劫焼こうしょう」ということが説かれております。これは宇宙の器世間きせけん、つまりわれわれにあてはめれば、この地球ということになりましたか。

有情うじようが誕生し、生命を形成していく国土が崩壊するさまをいつております。

木口 なるほど。

池田 まえにも申し上げましたが、仏法は四劫（成・住・壞・空^{*}）という宇宙の実相をあかしております。

このうち一切が崩壊していく「壞劫^{えこう}」においては、まず有情世間、すなわち、ありとあらゆる生物が壊滅してしまう。その後、器世間、つまり地球などの天体が壊滅するといわれています。

—— なるほど。

宇宙はまさにエネルギーの宝庫

池田 そこで、この器世間である地球が滅するとき、「劫焼」すなわち大火災がおこる、と説いております。

木口 いや、それはすごい。大火災というのは、地球が太陽の炎のなかにのみこまれ

るときをさしている、と私は思いますね。

池田 また「四劫」は、ま、いろいろ計算法があるのですが、それぞれ膨大な時間を経るとも説かれております。

—— なにかの「終末論」とかとは、まったく違いますね（笑）。じつに明快だ。（笑）
木口 まえにも話題になりましたが、「星の死の世界」は、長い間、知られることのなかった領域でしたが、赤外線望遠鏡やX線望遠鏡などの宇宙探査により、つぎつぎと新しいデータが送られてきています。

—— 最も有名なものは、どんなものですか。

木口 たとえば「おうし座」のカニ星雲*がよく知られています。この星雲は、自爆を遂げた星の姿を見事に映し出しています。

池田 そのガス星雲は、ありし日の太陽のような姿だった、といわれるものでしたね。
木口 そのとおりです。しかもこの星雲のなかに、ものすごい正確さで、周期的な電波を出す天体が存在することがわかりました。これをパルサー*といいます。これがじ

つは、まえにお話した中性子星になることがわかったわけです。

——なるほど。

木口 この星は、じつに強力な電波を発していることが観測されています。このエネルギーの起源は星の自転で、総量としては、太陽がもっている自転の量とほとんど変わりありません。これが、どのように有効に出されているか、いま研究をかさねられています。

池田 われわれの銀河系のすべての天体のなかで、いままでこれほど強い電波は、観測されたことがないほどのものだと言ったことがあります。

木口 おっしゃるとおりなんです。たとえば、このパルサーが一秒間に出すエネルギーで、地球上のすべての電力需要を一〇億年間まかなうことができるようになるだろう、とまでいわれています。

——すごいですね（笑）。最近、NASAの専門家が、実用化できるかどうか研究に入った星の新しいエネルギーがある、となにかで読んだことがありました。そのこ

とだったんですね。

木口 たぶん、そうでしょう。星のもつ核エネルギーは星の質量の〇・八パーセントしか使えませんが、重力エネルギーとなると原理的には一〇〇パーセント使えます。

池田 たしかに宇宙は、くめどもつきぬエネルギーの宝庫だ。

まさに万物の母という感じがしますね。

木口 まったく、そのとおりです。

おうし座では星の生と死が同時に

—— カニ星雲が爆発した記録は、以前にも話題に出た、藤原定家（鎌倉初期の歌人。『新古今集』『新勅撰集』を撰）が日記『明月記』に書きとめていたそうですね。昭和の初めごろ、日本のアマチュア天文家が、アメリカの天文雑誌にその日記を、超新星爆発*の記録として投稿したところ大反響をよんだという話です。

木口 それは知りませんでした。

—— ええ、それまで超新星爆発の確実な記録は、知られていなかったようです。

木口 いまでも、たいへんナゾにつつまれた星雲です。世界中の天文学者のあいだで盛んに研究されています。

これとは対照的にこの星座では、Tタウリ星という生まれて間もない星がみつかっています。また惑星が誕生している可能性を示す事実が発見されたのも、この星座が初めてでした。

池田 なるほど。おうし座では、星の生と死が同時に演じられているわけですか。おもしろいものですね。

木口 ええ現代天文学では、さらにこの星や銀河系が生死を繰り返すということがわかっています。

—— たしか天王星も、この星座で発見されているはずでしたね。

木口 そのとおりです。ドイツの天文学者ハーシェル（大型反射望遠鏡をつくり、一七

八一年に天王星を、ついで土星を発見した）が、いまから二〇〇年前に発見しています。

死んだ星の温度はマイナス二七〇度

—— ところで星が死んだ場合、光を失って宇宙に溶けこむときは、温度は下がっていくわけですね。

木口 そうです。

—— だいたい、どのくらいの温度になるのですか。

木口 星は元気なときは、何千万度というエネルギーを出しますが、死の状態では、かぎりなく宇宙温度「絶対3度K^{*}」にちかづきます。

—— 絶対3度Kといいますが、摂氏何度ぐらいですか。

木口 人間が感じる温度としては、マイナス二七〇度です。

—— そんなにですか。寒さなどという感覚はとおりこしていて、想像もつきません

ね（笑）。考えただけで身ぶるいがする。（笑）

木口　それが宇宙空間の平均温度なのです。つまり、星が死ぬと周囲の温度と対応するわけです。

池田　そういえば人間も死ぬと、当然のことながら温熱の発生がなくなるので、時間が経つと冷えてくる。いくら冷たくなっても、そのときの外界の温度よりは低くならない。

木口　そうですか。よく、冷たいムクロといいますが。

池田　ある法医学書に、ちよつと冷たく感じるのは、皮膚水分の蒸発のためであり、気温が三〇度であるなら、そのていど。一〇度なら、またそのていどの温度よりは、低くならない。他の動物の場合も同じである、と著わされていると聞いたことがあります。

木口　なるほど。冷たいムクロという表現は、やはり悲しみとかの情感がこめられているのでしょね。

不滅の陽子にも生死があつた

—— この宇宙のあらゆる星も生物も、人間の身体もすべて素粒子*という、まことに小さな存在から成り立っているわけです。つい最近まで「陽子*」とよばれている素粒子だけは死なない、つまり不滅とみられていたようですね。

木口 ええ、この「陽子」というのは、ご存じのとおり万物のもととなる原子の核をつくっているものです。

—— この陽子と中性子*で核ができあがり、そのまわりに電子が回っているわけですね。

木口 おおざっぱにいうと、そうなります。

ところがこの陽子でさえも、理論的には、やがてこわれることがあきらかになりました。

仏法が説く無常の大原則から、迷い出た孤児ではなかったわけです。(笑)

事実、昨年(一九八三年)の夏から、東大理学部グループが、アメリカ、インドにならんで「陽子崩壊実験」に取り組んでいます。

池田 それがこのまえ、新聞(一九八四年一月五日付朝刊)で大きく報道されたものです。よくわかりました。

木口 ええ今回、確認されたわけです。

—— 私もちよっと取材してみましたが、岐阜県・神岡鉱山の坑内に実験場があるそうですね。

木口 厚さ一〇〇〇メートルほどの岩石で囲まれた地底に、三〇〇〇トンもの水を入れたタンクを置いて実験しているそうです。

池田 ずいぶん大がかりな実験ですね。

木口 宇宙線などの影響をさけ、遮断する^{しやだん}ため地下深く入らなければなりません。

—— 「陽子の死」を正確に確認するためには、タンクの水の中に含まれている膨大

な数の陽子が、自然崩壊するのを待つわけですね。

池田 たしか「陽子」の寿命は、宇宙の年齢を一〇〇億年とみた場合、その一〇〇億倍という人知をはるかにこえたものと推定されている、という話を聞いたことがあります。

木口 そのとおりです。

—— そんなに寿命の長い、しかも目にみえない小さな「陽子の死」を発見することができるとは、ですか。

木口 ええ、そこがやっかいなんです。実際ビッグバン以降からいまにいたるまで、崩壊した「陽子」は微々たるものだといわれています。しかし、寿命が長いといって平均寿命ですから、たくさん「陽子」があると、いくつかは早死にするわけですね。

理論的には、年に数個その死が確認されることになっています。

—— なるほど。

木口 この陽子の研究は、私たちの日常生活とは直接に関係ありません。しかしこの研究により、この宇宙に、どのようにして物質があらわれたかがわかるのです。これは、万物の生の研究なのです。

—— そうした新たな真理を証明するには、簡単な机上の実験ではわからないということも、また示唆^{しき}的です。ね。

木口 そうなんです。科学が進歩すればするほど、残されたナゾは少なくなります。が、半面、解明が複雑で、むずかしくなってきました。そのための費用と人手も莫大^{ばくだい}なものとなってしまします。

—— ところで最近、科学の進歩によってうまれたビニールや発泡^{はっほう}スチロールなどは、生活には便利のようですが、なかなか分解しないし、腐りもしない。やっかいものになっています。

木口 やはり万物は生と死を繰り返すのが、自然のリズムなんですかね。乾電池などもたいへんな問題になっていますね。タバコのニコチンも、体内で分解されにくいの

で害になりますね。(笑)

池田 いや渡部(恒三)厚生大臣も、タバコは健康のもとといっている(笑)。だから、私は一生懸命すっている。(大笑)

——なにを考えて、大臣になっているんですかね。(笑)

木口 タバコ論議はともかく(笑)、科学は、人びとに多大な恩恵をあたえるが、と
きによっては、害をあたえてしまう場合があります。

池田 人びとは、ふだん恩恵を追い求めるばかりに、あまり害のことは意識しない。
だが科学は、あくまでも両刃の剣であることを忘れてはならない、ということでしょうね。

木口 まったく、そのとおりです。

科学する者が、最も心しなければならぬ問題です。

科学だけが暴走しかねない、われわれの時代には、科学と矛盾せず、止揚^{しやう}しゆく哲学、宗教は絶対不可欠と思いますね。

第十四章

仏法の宇宙観とガリレオ裁判

すぐれた哲学、宗教に国境はない

志村(司会) 長途の北・南米の旅、たいへんにご苦勞さまでした。

木口 本当にご苦勞さまでした。

池田 どうもどうも。

—— 今回は、アメリカのロサンゼルスを皮切りに、ダラス、マイアミ、そしてブラジルのサンパウロ、ブラジリア、ペルーのリマ、またロス、サンジエゴ、ホノルルと、三か国八都市を歴訪されたわけですね。

木口 「ペルー太陽大十字勲章」の受章、おめでとうございました。

池田 いや、どうも。

私ごとき者がお受けするものではないと固辞したのですが。大統領が、すでに閣議で決定したことなのでどうしても、とおっしゃるものでお受けしました。

——あの勲章は、ペルー国家の最高権威のものですね。外国の元首級に贈られるものです。

木口　そうですか。ペルー国家が池田先生の平和、文化、教育への貢献をたかく評価し、今回の訪問をいかに歓迎したかが、うかがわれますね。

——ブラジルのフィゲイレド大統領との会見のもようは、NHKのニュースでも拝見しました。

木口　私もみました。（笑）

池田　通信衛星は早いですね。（笑）

ブラジルの出来事が、ほぼ同時刻に地球の裏側の日本でもニュースになっている。

木口　海を越え、他国の様子がいながらにして映像でわかるのも、いまではあたりまえのことです。しかし、つい数十年前には想像もできなかったことです。これも、宇宙開発のめざましい成果です。

——会見では、日系人の活躍ぶりについても話題がおよんでおりましたね。

池田　そうですね。

笠戸丸の移民から早くも七十六年。いまでは日系人は約八十万人となった。そして、ブラジル社会のあらゆる分野に進出、貢献しているようです。たいへん、うれしく思います。

木口　そうですか。私も、いつペンブラジルに行ってみたいと念願しております。

池田　フィゲイレド大統領は、その感謝の意もふくめ、五月末から六月初めにかけて来日するようです。なんですか、終わったあと、中国も訪問したいといっていました。

——　ペルーのベラウンデ大統領も、訪日の希望を明らかにしたようですね。

池田　ええ、明年（一九八五年）の大統領選後には、ぜひ訪日したいといっていた。大統領は著名な建築家で、日本には友人も多い。日本を自分の研究、教育の完成の場としたい、という言葉が強く印象に残りましたね。

木口　ブラジリア大学、サンマルコス大学訪問をはじめとする幅広い交流といい、また一つ確実なる平和、文化への布石がなされましたね。

池田 教育は、私の生涯の仕事と思っております。

両校とも、今後、教授の招聘しょうへいなど創価大学との緊密な学術交流を、さらにはかつていくことになっております。ともかく、日本に対する期待は、たいへんに大きいものがある。

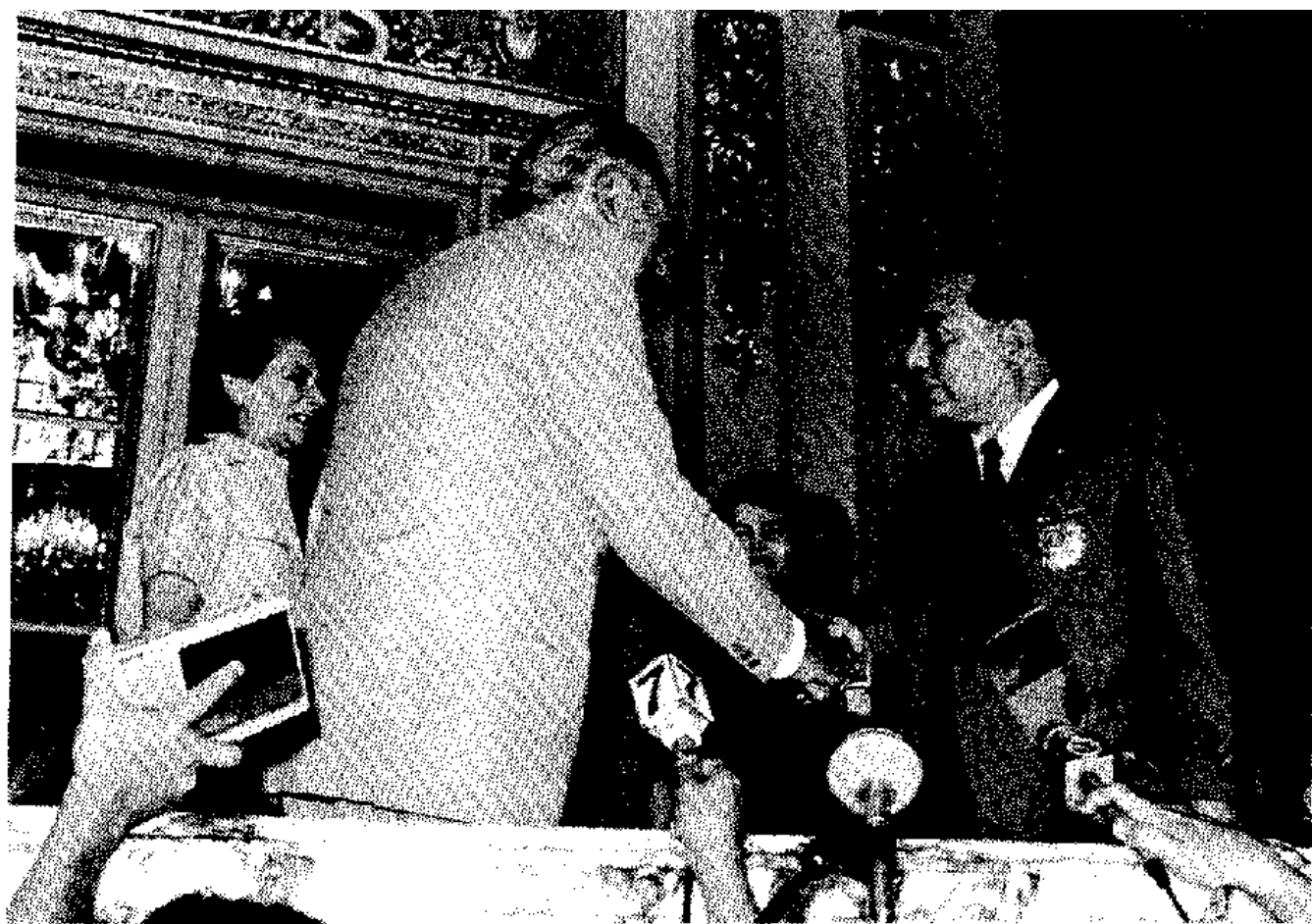
—— ブラジル、ペルーのテレビや新聞も、連日のように名誉会長の動きを報道しておりますたね。ある国連の関係者も、名誉会長の南米訪問は、日本と南米との新たな交流となったと話しております。

木口 各国の文化祭が、これまたすばらしかったようですが。

—— ブラジルは四万人。ペルーは一万人。日米青年の合同総会は二万人。それは、たいへんなことです。

木口 とくに日米青年の総会には、レーガン大統領はじめ百六十通をこえる著名人からのメッセージが寄せられておりましたね。

池田 ブラジルは十八年ぶりです。ペルーは十年ぶりでしたが、メンバーはそれぞれ



ペラウンデ大統領から「ペルー太陽大
十字勲章」を贈られる池田大作氏。

の地域でも、社会でも、見事に活躍、貢献しておりました。私は心から安心しました。

木口 新聞で拝見すると、日系の人も、白人も、黒人も、インディオも肩と肩を組み、全身に^{よろこ}歡びをあらわしてましたね。すばらしい光景と思います。

—— ペルーでは、ある警察関係のトップクラスの人が、立派に成長している青少年の姿に「池田先生の指導が、ペルーの青年を、ここまで育ててくださったことに心から感謝したい」と

いっていったそうですが。

池田 志村君は、いつも情報が早いね。(笑)

木口 どの国でも、警察の関係者は青少年の非行化に頭をいためています。ことさらに切実なんでしょう。

—— ブラジリア大学の総長も、名誉会長のことを「魂を失った人びとは、すばらしき教育者、そして偉大なる指導者の指導をうけるべきである」と語っておいりましたね。私は感銘しました。

木口 それにしても、仏法は国境をこえ、民族をこえ、世界のありとあらゆる人びとに、見事なる蘇生と幸福への活力をあたえておりますね。

—— まったく同感です。政治次元でもない、経済次元でもない、こうした深き人間次元の運動は、いわゆる国家という觀念や、イデオロギーの相違に固執しては、もはや理解できないと思いますね。

池田 科学に国境はない。学問にも国境はない。文化にも国境はない。と同じように、人びとに心からの納得と、幸福と満足とをあたえうる哲学、宗教にもまた国境は

ない、と私はみております。

木口 なるほど。アインシュタイン*やバートランド・ラッセル*など、偉大なる真理を発見した多くの科学者も、いきつくところ、全人類的な普遍的価値へと光をあてております。

平和問題と世界の大学との交流

池田 ともあれ、世界にはさまざまな国があり、さまざまな人種、民族がいる。

そのまったく異なった文化、生活習慣の青年たちが、同じく世界の平和を叫び、その国の発展のために行動している。

このたしかなる、事実の流れを大切にしていきたいと思います。

木口 ところで、ペルーには宇宙人と関係があるのではないかともいわれる「地上絵」という、まことに不思議なものがあります。

池田　そうですね。今回は忙しくて行けませんでしたが、首都・リマから飛行機で一時間ほど行くと、ナスカというところがあります。ほとんど雨が降らないところで、その乾ききった平原に、巨大絵がえがかれているそうです。

木口　パン・アメリカ・ロードという道路をはさみ、コンドルの飛ぶ姿や、サル、クジラ、宇宙人といわれるものなどがあるようですね。

池田　それがあまり大きいので、地上でみたのでは、なんの絵だかまったくわからな
い。

飛行機で上空からみて、初めてその姿が確認できるというものです。

そうですか。

「いったい、なんのために描いたんですかね。」

木口　それがナゾなんです。だから、宇宙人が登場してくる。（笑）

池田 いまから四十五年ほどまえに、アメリカの文化史研究家が発表したものです。紀元前三〇〇年から九〇〇年ごろのものらしいですね。熱気球があつたのではな

いかとか、諸説があるようですが、まあ、天文図であろうという説が有力のようです。

—— 話はかわりますが、アメリカのサンジエゴに、創価大学の分校ができるそうですね。

池田 ええ、今回は起工式が行なわれました。フランスに語学研修センターが、来年オープンしますので、海外で二番目の教育施設になります。

—— 将来は医学部、理工学部、海洋学部の設置が予定されておるようですね。

木口 遠大な展望です。日本で、そうした高度な次元の発想をする指導者を、私は知らない。それにしても学生の時代から、他国との交流ができることはうらやましいことですね。

池田 私は、平和問題の解決の一つの糸口は、世界の大学の交流にあると思っております。

—— 鋭い指摘です。名誉会長は、ハワイ大学も訪問されましたね。

池田 大学は本来、その国の知性であり、その理論的支柱をなしゆくものである。また、学理は世界共通の普遍的真理探究の道である。

ゆえに教育は平和、文化の基本である。

木口 そのとおりです。

池田 その意味において、民間レベルの交流の一つの軸となりうるのが、各国の大学交流ではないでしょうか。

私はかねてより、立法・司法・行政の三権分立とともに、教育権を加えた四権分立主義です。そうでないと、学問の府が政治や経済などの次元で左右されることになってしまう。それは、まことに悲しむべきことです。

木口 まったく同感です。

池田 ユネスコ憲章にも、「政治的および経済的取り組みのみでは、永続性のある平和は築けない。

全人類の知的、精神的連帯のうえにこそ、平和は築かれる」、という趣旨がうたわれ

ております。

——なるほど。

池田　ですから、民衆の平和への連帯とともに、世界の真理を追究する学者が一堂に会して、横暴な権力の魔性におかされない、強い連帯を結んでいくことも、世界平和への近道だと思っております。

——なるほど。新しい時代の大学のもつ重大な意義だと思いますね。

木口　池田先生が、創価大学設立のモットーのなかに「人類の平和を守るフオートレスたれ」といわれた、深い意味をかいまみる思いです。

宇宙に新たなるフロンティアを開拓

——木口さん、日本でもアメリカのスペースシャトル*なみの打ち上げ能力をもつ、大型ロケットの開発が、本決まりになりましたね。

木口 ええ、七年後の一九九一年をメドに計画を始めたようです。

池田 これが実現すれば、日本も「宇宙大国」の仲間入りということになるわけですか。

木口 そう思います。この他にも、今後十五年間で約五〇個の実用衛星を打ち上げる予定のようです。また、アメリカの宇宙基地計画にも、積極的に参加するということです。

—— なんですか、この対談が始まって、本当に宇宙が身近になった感じがします（笑）。ただ、予算はたいへんなんでしょうね。（笑）

木口 そうです。たとえば、四年後のスペースシャトルには、日本人の科学者が乗る予定です。

池田 日本人初の宇宙飛行士の誕生ですね。

木口 ええ、シャトルの三分の一を借りきって、宇宙空間でのさまざまな実験を試みます。

しかし、これにかかる費用だけでも、なんと約八十五億円になります。

池田 たいへんな経済負担となる。

この地球には、いまだ貧困と病気に悩む人が何億という。また文盲も、まだまだ多い。この地球上の不幸を無視した宇宙開発では、絶対にあってはならないと思います
が。

—— 十数年前、名誉会長が宇宙開発は「共同開発」が望ましい、という話をされた
ことがあります。経済的負担という点からも、平和利用という観点からも大事なポイント
だと思いますね。

木口 宇宙開発は、通信、放送、気象、金属さらには医薬品まで、地上ではできなかった
研究が可能となります。

池田 どんなものができるのですか。

木口 宇宙空間では重力がないため、特殊技術で純粋な物質が抽出できるので、高価
な糖尿病の薬やスイ臓病の特効薬などがたくさんつくれます。

—— いいですね。（笑）

木口　また新しい合金やアモルファス（非結晶金属）なども開発されるといわれています。

宇宙は、すばらしい機能をもった、工場みたいなものです。

—— 宇宙開発は、これからの科学の花形のようなですね。

レーガン大統領も、ことしの年頭教書で、かの大航海時代になぞらえ、宇宙に次のフロンティアを開拓しよう、とよびかけておりましたね。

大航海時代にさまざまな科学が発達

池田　マゼランが世界周航したのは、もう四六〇年ぐらいまえになりますか……。コロンブスやバスコ・ダ・ガマの冒険も、当時の人びとの生活に変化をもたらしていった。

—— そのとおりですね。「地球がまるい」ということも、事実のうえで認識されていきました。

木口 あの中世暗黒の時代から、ようやく解放されつつあった人びとは、未知への探究心を空へ、海へと向けていったことは想像にかたくありませんね。

池田 あの海の果てに、いったいなにがあるのか、という人間のあくなき好奇心は、つぎつぎと新天地を発見していった。

いつの時代にあっても、人びとは未知の世界に対しては、かぎりなきあこがれをいだき、それを知りたいと思うものだ。

—— 現代もまた、宇宙時代の開幕といわれるゆえんですね。

木口 遠洋航海を可能にしたものは、なんといっても望遠鏡、地図、コンパスの進歩がモノをいったようですね。

—— それと医学も進歩してきた。

池田 なにかの本で読みましたが、バスコ・ダ・ガマがインド洋を発見し、ポルトガ

ルのリスボン港に帰り着いたとき、船員の数は、わずか三分の一になっていた。

また、長い航海のため生き残った船員も、みな栄養失調であつたようです。

木口 ビタミンCの不足で、壊血病で死んだ人もいましたね。

池田 また、当時ヨーロッパにはなかつた病気も持ち帰つてきた。そのため、医学の進歩が要請されたといわれますね。

—— そういえば、月からアポロ宇宙船が帰つてきたとき、飛行士は何日間も隔離されました。

木口 ええ、セーガン博士たちが、そうすることを提案しました。

池田 私も、セーガン博士に、なぜそうした措置をとつたのか聞きました。

「宇宙の新しい菌か、なにかを持ってくる可能性があるかもしれないからだ」というようなことをいっておいりましたね。

—— やはり、用心にこしたことはないというわけですか。（笑）

池田 この大航海時代においては、とくにオランダで、さまざまな科学の発達があつ

たようですが。

大なる世界と小なる世界の不可分の関係

木口　そうですね。じつは望遠鏡も、オランダで発明されています。また顕微鏡も、それ以前にオランダで発明されています。

——「さまよえるオランダ人」どころではなかった。（笑）

そういえば、このまえ、六世紀の初め、朝鮮の新羅で「火珠」つまり、レンズをつくったという記録が『朝鮮科学技術史』という本に出ていました。

木口　そうですか。日本では聖徳太子の時代より、一〇〇年ほどまえになりますかね

——「烏水晶」というものであった、と記録にはあります。

池田　なるほど。日蓮大聖人の御書のなかにも「水精すいしやうの玉たまの日輪にちりんに向えば火を取り月輪げつりんに向えば水を取る」（『当体義抄』）という御文があります。

当時、すでに「水晶」というものが、いろいろな役割を果たしていたんでしょね
—— そうだったんでしょ。

顕微鏡はオランダのメガネ屋さんが、虫メガネを組み合わせているうちに、発明したといわれていますが。

木口 ええ。それから数十年して、同じオランダのメガネ屋さんが、老眼と近眼のメガネを重ねているうちに、偶然、望遠鏡を発明するヒントをみつけています。

—— 現在のような顕微鏡の原理を考案したのは、天文学者のケプラーです。

また、彼は有名なケプラー式望遠鏡もつくり、ガリレオ^{*}のものより、さらに本格的なものにしていますね。

池田 なるほど。

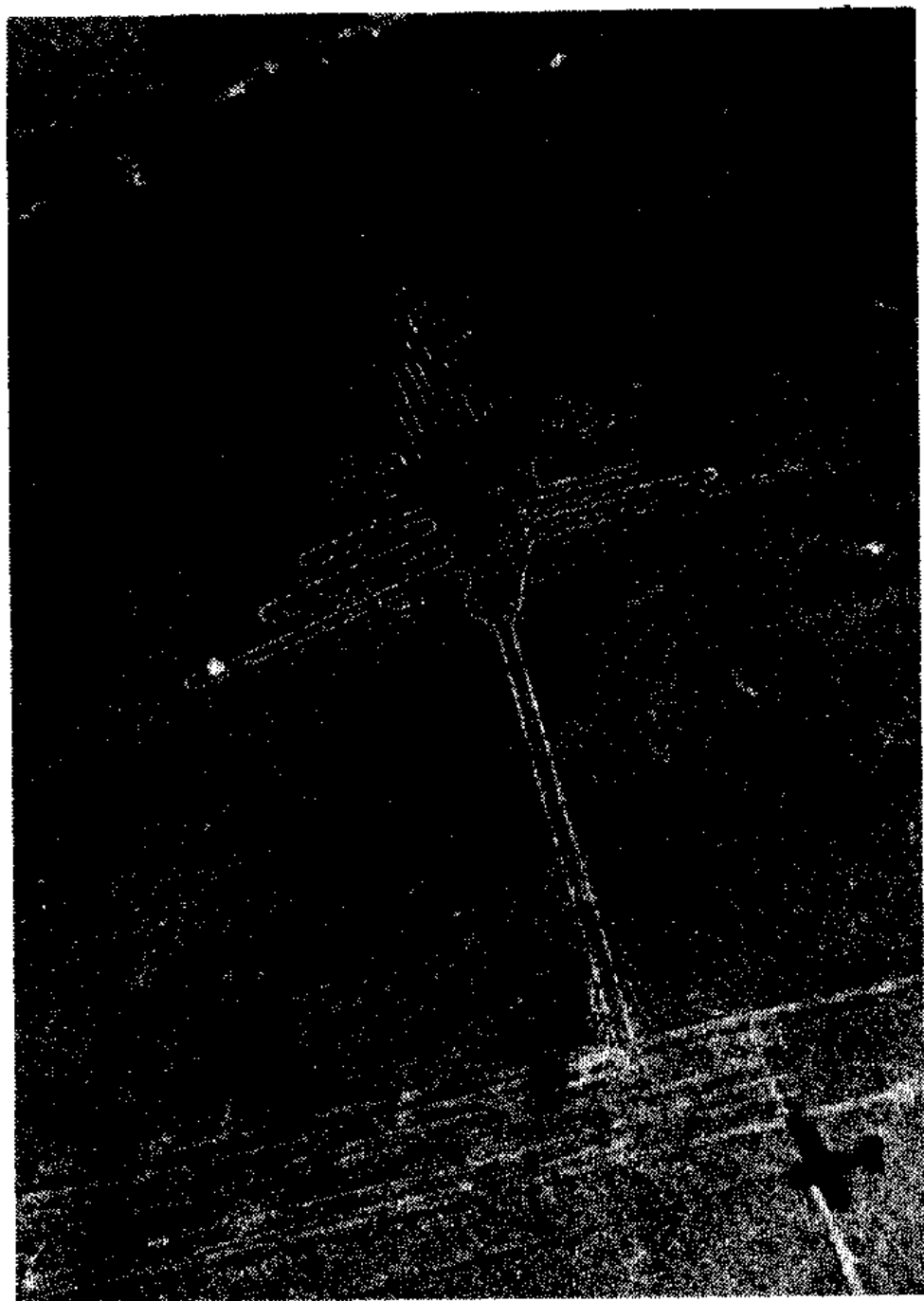
人間の一心が大空へと広がると同時に、地上のより小さな世界にも向かっていったわけですか。

木口 まったく、そのとおりです。しかも、現代科学では、この宇宙の大なる世界

が、原子や素粒子^{*}という小なる世界と不可分の関係にあることがわかってきたわけ
です。

これも驚くべき事実です。

——ギリシャ時代のアリストテレスも、大きな宇宙の法則を考えれば考えるほど、



ナスカの鳥、クジラなどの地上絵はあまりに大きく、地上
でみたのでは何が描かれているのか、わからない。

小さな宇宙としての人間のことがはつきりしてくる、という哲学観をもっていたようですね。

池田 そういえば、大きいという意味の「マクロ」、小さいという意味の「ミクロ」という言葉は、もともととは、ギリシヤ語に語源があると聞いたことがあります。

木口 ええ、アリストテレスの『自然学』という著書に出てきます。

—— マイクロフォンやマイクロフィルムなどの「マイクロ」という言葉も、小さいという意味の「ミクロ」からきているそうですね。

木口 最近では、光ファイバー^{*}ということが注目されています。

髪の毛ほどの細さのガラス線に、五七六〇もの電話回線がおさまる技術が実用化されていますね。

池田 このように、大きなものが小さなものにおさめられる。また小さなものが、大きなものへと広げられていく。

こうした事実からも「法界の全体は一念に具し一念の全体は法界に遍し^{あまね}」（『三重秘伝

抄』ということもわかるような気がする。

「法」を求め、死も覚悟の旅立ち

—— この大航海時代よりも以前に、陸地ではありましたが、あのシルクロードという西域の長い長い道を踏破した旅がありました。

木口 ヨーロッパの人びとは、東洋の絹や陶器を求め、艱難かんなんの旅をつづけましたね。

池田 暦法、印刷術、火薬、羅針盤、数学なども東洋から西洋に伝わっていったようです。

木口 そのころは、東洋の文明のほうがすぐれていたわけですか。

—— ええ、それを研究したのが、トインビー*博士であり、イギリスの生化学者ニードムです。

木口 すでに紀元前四世紀ごろには、アレキサンダー大王がインドまで足をのばし

ていますね。

池田 そうですね。その後、そのまま西北インドにとどまった子孫のなかで紀元前二世紀、北インドの舎竭城しゃかつを治めたギリシャ人の君主ミリンダと、仏僧・那先比丘なせんびくとの有名な仏教対話があります。

—— ええ、法論にやぶれたミリンダは、最後に精舎（寺院）を寄進し、仏教に帰依きえしたということです。

池田 十三世紀には、逆にジンギス汗かんが、いまの東欧圏のあたりまで遠征していますね。

木口 当時のシルクロードの旅は、つらかったんでしょうね。

—— 五世紀ごろ、インドに経典をさがして旅した中国の法顕ほうけんの『仏国記』*にも、その一端が記されています。たしか、「途中で死んだ人の白骨をたよりにしながら、それを目印として旅をつづけた」というようなくだりもあったと思います。

木口 なるほど。

—— また七世紀初めに、玄奘げんじょうは、十七年間という大旅行をしておりますね。死をも覚悟した旅だったようです。

池田 そうですね。ある考古学者がいつておった言葉が忘れられない。

「今日にいたるまで、この道を残しているのは、命がけでつくったものだからでしょう。死を決意してつくったものはこわれない」

—— じつは四、五年前、井上靖さんや学者の方々について、ガンダーラの道を訪れたことがあります。

余談ですが、そこでクシヤン朝の王さまの肖像をえがいたコインをみつけ、皆からうらやましがられてね。(笑)

いまなお、東西文化交流の足跡が砂漠の真ん中に、そのまま残っておりますね。いや、驚きました。(笑)

池田 ともかく、無名の人びとが勇敢にも、命を賭かけて、あの荒漠こうばくたるタクラマカン砂漠を越えていった。

また、道なき道をつくりながら、天山の峨々たる峰を登っていった。すばらしいことだ。この魂の行列が、この道には、秘められているような気がします。

木口　なるほど。

池田　当時は、労働基準法もなにもない。（大笑）

それぞれが、一世一代の情熱をかたむけていく生き方に徹する以外なかったんでしょう。

木口　そのとおりですね。“時間給”では、壮大な足跡はできないですから。（笑）

池田　エジプトのピラミッドも、多くのものは破損が大きい。いまなお、巖然と残されているのは、幾多の人びとが、使命と誇りをもち、命を賭けてつくったカイロ郊外ギザの「情熱のピラミッド」しかないといわれます。

——なるほど。深い洞察だと思います。ところでピラミッドの建設は、いまでいう“失業対策”の意味もあつたようですが。（笑）

池田　そういう見方もされてきたが、そうとは思えない。自分たちの王国の永遠性の

象徴として、選ばれた人が中心となつての大偉業とみることもできる。

木口　ピラミッドには、思いもかけぬ工夫がこらされていて、王の遺体を納める部屋には、通気孔のようなものがあるそうです。一年のうちのある日、ある瞬間にだけ、そこからある星の光が王の柩ひつぎの上に差しこむように工夫されているそうです。

—— ええ、そうですね。

木口　数学的にみても、物理学的にみても、見事な構造をもっていますね。たんなる義務的な奴隷労働では、絶対にできないものだと思います。

宇宙時代をリードする宗教とは

—— シルクロードの時代は、そうとうすぐれた宇宙観があつたようですが。

池田　そうですね。

さきほどのアレキサンダー大王が、「地動説」を知っていた、ということは、じゅう

ぶん考えられることのようなですね。

——ギリシャ哲学にも「地動説」があっただんですか。

池田　ギリシャのプラトン、アリストテレスやアリストタルコスといった哲学者は、太陽中心の宇宙観をもっていたという文献が残っておるようですね。

木口　ええ、天才アルキメデスが、シラクサ王とヒエロン二世にささげた『アレナリア』という著述に、そうしたくだりが出てきます。

——そうしますと、ジンギス汗にも、なにかそうした宇宙観があったことも考えられますか。

池田　一度調べてもらったことがあるのですが、ギリシャの宇宙観は、アラブ地理学にうけつがれ、遠く蒙古にまで伝わっていったということです。

フビライの時代には、サマルカンドという地に大規模な天文台まで建っていたようです。

——なるほど。そうしますと、ギリシャ的な宇宙観を、ジンギス汗がもっていたこ

とも、考えられることになりますね。

おもしろいですね。(笑)

池田 ええ、ただその記録のようなものはまだ発見されていないようです。

ともあれ、いかなる時代にあっても、ひとつの世界観なり、宇宙観というものが大なり、小なりあった。

そこに進歩や発展の因があったわけである。

しかも、そのもととなったのは、哲学、思想である。この宇宙時代ともいうべき現代にも、深き裏づけとなる新しき哲学や宗教というものが必要不可欠となってくるのではないでしょうか。

木口 そのとおりですね。

なにかいまは、知識や情報だけが先行してしまい、肝心の深い思索や哲学性があまりにもなさすぎます。

だから、アンバランスや不安定さが目立つ。

「宗教のための宗教」の恐ろしさ

—— ところで、このギリシャ以降、西欧の宇宙観は大きく変貌してしまうわけですね。これは、なにが原因だったんでしょうか。

池田 一言でいえば、ローマ帝国によるキリスト教神学の絶対化にあったとみてよいでしょう。その祭政一致による神権政治が、長くヨーロッパを支配してしまった。こうした状態が、あのルネサンスの時代を迎えるまで、千年以上もつづいたわけですね。
木口 その世界観たるや、地球はどこまでも平面で、陸の先は海が果てしなくつづく。そして、海がつきるところは断崖である。そこに海の水が滝のように流れ落ちていく、という幼稚なものでした。

—— この世界観にそむくようなものは、いつさい、しりぞけられる。さもないければ弾圧でした。

木口 十字軍の侵略、魔女狩りなどもひどかったようですね。

—— 第三回十字軍遠征のときに、こんな話があります。イスラム教徒の捕虜が、教皇に差し出すべき「金」を飲みこんだ、という疑いをかけられた。その取り調べは凄惨なものでした。次から次に捕虜を殺し、内臓をあばいて「金」をさがそうとした。それでも出てこないとなると、今度は死体を焼却してさがそうとする。その数は三千人におよんだ。

池田 いくつかの本に、そのような事例が載っていますね。

—— ええ、ところが、「金」はついに出てこなかった。

池田 いわゆる宗教は、人間の幸福のためへの追究でなければならない。どうしても、このような恐ろしい結果がでるかということ、人間自身の英知でもって、深く探究していく必要があることを知らなければならぬ。

—— もちろん、政治権力とのからみもあったわけですが、このキリスト教の歴史が物語るものは、「人間のための宗教」ではなく、「宗教のための宗教」という考え方の

もつ恐ろしさだと思っています。

木口　こうしたことは、遠いむかしの話だけではないようですね。

—— ええ、いまから四〇年ほどまえ、ユーゴでおこった宗教戦争は、ひどいものでした。

このとき、約二十四万人のセルビア人が、正教徒からローマ・カトリックに改宗させられていきます。

木口　信仰の自由どころではない。

—— さらにひどいことに、改宗しなかった七十五万人が虐殺ぎやくさつされたという記録が残っています。

この大量殺戮きつりくには、修道会士や神父が、応急の強制収容所での首切り役を引きうけたということです。

このとき、カトリック側に同盟軍として加わっていたドイツのファシストも、あまりの「凄惨せいさんさ」にバチカンに抗議したほどだった。

木口　ところが、バチカンは、この訴えに対し沈黙で答えたようですね。

池田　それは有名な話です。

ともあれ私は、「法のため、人間のために」との大聖人の御聖訓を、命のつづくかぎり守っていききたい。

仏法は慈悲と寛容の絶対平和主義

——　このような例は、仏教にはどうですか。

池田　いや、殺すなんていうことはありえない。

一つの歴史的な事実として、インドの阿育大王あそかの時代をみれば、わかっていたただけると思う。

——　仏法が国中に広まり、戦争放棄、福祉政策、平和外交をつらぬいていますね。
池田　当時は専制主義で、まあ、たいへんにやりよかったと思う。(笑)

いまは民主主義であり、民衆が自身にめざめ、宗教にめざめ、仏法にめざめ、賢明にならなければならない。

その民衆の結集が、即、阿育大王と置いていかなばならない。

木口　ちかくは日蓮正宗創価学会の歴史もまた、常に平和と不戦の歩みでしたね。

—— 歴史をみても、仏法は慈悲と寛容の絶対平和主義ということがいえます。

池田　そうです。

この慈悲と寛容のゆえに、あまりにも権力者から利用されたり、いじめられたりする。

また、暴力をこうむったり、非難中傷も多い。しかし、仏法の立場は常に非暴力主義であつた。

木口　なるほど。そうですね。

池田　かのトインビー博士も、キリスト教やイスラム教と違って「仏教の伝来は、その地域の文化の流れを中断させることはなかった」と明快に、そういう点を論じてお



池田氏にとってブラジルは18年目の訪問となった。フィゲイredo大統領との会見。

ります。

—— 現代においてアメリカも、ブラジルも、ペルーも、またヨーロッパもアフリカも、仏法を知った人びとが、その国の文化、社会のなかで、生きいきと活躍しておりますね。

「地球は円い^{まる}」という考え方

木口　ところで、仏法に「地球は円い^{まる}」
という考え方はあったんですか。

池田　いや、そうとはかぎらない。それよりも仏法というものは、宇宙と人間

生命の本源の法理を説きあかしたもののなんです。まあ、一言にしているならば、いわゆる東洋の直観が究めた「法」というものを開顕かいけんしたとみてよいでしょう。

木口　そうですね。

池田　「有形」なものとおしながら「無形」のものへ。「無形」のものとおしながら「永遠性」へというとらえ方なのです。

木口　なるほど。

——　なるほど。

池田　ですから、よく「三千大千世界^{*}」という言葉が経文にありますが、そのなかに地球も含まれるというような、無限の宇宙へ、無限の生命の永遠性への志向なのです。その基準となるものが、いわゆる「法」となるわけです。

——　なるほど。

池田　有形の地球が円まるいとか、回転するという、物理的な観念よりも人間が生きているという事実のうえから、探究していると考えていたいただきたい。だからといって、い

わゆる世界観というものを無視しているのではない。

木口　ああ、そうですか。

池田　釈迦仏法においては、むしろ円筒形といおうか、立体的に世界をとらえていたむきがあると思います。

しかし、鎌倉時代に入り大聖人の門下の一人の僧が、「地球は円い」という表現を使っていたという研究があった記憶があります。なんという学者でしたかね。

——　それは、慶応大学の故前嶋信次博士ではないでしょうか。

池田　ああ、そうかもしれない。博士はイスラム史の大家だったようですが、ひよんなことから大聖人の弟子の一人であった日持にちじの行跡について考察したようですが。

——　そのとおりです。大聖人の地球観にもせまった、ということを読んだことがあります。

池田　ああ、そうでしたか。日持は大聖人ご入滅後、退転してしまったね。

——　そうです。彼は、大聖人の滅後十四年目に大陸渡航しておりますね。

池田 有名な話です。博士が、この日持に関心をもったというのも、おもしろいですね。

—— なんですか、博士の話によると、戦時中、ある日本人が万里の長城にほどちかい宣化^{せんか}という町で、日持の遺品が、たまたま市場で売られているのを買い求めたわけです。

木口 縁というものは、おもしろいものですね。

—— ところが、終戦の引き揚げの混乱で、品物は日本に持ち帰ることができなかつた。それで、写真に撮っておいた。

木口 なるほど。

—— その写真を博士が、ある人を介して、たまたまみる機会があつたわけです。そのなかの一枚にあつた「為東部環球巡錫云々」という、日持が、日本出発前にしたためた文章のなかの一節が目に入つたわけです。

池田 そうそう、博士はこのなかの「環球」という二文字に注目しておりましたね。

—— そこで博士は、まず、アラビア地理学が中国に伝来した経過を調べるわけです。

木口　なるほど。アラビア地理学は、ギリシャの宇宙観を受けついでいますからね。これが中国まで伝わっていけば、とうぜん日本にもきているはずですよ。

——日持がこの文章を書いたのが、「永仁二年元旦（『是時永仁乙未元旦辰上刻』——編集部・注）」、すなわち一二九四年とある。

ところが、「環球」というような表現は、当時もしくは、それ以前の日本の文献には見当たらない。

木口　なるほど。とうぜんそうでしょうね。

池田　たぶん博士は、念のため中国で地球儀がつけられたのはいつか、ということまで調べてましたね。それが、日持が「環球」という言葉を使った後だった、ということとがわかったんでしたかね。

——ええ、二十九年後だったんです。

木口　これはすごい。驚きだ。そうしますと、当時の日本の地球観は、まだそこまですべてないはずですが、大聖人が「環球」ということをご存じであったことは、じゅ

うぶんすぎるほど推測されますね。

—— そうなんですよ。私も驚きました。日持が大陸に渡ったのは、四十六歳。老いた孤身に残っていたのは、ただ「環球」という二文字だけだったのかもしれないですね。(笑)

池田 この一資料をもって、大聖人の宇宙観をうんぬんすることはできない。また、あえて論ずる必要もないと思います。

ただ、一つの客観的事実の研究があるということだけを知っていれば、それでよいのではないでしょうか。

教会の歴史は陰険だった

—— ところで、宇宙観というところ、どうしても、ガリレオの宗教裁判が思いおこされますね。

木口 近代科学の父といわれるガリレオの人柄は、ベネチア共和国の王さまとの対話に、よくあらわれています。

たとえば、彼は「地球が中心で、そのまわりを太陽や他の惑星が回っているなどという学説は疑問だ。学説自体よりも、それにしがみついている連中にだけ意味がある学説にすぎなくなっている」といつています。

池田 たしかガリレオには、「人間には目があるではないか、頭をもっているではないか、それを使って、一つの事実を疑いぬくことだ。そして、疑いきれない最後の一点を今度は命をかけて信じぬく」という言葉もあつたね。

—— じつに明快です。齒に衣きぬを着せたようなところがまったくない。

池田 そうとうな頑固だったようですが（笑）、正義感も強かったんでしよう。また、あくなき真理への探究心が旺盛おうせいだったんでしよう。

—— 商才にもたけていたようですね。しかし、晩年は両眼を失明しています。また、家庭的にも恵まれず、決して幸福な生涯とはいえなかったようです。

木口　ガリレオは、こんなこともいっていますね。「この世には、わずかなことしか証明できない、たくさんの定理がある。ところが、もっと本源的な定理が発見できれば、それ一つで、すべてのことが証明できる」と。

——なるほど。やはり、一つの偉大なる発見なり、変革をなしゆく人は、どこか凡人ではおしはかれないものがあるようですね。

池田　そうだよ。だから、人間の世界は、一つの固定観念や嫉^{ねた}みからくる暗闘からまぬがれないものだ。

ともあれ、人が真理を証明したとき、その真理が偉大であればあるほど、その反動もまた大きい。古き観念にとらわれた人びとには、その偉大さがあまりにも、まばゆく映るからだ。

木口　そうですね。そのまばゆさに目がくらみ、驚きのあまり、自分たちの非を認めようとせず、逆に弾圧したのが、ガリレオ裁判の一面であつた、といつてもいいでしょう。

——これには、ローマ法皇側^{ほうおう}の政治的からみもあつたようです。そこで、多少、裁判の内容をみてみたいと思いますが。

木口　一六三三年、彼が三年前に書いた『天文学対話』が問題となり、彼は病身でありながらフィレンツェからローマに呼び出され、無実の罪で、宗教裁判にかけられたわけです。

——奇妙なことに、この『天文学対話』は、教皇庁の許可のもとに出版されていますね。

木口　ええ、ですから、まったくのいいがかりだったわけです。ローマ教皇庁は、最初、ガリレオを脅^{おど}かせば、簡単になだめることができると思つていたようです。

——そのようですね。ある枢機卿^{すうきけい}は、このようにいうわけです。

「君の説は仮説として提起するなら、君の自由だ。しかし科学は、教会の正統な、最愛の娘でなければならぬ。娘は親にとって、かわいらしい存在であるべきだ」と。

木口　ガリレオのみならず、近代でも、ダーウィンやパスツールなんかも、ずいぶん

教会からいじめられ苦しんできた。

池田 ペルーにも、キリスト教の宗教裁判所跡が残っています。

十六世紀ごろのものなのですが、拷問ごうもんの機械とか地下牢などが、そのままのかたちで保存されています。神の名のもとに幾多の異教徒が、そこで殺されていったかしれないということでした。

木口 過去の教会は、いつも陰険だったようですね。だがガリレオは、一歩も譲らない。ついに、事態は裁判にまでいってしまふ。

—— ところが死刑にするには、ガリレオの存在は、あまりにも大きくなりすぎていた。『天文学対話』は、教養ある読者に広く読まれていたようです。

ガリレオ裁判の誤りを認めたローマ法皇

池田 そうです。

彼が証明した事実は、万人が納得するものであった。

ですから、もし死刑にすれば、バチカン自体の横暴を世に示すことになってしまう。そこで、この宗教裁判には、ある仕掛けがつけられたようですね。

木口 ええ、この裁判は三か月にもわたっています。その間、さまざまな策略がめぐらされるわけですね。また、さまざまな拷問の機械が、年老いたガリレオにみせつけるように仕向けられていた。

—— これをみれば、彼も考えを変えるにちがいないと思ったわけですね。

木口 ところが、みえすいたそのカラクリをみて、彼の胸中には、私はまだ死ねない。まだまだ人類のため、世界の将来のため、しのこしたことがあるという使命感が、炎と燃えていったのではないでしょうか。

池田 そう思いますね。たとえ裁判で不本意な発言をしたとしても、本当の真実は、歴史が証明するであろうと——。

法廷に立った彼は、こういう——、

「太陽のまわりを地球がまわっているなどという、とんでもないことを証明しようとした。私は、なんと無知と不注意な誤りをおかしてしまったのでしよう」と。

—— 法皇はじめ、教皇庁の幹部はその瞬間、「しめた」と心に叫んだにちがいない。
木口 ええ、彼は、その気配を察するやいなや、「私は、地球は動くが太陽は不動な」と信奉したこともなければ、現にいません。それを証明する用意もできております」と叫んだわけですね。

池田 時代とはいえ、同じ人間のつくりあげたものでありながら、権威というものは、あまりにも恐ろしい。愚かなことだ。いつの時代でも、人間は賢くなって、権威や権力に絶対に屈してはならない。

木口 まったく、そう思います。人間の信念を、人間が裁くなんてことはできません。—— ともかく、ガリレオの証言は、そのときは、そのままカトリックの教義への屈伏であるかにみえた。しかし、その言葉は、そのままカトリック教会が、今日まで背負わなければならない、重い十字架になってしまったわけですね。

池田 まったく、そうだね。ガリレオは、長い長い歴史の公正なる審判に、すべてをゆだねたわけだ。

事実、それから八年間、彼は幽閉の身になりながら、いままで以上の情熱と闘志をもって研究と著作にあけ暮れている。

—— 三年後には、『新科学対話』を完成させていますね。また、時計の振子の発明をしています。

木口 その態度はいいですね。

池田 ですから、諸説がありますが、有名な「それでも地球はまわる」という発言をしたという事実は、ないようですね。だが、私はこう思う。

彼のただひたすら、人類への偉大なる遺産を残そうとした気迫をしのび、後世の人が、そうした言葉を残し称^{たた}えたのではないかと——。

—— なるほど。裁判の結果については、当時でさえ、誰もバチカンの勝利とは思わなかった。ただ、教皇庁がもっている絶大な権力を恐れて、それを口にするこ

しなかっただけのようです。

ガリレオの真意がわからなかった弟子達

木口　ところで、この裁判のなりゆきを聞いた、かのデカルトでさえ、それまで研究していた『光の本性について』（宇宙論）という論文を、あわてて机の引き出しにしま
いこんだ、というエピソードがあります。当時の弾圧は、そうとうなものだったので
しょう。

——　ガリレオの弟子たちも、ある者は師匠の真意がわからなかった。またある者
は、わが身がまきぞえをくらうことを恐れた。

池田　そうだね。いつの時代も、いつの社会も同じだよ。

人間は絶対に平等であり、自由である。長い歴史のうえからみるならば、みせかけの
権威やポーズなどは、民衆の意志の炎で焼けくずれてしまうことを、私は見ぬいてお

ります。

木口 まったく、先生のおっしゃるとおりです。この裁判から三五〇年の昨年、ローマ法皇が、全世界の科学者の代表をまえにして、ガリレオ裁判の誤りを、初めて宣言しておりますね。

—— 今回も帰国早々のお疲れのところ、長時間ありがとうございました。

残念ながら、この連載は、今回で終了することになります。

読者の方々も『仏法と宇宙』について、たいへんに理解を深めていただくことができたと思います。

池田 いやいや、なにぶん思索の時間もなかったし勉強の時間もなかったし、満足とはいえませんが、またなにかの機会に論ずることができれば、うれしく思います。

木口 私も本当に勉強になりました。長い間、まことにありがとうございます。

—— 長い間、読者の皆さまありがとうございました。また新しい対談をご期待ください。

あとがき

この企画は、月刊『潮』誌上で、十三か月間（一九八三年五月号～一九八四年五月号）にわたり、好評連載されたものです。毎号の対談は、池田先生の、多忙なスケジュールの合間をぬってお願いしたもので、回を重ねるごとに、多大な反響が寄せられました。

連載中は、いかにせん完璧に編集しえなかった面もあり、読者からも少々むずかしい展開がある、という指摘も受けました。

このたび、全三巻に上梓するにあたり、この点を、池田先生、また木口先生にお願いしたところ、快くその意をふまえてくださり、加筆などによって、より解りやすくしていただくことができました。

『仏法と宇宙』という深遠にして、壮大無比のテーマを、多くの読者とともに考える

という、当初の目的を達成することができたと思います。

両先生に厚く御礼申し上げます。

昭和五十九年三月十六日

編集部

注解

〈あ行〉

アインシュタイン (Albert Einstein 1879~1955)

ドイツ生まれの理論物理学者。相対性理論を確立。

一九〇五年に特殊相対性理論を、一九一五年に一般相対性理論を発表。のちに統一場理論の研究に努める。一九二一年、光量子の理論の研究で、ノーベル物理学賞受賞。

一念三千 いちねんさんぜん 一念とは、瞬間の生命をいい、三千とは

現象世界のすべてをいう。一念三千とは、一瞬の生命に十界を具し、十界は互具して百界、百界に十如是由は具して千如是、千如是に三種の世間を具し

て三千世間、つまり一瞬の生命のなかに、現象世界のすべてが欠けることなくおさまっているということ。(十界・十界互具・百界千如の項参照)

因果俱時 いんがくじ 一念の生命に因(原因)と果(結果)が同時にそなわっていることをいう。因果異時に対する語。たとえば春に種をまき(因)、秋に実がなる(果)場合。現象的には時間的差異があるが本質でみれば、種をまいたときに、すでに実がなるという結果を含んでいる(因果俱時)といえる。つまり、因は果を具し果は因に即して因果一体である。

因縁 いんねん 因と縁。結果を生ずべき直接の原因を因といい、因を助け結果にいたらしめるものを縁という。一切の現象は、因と縁が和合して初めて結果がもたらされる。

円融の三諦 えんゆうさんたい 円教で説く空・仮・中の三諦のこと。隔歴の三諦に対する語。おのおのが個々の独立

した真理として考える隔歴の三諦に対して、三諦のそれぞれが自己のなかに他の二諦をそなえ、三諦は常に即空・即仮・即中であるとたてるのが円融の三諦である。すなわち一実相・一切諸法すべて空仮中の三諦を欠けることなく兼ねそなえた円融円満の当体であることをいう。

〈か行〉

核力 かくりよく 原子核の構成要素である陽子と中性子の

間に働く強い短距離力のこと。陽子と中性子が狭い領域内にまとまっているのは、この力による。核力によって核子中間子相互作用の結合定数を決めるなど中間子論の定量的な支持が初めてえられた。**カニ星雲** 一〇五四年にあらわれた超新星爆発の残骸で、おうし座にあるガス星雲。ベピスによって発見されたもの。形がカブトガニに似ていたこと

が、その名の由来になっている。

ガリレオ(Galileo Galilei 1564～1642) イタリアの天文学者・物理学者・哲学者。近代科学の父。力学上の諸法則の発見、天体の研究など功績が多い。コペルニクスの地動説を是認したため、宗教裁判にふされた。主著『新科学対話』『天文学対話』など。

カント(Immanuel Kant 1724～1804) ドイツの哲学者。批判哲学の樹立者。ニュートン力学なども研究し、太陽系の構造と起源に関する論文を書いた。主著『純粹理性批判』『実践理性批判』『道德哲学原論』など。

空仮中の三諦 くうけちゅうのさんたい 空諦・仮諦・中諦のこと。諦は「あきらか」「つまびらか」の意。空諦とは万法の性分をいう。仮諦とは諸法は変化してやまず、因縁によって仮に和合しているということ。中諦とは空

でもなく仮でもない、文字・言語では表現できないありのままの實在のこと。この三諦は一つの實在を三つの観点から認識したものであり、分離して考えることはできない。すなわち三諦は一諦に含まれ、一諦は三諦によってとらえた實在の一面なのである。

九識心王真如の都 くしきしんのうしんによみやく 九識とは天台宗・華嚴宗等において、物事を識別する心の作用を九種に分けたもの。その第九識（阿摩羅識）あまらしきを心王とよぶ。真如は真実にして不変であるの意。また、心王の住するところの意で都といい、九識は生命の根本の真理であるゆえに心王真如の都という。

九七年問題 英領・香港の歴史は、南京条約（一八四二年）によりイギリスに割譲されたことに始まる。その後、当時の清朝政府との間に、九竜半島の残り全部と付近の島・海域を一九九七年まで租借

する条約を締結。その租借期間が一九九七年六月末にきれることをさす。

苦 生命活動の不快、苦しみをいう。樂に対する語。仏法においては、四苦八苦・四諦・十二因縁・三道などいろいろな角度から解明されている。

灰身滅智 けしんめつち 小乗教の理想とする境地で、一切の不幸の原因は煩惱にあるとし、そのよりどころである心身を共に滅してしまい、空の境地に入ろうとする教え。灰断ともいう。

原始星 恒星がうまれるまえの母胎となるガスや塵の凝集した天体。内部の密度は一樣ではなく、中心に近くなるほど高い。また、表面温度は太陽より低い。太陽の数百倍も明るい。

虚空会 こくうえ 法華經説法の会座の一つ。法華經は初めに靈鷲山会、それから虚空会、最後にまた靈鷲山会と二处で三回にわたって説法が行なわれた。そ

のうちの重要な説法（宝塔品から囑累品にいたる

経文）が虚空会で説かれた。仏も大衆も、すべて虚

空のなかに存在するため虚空会という。

五陰仮和合 五陰（色陰・受陰・想陰・行陰・識陰）

が、仮に和合して生命を構成していることをいう。

①色陰とは有形の物質のこと、②受陰とは感覚作

用、③想陰とは心におもいうかべる作用、④行陰

とはおもいからおこる行動、⑤識陰とは認識・識別

作用をいう。

〈さ行〉

三變土田 法華経見宝塔品第十一で、釈尊が三度

国土を變じて浄土となしたこと。すなわち凡聖同

居土（凡夫と聖者が同居している娑婆世界）・方便

土（声聞・緣覺・下位の菩薩が住する国土）・実報土

（上位の菩薩が住する国土）を清浄にし、一仏国土

としたことをいう。

色心不二 色と心が二にして不二であること。色

（色法）とは物質・肉体・外形的なもので、心（心

法）とは精神・心のはたらき・内在する力用のこ

と。色法すなわち外形としてあらわれた具体的な

相と、心法すなわち生命内奥の世界の二つが不二

であることをいう。

四土 四種類の国土のこと。四種仏土、四種国土と

もいう。一に凡聖同居土、二に方便有余土、三に

実報無障礙土、四に常寂光土である。

十界 仏法の立場から一個の生命体、生命現象を

解明したもので、瞬間瞬間の時間の流れのなかに

あらわれる生命の境地を十種（地獄・餓鬼・畜生・

修羅・人・天・声聞・緣覺・菩薩・仏）の境界に

分けたもの。

釈尊 釈迦牟尼世尊の略。釈迦の尊称。釈尊は過

去世における修行によって、三千年前にインドに出現し、十九歳のときに出家、三十歳で成道したとされる仏である。そして成道のときより五十年の間、八万法蔵はちまんほうぞうを説法し、最後の八年間で法華經二十八品を説いた。

宿業しゆくごう 過去世において、身口意しんくいの三業の積み重ねによってつくった業因のこと。よい宿業しゆくごう(善業)とわるい宿業(悪業)があるが、一般的にはわるい方の意味に使われる。悪業は、三大秘法の御本尊の力によって、よく転換することができる。

生滅滅已・寂滅為樂しやうめつめつち じやくめついらく 「生滅滅しやうめつめつし已おわつて寂滅じやくめつを樂らくと為なす」と読む。涅槃經卷十三などに説かれて

いる。生滅とは生より死までの人間の生涯をいい、滅已とは煩惱をたちきることをいい、寂滅は涅槃を意味し、為樂とは悟りをいう。つまり、生死にまわりつく煩惱ぼんのうをたちきり、到達する涅槃の世界

に、このうえない安樂があるという意味。

成住壞空じやうじゆうえくう 成劫・住劫・壞劫・空劫の四劫しきうのこと。宇宙・生命その他いつさいのものの流転をあらわす。成劫は成立・形成する期間、住劫は安定期間、壞劫は壞滅していく期間、空劫は壞滅が終わり、空となる期間をいう。

小乗教しやうじやうきやう 少数の人を短期間にわたってしか救うことのできない教え。大乘教に対する語。大乘教が自利利他の両面を満たす菩薩道を説くのに對して、小乗教では自己の悟りのみを目的とする声聞・緣覺えんがくの道を説く。

生老病死の四苦しやうらうびやうし 人の一生における根本的な四種の苦しみのこと。四苦八苦のなかの四苦のこと。
①生苦(生まれ出る苦しみ)。②老苦(年老いていく苦しみ)。③病苦(病気による苦しみ)。④死苦(死ぬことの苦しみ)。

諸行無常・是生滅法

「諸行は無常にして是れ生

滅の法なり」と読む。この世のあらゆる存在は、生と死を間断なく繰り返して移り変わり、決して同じ状態に止まることがない生滅の法であるということ。涅槃經卷十四の文。

スカイラブ 欧州宇宙機関(ESA)が開発。一九八五年からアメリカのスペースシャトルの貨物室に積み込んで打ち上げられる。科学者数人が作業できる広さがあり、各種の実験が行なわれる。スペースシャトル これまでの使い捨てロケットとは違い、回収して何回も使い、コストを低くするねらいで考案された人工衛星等の運搬機。ブースターと軌道船とからなり、軌道船は任務を終えた後に、回収される。アメリカは一九八一年から二二年にコロンビア号で四回の試験飛行に成功。

星間ガス 宇宙空間に星のほかには存在する薄いガ

スのこと。その元素組成は重量比七〇～七五パーセントが水素、二三～二八パーセントがヘリウム、残りはそれより重い元素からなる。

星間物質 宇宙に存在するガス状の物質。九〇パーセントは水素原子と分子から成っていて、残りの一〇パーセントはほとんどがヘリウム原子である。この星間物質の雲のなかで、星の誕生から爆発、そして新しい星への世代交代の過程が行なわれるため、重要な役割をもっている。

絶対3度K 物質をつくっている原子はたがいにならぬ動きをしていて、その運動の激しさを示す尺度が温度である。しかし、その運動は摂氏零下二七三度になるとなくなってしまう。これを絶対零度といいKと表わす。これを基準とすれば絶対3度Kは、摂氏零下二七〇度となる。

善知識 人に益をなし、仏道に導く有徳の善友を

いう。『摩訶止観』には外護、同行、教授の三種の善知識が説かれている。外護とは欠乏や畏怖を防ぎ、安穩に道を修することを得せしむるもの。同行とは心を同じくしてたがいに激励し、革新し、切磋琢磨しあうもの。教授とは巧みに法を説いて、人の心を転破するものをいう。

素粒子 そりゅうし 物質を構成している究極の粒子。次の三つの族に分類される。①レプトン（弱粒子）Ⅱ電子、ニュートリノなど。②ハドロン（強粒子）Ⅱ陽子、中性子など。③ゲージ粒子Ⅱ①と②の間の力を媒介する粒子。これらの粒子が、さらに小さな粒子からできている可能性が示されつつある。

〈た行〉

ダーウィンの進化論 生物進化の仕組みを説明したダーウィンの説。生物は神によって個々に創造

されたものではなく、きわめて簡単な原始生物から進化してきたものであるという理論。

大乘仏教 だいじようぶつきよう 小乗教に対する語。大乘とは大きな乗りもの（小乗）より多くの人々を理想境へと運びゆく意である。利他（他を利益すること）の菩薩道を説き、一切衆生を成仏させるために説いた教えをいう。

中性子 陽子と共に原子核を構成している粒子の一つ。陽子より少し大きい質量を有し、電荷をもたない。また、物質の透過性が強く核反応をおこしやすい。一九三二年、イギリスのチャドウィックが発見。

超新星 星の進化の最後の段階で、大爆発がおこるため非常に光度の高い光のエネルギーを放射するもの。急に輝き出すので新星とされるが、新しい星が生まれるわけではなく、逆に星の最期の状態

をいう。おうし座新星、カシオペア座新星など。

電波望遠鏡 天体から放射される宇宙電波、太陽電波などの電波を測定する装置。微弱な電波を検出するため、巨大なアンテナと高性能の受信増幅器が必要。世界最大としては、西ドイツのマックス・プランク研究所に口径一〇〇メートルのパラボラアンテナをもったものがある。

トインジャー(Arnold Joseph Toynbee 1889～1975) イギリスの歴史学者。人間の自由な意志と行動による歴史・文化の形成を主張し、鋭い文明批判を展開した。主著『ギリシアの歴史思想』『歴史の研究』『試練に立つ文明』など。

とだじょうせい
戸田城聖(1900～1958) 創価学会第二代会長。石川県に生まれ、北海道で少年期をすごす。その後上京し、創価学会初代会長牧口常三郎に師事。戦時中、治安維持法違反で牧口会長と共に投獄される。

牧口会長は獄死し、戸田は二年間の獄中生活をおくる。戦後、創価学会再建にあたった。著書に『推理式指導算術』『戸田城聖全集』など。
貪・瞋・癡・慢・疑 とん じん ち まん ぎ 衆生の心身を煩わし悩ませるすべての煩惱の根本となるもの。五鈍使のこと。五利使と合わせて十使という。貪はむさぼり、瞋はいかり、癡はおろか、慢はおごりたかぶり、疑はうたがいをあらわす。

〈な行〉

にちかんしょうにん
日寛上人(1665～1726) 日蓮正宗第二十六世。日有上人とともに中興の祖といわれる。主な著書に御書五大部の文段・その他の御書の文段・講義などがある。

にんのうきよう
仁王経 全二巻。鳩摩羅什の訳。仁王護国般若波羅蜜經の略称。正法が滅して思想が乱れたときに

おこる難を示し、これをのがれるためには般若(菩薩の智慧)を受持することであるとして、菩薩の行法を説いている。

涅槃經 ねはんぎょう 釈尊が跋提河ばつたいがのほとり沙羅双樹さらそうじゆの下で、

涅槃にさきだつ一日一夜に説いた經。内容は涅槃經のなかに「秋收冬藏しゅうしゅうとうざうして、さらに所作しよさなきがごとし」と、みずから位置を判じているように、法華經の眞実なることをかさねて述べた經典で、滅後の護持を説いた法華經の流通分である。

へは行

パグウォツシュ会議 一九五五年にラッセル、アインシュタイン、湯川秀樹ら十一名が、核戦争の危機に科学者が社会的責任を果たすようによびかけた「ラッセル、アインシュタイン宣言」にもとづき、五七年カナダのパグウォツシュで開かれた科

学者の国際会議。

八万法蔵 はちまんほうざう 釈尊が説いたすべての教えをいう。八

万は実数ではなく、多数の意。八万四千の法門ともいい、八万蔵と略すこともある。また法蔵は、宝蔵とも書く。

八相作仏 はつそうさぶつ 八相成道ともいう。仏が衆生救済のため世に出る場合、その一生に八種の特種な相のあることをいう。八相とは、下天げてん(天から下る)・託胎たくたい(母胎に宿る)・出胎しゅつたい(誕生)・出家しゅつけ・降魔かうま(成仏の障害となる魔を降す)・成道じやうどう・轉法輪てんぽうりん(説法)・入涅槃にゅうねはん(入滅)をいう。

パルサー 一秒程度以下という、きわめて短い周期で回転する中性子星は、その周期で赤道面の方

向に強い電波やX線を放つ。これがパルサーで、一九六七年にイギリスのヒューイッシュ、ベル嬢により発見された。

光ファイバー ひかり 光を用いて信号・映像などの情報を送るために設計されたもの。グラス・ファイバー（ガラス繊維）の一種で髪の毛のようにこまかい。ファイバーが曲がっても光がその中を進む特性をもつ。電気通信より数万倍の情報が送れるうえ、安価で軽量という特徴がある。

ビッグバン 宇宙は過去のある時点に、きわめて小さく、超高温・超高密度の状態から爆発的に開ひらくき、膨張速度を減じながら現在にいたっているというビッグバン説で、宇宙創世期の初めに起こったとされる大爆発のこと。

仏国記 ぶつこくき 五世紀初め、東晋の僧法顕ほつけんが記しるした西域、インド旅行見聞記。一卷。インド古代の地理・歴史の研究資料となっている。

ブラック・ホール 大質量・超高密度で、大重力のため空間がひどくひずみ、光すら脱出できず、なに

もかもとりこんでしまう天体。質量の重い星が、一生の終末に達して重力により崩壊したものとされる。

浮力の原理 ふりよく アルキメデスが発見した「浮力は物体のかわりにおきかえた流体に働く重力と等しい大きさをもつ」という原理。

法華経 ほけきょう 釈尊が説いた八万法蔵の諸経のうち第一の經典。通常、中国の鳩摩羅什くまらじしゅうが訳した『妙法蓮華経』八卷二十八品のことをさす。

法身・般若・解脱の三徳 ほつしん はんにや げだつ さんとく 法身とは、仏の清浄な生命それ自体であり、般若とは、仏の智慧である。解脱とは、仏のふるまい、幸福な姿のことで、法身・般若の二徳がいつしよになり、生死の苦しみから脱却した状態をいう。

煩惱 ぼんのう 人間の心身を煩わづらわし悩ませる種々の精神作用のこと。惑わく・随眠ずいみんとも訳す。二種に大別できる。

①根本煩惱。すべての煩惱の根本になるもので、貪・瞋・癡・慢・疑の五鈍使と有身見・辺執見・邪見・見取見・戒禁取見の五種の悪見など。②随煩惱。根本煩惱に付随するもので、放逸・懈怠・不信などの二十種をいう。

へま行

末法 まっぽう 三時（正法時・像法時・末法時）の一つ。釈尊滅後二千年以降のことで、鬪諍堅固・白法隠没とされ争いが絶えず、釈尊の仏法が効力をなくしてしまふ時代をいう。

マゼラン星雲 南天のかじき座ときよしちよう座に、それぞれ位置する大マゼラン雲と小マゼラン雲の総称。マゼランが世界周航のとき発見した銀河系外星系で、肉眼ではボウツとした雲のようにみえる。星雲中の変光星から距離が求められた天

文学史上最初のもの。日本からはみえない。

無上宝聚不求自得 むじょうほうじゆふくじとく 「無上の宝聚、求めざるに自

ら得たり」と読む。法華經信解品第四の文。宝聚は

宝珠とも書く。宝聚は宝の聚りのことあつまで、無上宝聚

とは一念三千の法理、末法では三大秘法の御本尊

のことをさす。不求自得とは、求めざるにほしいま

まにえたりということことで、無上の宝聚が無始以来、

われわれの生命のなかにあり、生命それ自体がす

でに、一念三千の当体であるとの意である。

無明即法性 むみょうそくほつしやう 無明（迷い）と法性（悟り）は、別

別のものではなく、一体不二であるということ。無

明・法性ともに衆生の一念にそなわっていて、悪法

に縁すれば無明となり、善法に縁すれば法性とな

るという瞬間瞬間の生命活動のあらわれであるゆ

えに、無明即法性という。

〈や行〉

湯川秀樹(1907～1981) 理論物理学者。一九三八年に中間子理論を発表。中間子存在の予言が実証されて、湯川粒子と名づけられた。一九四九年、日本初のノーベル物理学賞を受賞。

陽子 略号P。水素の原子核。絶対値が電子と等しく正の電荷をもち崩壊はしない。質量は電子の一八三六倍で、中性子とともに原子核の構成要素である。

〈ら行〉

羅刹らせつ 梵語。羅刹婆しや・羅叉婆しやしやとも書き、女性(羅刹女)は羅刹斯し・羅叉私しやしと書く。一切経音義によると、男は醜く女は美しいが、ともに凶悪で人の血肉を食い、飛行し地を走るとされる。また俱舍論・大

智度論では、地獄に住む獄卒の一つに数えられている。

量子力学りようしりきかく 原子・素粒子などのミクロの世界を支配する物理法則を中心にした理論体系。一九二〇年代にハイゼンベルク等によって完成。量子力学では、ある瞬間に粒子がどの位置にいるかは不定で、いろいろな位置にいる確率がいえるだけである。このように確率が本質的な役割をもつのが量子力学の特徴である。

靈山会りようせんえ 釈尊が法華経を説いたとされる靈鷲山りようじゆせんの会座のこと。

注1 一八六〇年咸臨丸で幕府の遣米使節に随行おもむしてアメリカに赴いたのをはじめとして、三度にわたり欧米を視察し、近代思想の影響を受けた。

注2 一九七四年五月十八日聖教新聞社、一九七五年五月十九日フランスのマルロー氏宅で二回の対談を行なう。芸術・文化論などをはじめ、多岐の

付記 『注解』作成にあたっては、以下の文献を参考にいたしました。

- 『英和科学用語辞典』 崎川範行監修 芦ヶ崎伸之・増山信司編集（昭和五一年一月九日、講談社刊）
『岩波理化学辞典』（昭和五八年二月五日、岩波書店刊）
『広辞苑』（昭和五八年二月六日、岩波書店刊）
『コンサイス人名辞典』 日本・外国編（昭和五一年三月二〇日、三省堂刊）
『現代科学思想事典』 伊東俊太郎編（昭和四六年一月二八日、講談社刊）
『現代天文学小事典』 高倉達雄監修（昭和五八年三月二〇日、講談社刊）
『仏教哲学大辞典』（全六巻） 池田大作監修 創価学会教学部編（昭和三九年一月一七日、聖教新聞社刊）
『日本世界人名辞典』（昭和五一年一月一日、日東書院刊）
『日蓮大聖人御書辞典』 池田大作監修 創価学会教学部編（昭和五一年一月一八日、聖教新聞社刊）
Photo by, © The Cerro Tololo Inter-American Observatory, © 1980 Anglo-Australian Telescope Board,
© Mount Wilson and Las Campanas Observatories, © NASA.

発迹顕本 ② 118
法性 ③ 178, 181
法性の智火 ② 16
堀田善衛 ② 111
法報応の三身 ① 82
仏 ① 108
ポナムペルマ ② 255, 258
本地難思 ① 201
煩惱 ③ 174
煩惱即菩提 ③ 182

<ま行>

前嶋信次 ③ 305
マックスウェル ③ 167, 201
末那識 ③ 237
マルクス ② 84
マルロー ③ 233
密教 ① 203
身の病 ② 129
妙 ① 161
妙覚 ③ 181
妙の三義 ② 248
無 ③ 115
無記・無作 ① 32
無著 ① 259
無上宝聚不求自得 ③ 127
無明 ③ 178, 181
無明即法性 ③ 183
無明惑 ③ 177
紫式部 ② 78
無量義経 ① 72
目連 ① 95, ② 56, 154
モノー ① 200, 206

モンゴメリー ③ 184
文上 ① 80
文証 ② 51
文底 ① 80

<や行>

有人宇宙実験室 ① 68
湯川秀樹 ① 20, 40, ③ 53, 168
陽子 ③ 167, 263
陽子崩壊実験 ③ 264

<ら行>

ライド ① 225
羅什 ③ 212
羅刹 ③ 60
ラッセル, アインシュタインの平和宣言 ③ 154, 203
ラリ ③ 219, 220
リーザリー ③ 152
理証 ② 51
立正安国論 ② 113
歴劫修行 ③ 187
量子力学 ③ 64, 65, 68
理論天文学 ③ 38
臨終 ③ 243
ルキアノス ③ 100
ルネ・ユイグ ② 40, ③ 207
ローウェル ③ 98, 218
六識 ③ 186
六道輪廻 ① 98
ロダン ③ 30
六根清浄 ① 197

肉眼 ② 54
二処三会 ① 24
日寛上人 ③ 243
日持 ③ 305
日食 ① 109, 243
ニュートリノ望遠鏡 ② 47
ニュートン ① 22, 38, 85, 128, 234
② 59, ③ 167, 168
如来 ① 143
人界 ① 98
人間革命 ② 252, ③ 185
人間性原理 ① 39
涅槃経 ③ 60
念仏 ② 175

〈は行〉

場 ③ 241, 242
ハーシェル ③ 260
パイオニア 10 号 ① 193
バイキング 1 号 ③ 223
ハイゼンベルク ② 96
ハウイン ① 101
バグウォッシュ会議 ③ 154
白色矮星 ② 90, ③ 62
芭蕉 ① 120
パスカル ① 75
バスコ・ダ・ガマ ③ 285
パスツール ② 21
八大地獄 ① 92
ハッブル ① 179
埴谷雄高 ② 46
場の理論 ③ 117
林忠四郎 ① 20, ② 256, ③ 40
パルサー ② 16, ③ 257
ハレー彗星 ② 98, 101, 104, 106
光ファイバー ③ 290
ピタゴラス ② 70
ビッグバン ① 18, ③ 253
病気 ② 126
ピラミッド ③ 294

広瀬秀雄 ② 122, 198
フェルミ ③ 167
不確定性原理 ② 95
不可思議境 ② 17
福沢諭吉 ③ 208
普賢経 ① 209
伏見康治 ① 20
藤原定家 ② 110, ③ 259
仏眼 ② 60
仏性 ③ 249
仏滅 ② 176
ブラック・ホール ① 87, 130,
③ 104, 255
プラトン ② 70
浮力の原理 ③ 54
ブレイク ③ 32
フロイト ③ 238
ヘーゲル ② 84
ペーターソン ② 229
ページ ③ 185
ベルグソン ③ 33
変光星 ② 132
ポーア ② 96
ホーキング ① 198
ホーキングズ ① 241
ポール・デービス ③ 67
ホイップル ② 123
ホイル ② 187, ③ 213
望遠鏡 ② 42, 46
法器 ② 76, ③ 222
法眼 ② 60
方便現涅槃 ② 86
方便品 ① 80
法味 ② 140
法華経 ① 24, 72, 79, 81, 182, 209,
② 17, 19, 244, ③ 88, 101, 111
星下り ② 191, 200
星の死 ③ 63
星の寿命 ② 87
星の爆発 ② 30

赤外線望遠鏡 ② 46, 47, ③ 42, 114
赤色巨星 ② 90, ③ 110
世親 ① 258
雪山童子 ③ 60
絶対3度K ③ 261
絶対平和主義 ③ 301
相対性理論 ② 250
囑累品 ② 197
蘇生 ② 250
素粒子 ① 40, ③ 263

〈た行〉

ダーウィンの進化論 ① 15
諦 ③ 121
太陰暦 ③ 192
太衍暦 ③ 194
大雄 ③ 179
醍醐天皇 ③ 232
大乘仏教 ① 24, 174, ③ 179, 180
大統一理論 ① 256
大爆発 ① 18
太陽系の崩壊 ③ 254
太陽の最期 ③ 108
太陽の寿命 ② 88
太陽の誕生 ③ 47
太陽暦 ③ 82
第六天の魔王 ③ 181
竜口の法難 ② 116, 193
タンパク質 ① 159
地球外知性探査 ① 115, 173
地球外知的生物 ① 76, ③ 92
地球の最期 ③ 106
地球の寿命 ② 88
畜生界 ① 97
地上絵 ③ 277
地水火風の四大 ② 129
地動説 ③ 295
知の変革期 ① 61
チャンドラセカール ① 20
③ 71

中有 ② 136
中有の道 ② 135
中性子 ③ 167, 263
中性子星 ② 16, ③ 63, 66, 258
中諦 ③ 123, 126
超新星 ③ 113
超新星爆発 ③ 259
追善 ② 140
月の石 ② 28
デュボス ② 253
テレシコワ ① 225
天界 ① 99
伝教 ② 17
天眼 ② 53
天体 ② 31
天台 ① 25, 36, 209, ② 17
天体の距離 ② 51
天体の写真 ② 48
天人五衰 ① 99
天王星 ③ 260
電波望遠鏡 ② 46, 47, ③ 114
天文学 ① 18, 254
トインビー ① 24, 38, 205, 218,
② 75, 241, ③ 103, 302
道理 ① 222
特殊相対性理論 ① 103, 140
ドストエフスキー ② 235
戸田城聖 ① 28, 74, 176, ② 85, 157,
264, ③ 111, 151, 156, 158, 248
毒氣深入 ② 160
葬 ③ 227
友引 ② 176
トルストイ ① 204
ドレイク ① 186
貪・瞋・癡 ② 157

〈な行〉

難波 ② 207
南原繁 ② 252
ニーチェ ① 45

③ 226, 228, 231
四悪趣 ① 98
紫外線 ② 259
自我偈 ① 82, ② 195
色心不二 ① 95
死刑 ② 76
四劫 ② 92
地獄界 ① 92
自殺 ② 72, 74, 76, 133
四聖 ① 100
死生観 ② 169, 181
四大 ③ 41
自体顕照 ① 233
四大州 ① 33
十界 ① 25, 91, ③ 241
実教 ① 203
自転 ② 186
四天下 ① 174
死の思想 ② 241
死の瞬間 ② 239
司馬遷 ① 242
島崎藤村 ② 230
四門遊観 ② 243
ジャイパール ③ 190
釈尊 ① 24, 33, 176, 209, ② 83, 243, 244, ③ 60, 179
折伏 ① 209
ジャストロー ② 263
舍利弗 ① 80
宗教戦争 ③ 300
十字軍 ③ 299
重力波望遠鏡 ② 47
重力平衡問題 ③ 35
宿業 ① 110, ② 167, ③ 126
出離生死の法 ② 244
須弥山 ① 33, 86
寿命 ② 165
修羅 ① 97
寿量品 ① 80, 81, 182, ② 61, 86, 166, 195

定業 ② 167
生死 ② 63, 67, 81, 244, 246, 261
摂受 ① 209
成住壊空 ① 253, ② 91, 94
小乗教 ① 258
小乗仏教 ③ 179
成仏 ③ 52
正報 ② 97, 264
生滅滅已・寂滅為樂 ③ 60
生老病死 ① 32
昭和 ③ 24
諸行無常・是生滅法 ① 134, ③ 60
ショッホ ② 200
シルクロード ③ 291
ジンギス汗 ③ 296
身・口・意の三業 ① 58
真空冥寂 ② 17
人工衛星 ③ 160
人工心臓 ① 133
塵沙惑 ③ 176
塵点劫 ① 87
彗星 ② 32, 102, 109
水大 ③ 42
水爆 ③ 171
スカイラブ ③ 86
スキヤパレリ ③ 217
ストーン・ヘンジ ① 240
スピノザ ③ 174
スペースシャトル ① 67, ③ 281
スペースラブ ① 68
スペクトラム型 ① 190
セーガン ① 13, 20, 35, 153, ③ 143, 286
星間ガス ② 257, ③ 37
星間物質 ③ 37
星間分子 ① 154, 157
星座 ① 244, ③ 95
星表 ② 200
生命の起源 ② 255
生命の誕生 ① 16

ガリレオ ① 85, 178, ② 43, 185
③ 162, 308, 316
ガリレオ裁判 ③ 308, 312
カレルギー ② 70
環球 ③ 306
勸持品 ② 120
元旦 ③ 19
カント ① 22, 28, 38, ② 84, ③ 101
カント＝ラプラスの星雲説 ② 256
元品 ② 162
鬼神 ② 114
キッシンジャー ③ 142
帰命 ① 53, 58
97 年問題 ③ 76
境淵無辺 ① 81
キリスト教 ① 45, 206
銀河系 ③ 111
金星 ② 182, 191
空 ② 93, ③ 116, 118, 132
空仮中の三諦 ① 73, 82, 253, ③ 120,
127
空諦 ③ 121, 126
久遠 ① 146
久遠即末法 ① 148
九識 ③ 188, 244
九識論 ③ 237
具足・円満 ② 249
クラーク ② 21
クラウド ① 184, 196
グレゴリオ暦 ③ 82
灰身滅智 ③ 179
ケストラー ② 74
仮諦 ③ 121, 126
ケプラー ② 41, 58, ③ 213, 288
現業 ③ 126
原子 ③ 165
原始星 ③ 48
源氏物語 ② 78
現証 ② 50
見思惑 ③ 175

原始惑星 ② 257
原水禁宣言 ③ 151
原爆 ③ 171
業 ③ 125, 239, 242
劫焼 ③ 255
恒星間ラムジェット ① 139
公転 ② 187
光度 ② 98
光年 ① 78, 101
虚空会 ① 24
五眼 ② 54, 64
心の病 ② 131
五時八教 ① 176
五濁 ② 161
五濁悪世 ② 161
ゴダード ③ 16
国旗 ② 35
小林秀雄 ① 36, ② 242
コペルニクス ③ 213
胡耀邦 ③ 78
暦 ③ 193
コルダー ① 88, 92, 163
権教 ① 203
勤行 ② 18
渾天儀 ① 250
根本惑 ③ 177

〈さ行〉

斎藤茂吉 ② 231
悟り ② 84
三悪道 ① 98
三界の相 ② 62
三国志 ① 30
三証 ② 51
三世 ① 143
三千大千世界 ① 86, 181, ③ 304
三毒 ② 160
三惑 ③ 175
死 ① 36, ② 67, 78, 80, 85, 133, 137,
147, 171, 173, 178, 230, 233, 235,

※①、②、③は巻数をあらわす

〈あ行〉

- アームストロング ③ 16
 アインシュタイン ① 23, 27, 41, 46, 89, 103, 126, 129, 140, 255, ② 250, ③ 33, 117, 169, 203
 芥川龍之介 ③ 215
 阿育大王 ② 76, ③ 301
 アナロジー ① 61
 阿頼耶識 ③ 239
 アリストテレス ③ 289
 アルキメデス ③ 54
 アレキサンダー大王 ③ 291
 アンソロピック・プリンシプル ① 39
 アンドロメダ星雲 ① 122
 安樂行品 ② 197
 E. T. ① 76, 115, 153
 一念 ① 24
 一念三千 ① 23, 25, 73
 井上靖 ① 21, 120
 析り ① 51, 58, 110
 因 ③ 249
 因果 ③ 250
 因果俱時 ① 145
 隕石 ② 22, 26
 因縁 ③ 120
 ウェルズ ③ 216
 宇宙 ① 38, 142, 250, ③ 253
 宇宙開発 ③ 283
 宇宙的宗教感情 ① 42, 45
 宇宙膨張説 ① 41
 宇宙遊泳 ③ 200
 宇宙連絡船 ① 67, 225
 ウラシマ効果 ① 103, 124, 138, 150
 閏月 ③ 191
 永遠即瞬間 ① 144

- 慧眼 ② 57
 壊劫 ③ 256
 依正不二 ① 61
 エネルギー ③ 258
 エネルギー不滅の原理 ① 145
 榎本武揚 ② 22
 依報 ② 97, 264
 縁 ③ 248
 縁覚 ① 128
 エンケ彗星 ② 121
 円融円満 ① 47
 円融三諦 ③ 126
 オウムガイ ② 190
 織田信長 ③ 163
 陰陽道 ② 176
 怨霊 ② 174

〈か行〉

- 我 ① 71, ③ 131, 236, 242
 カー ③ 83, 86
 開 ② 249
 ガウスの定理 ① 47
 科学と仏法 ① 27
 餓鬼 ① 95
 核 ③ 124, 165, 171, 263
 核エネルギー ① 135, ③ 164
 核分裂 ③ 171
 核兵器 ③ 144
 核融合 ③ 171
 核力 ③ 167
 火星 ③ 209, 214, 222
 火星人 ③ 216, 217
 我即宇宙・宇宙即我 ① 39, 62
 火大 ③ 45
 カニ星雲 ③ 108, 257, 259
 ガモフ ① 40

著者略歴

創価学会名誉会長、創価学会インタナショナル会長、日蓮正宗法華講総講頭。富士短期大学経済学科卒業。創価大学・(財)民主音楽協会・公明党他の創立者。

1983年、国連平和賞受賞。モスクワ大学・ソフィア大学名誉博士。北京大学・サンマルコス大学名誉教授。

主な著書、『池田会長全集』(全10巻)『人間革命』(現10巻)『21世紀への対話』(A・トインビーとの対話集)『生命を語る』(全3巻)『人間革命と人間の条件』(A・マルローとの対話集)など多数。

「仏法と宇宙」を語る

検印廃止

第三巻

定価 一〇〇〇円

昭和五十九年五月三日 初版

昭和五十九年六月五日 五刷

著者 池田大作

発行者 富岡勇吉

発行所 株式会社 潮出版社

電話 東京 (03) 230 230 〇七四一(販売部)

振替 東京 一四六八(編集部)

郵便番号 一〇二

(乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替
えいたします。)

印刷 図書印刷(株)

製本 (株)鈴木製本所

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合は予め小社あて許諾を求めて下さい。